

I 2016 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016 年度大学評価結果総評】

大原社会問題研究所は間もなく創立 100 周年を迎える伝統ある研究所であるが、現在も積極的に研究・社会貢献・社会連携活動を推進し、研究成果を広く発信するなど、その活動は高く評価される。

現在、科研費による研究成果はオープンアクセスジャーナルで発表することが推奨されている中、大原社会問題研究所は成果の学外発信も活発で、同研究所のウェブサイトより成果資料の一覧リスト及び、ジャーナル等刊行物資料の一部の全文を公開している。さらに、所蔵資料のアーカイブ化を実施中で、順次公開していることは高く評価される。

また、質保証活動は全学一体となった取組であり、PDCA サイクルを回すとともに、各種委員会における質保証活動の内容が見えるよう、資料の整備なども期待したい。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

- ・研究所定期刊行物である『日本労働年鑑 第 86 集』（6 月）と『大原社会問題研究所雑誌』（月刊）を刊行した。大原雑誌については掲載論文、書評の全文を筆者の許可を受けて研究所WEBサイトで公開している。近年刊行の『労働年鑑』についても出版社と相談をしながら、公開可能なものは研究所WEBサイトで公開をしていく。
- ・100 周年記念事業委員会・100 年史編纂委員会を 2 カ月に 1 回のペースで開催し、100 年史編纂の具体的構想の検討を深め、また研究所WEBサイト上に 100 周年サイトを開設することを決めた。
- ・大原社会問題研究所第 4 次中期計画（2016 年度～2020 年度）が 7 月の運営委員会で承認された。本計画の特徴は、環境アーカイブズが新たに盛り込まれたこと、体系的な資料整理が強調されたこと、新たな領域の研究や研究成果の国内外への発信が強調されたことである。中期計画の目標がどの程度達成されているかについて、今後運営委員会で定期的に審議する。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

大原社会問題研究所では、積極的な学外発信を継続しており、高く評価できる。定期刊行物として、『日本労働年鑑第 86 集』（6 月）と『大原社会問題研究所雑誌』（月刊）が刊行された。また、これらの刊行物のウェブサイトでの公開にも、積極的に取り組んだ。

質保証は、運営委員会、研究員総会、研究員会議、環境アーカイブズ定例会議、事務会議、資料事務会議、の各会議が担っている。

II 自己点検・評価

1 内部質保証

（1）点検・評価項目における 2016 年度の現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【2016 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

- ・運営委員会：専任、兼担研究員（合計 12 人＋事務方オブザーバー）から構成される研究所意思決定機関であり、8 月を除き毎月 1 回（計 11 回）開催された。研究所の年間活動計画／中期計画、諸シンポ・イベントの内容、研究プロジェクト、出版計画、研究員や研究補助員（RA）の委嘱、共同利用・共同研究拠点申請、研究所規程改定等が審議され、また研究所通常業務やイベントについて報告が行われた。16 年度の運営委員会の平均出席率は 75%であった。
- ・研究員総会：毎年 2 月末に開催され、専任・兼担・名誉・兼任・客員・嘱託各研究員および RA が出席する。16 年度は 2 月 22 日に行われ、34 人が出席した。所長より活動報告が行われ、それに対し意見交換が行われた。
- ・研究員会議：所長、副所長、専任研究員、兼任研究員により構成される会議で、8 月を除き毎月 1 回開催された。所長が運営委員会報告を行い、各研究員が担当している業務の進捗状況を報告した。また研究所の業務遂行における課題について意見交換をした。
- ・環境アーカイブズ定例会議：専任研究員、RA、環境アーカイブズの臨時職員より構成され、3 カ月に 1 回開かれた。各担当者の資料整理状況、広報活動の状況等の報告と、業務上の課題について意見交換を行った。
- ・事務会議：事務会議は、所長、副所長、専任職員、嘱託職員、臨時職員から構成される「拡大事務会議」と専任研究員（副所長を含む）、専任職員、嘱託職員から構成される「事務会議」の 2 種類がある。どちらも 8 月を除く毎月 1 回開催された。前者では、全職員に研究所全体の方針や動向について情報共有し、同時に閲覧対応や資料整理等の実務上の課

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

題について意見交換した。後者では、研究所運営の具体的な課題（予算執行、資料受贈の可否、資料整理の方法等）について意見交換が行われた。

- ・資料事務会議：専任研究員、嘱託職員、臨時職員により構成され、原則毎月3回開催された。資料整理、データベース作成、資料の扱い方法等の実務的課題について、意見交換を行った。

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
特になし	

【この基準の大学評価】

大原社会問題研究所の質保証は、運営委員会、研究員総会、研究員会議、環境アーカイブズ定例会議、事務会議、資料事務会議、の各会議が担っている点について、評価できる。

質保証活動を第三者が客観的に検証できるように、既存の委員会のうち質保証を担う委員会を特に定め、その会合のいずれかの回で、明示的に、質保証について扱い、結果を自己点検・評価に反映させてはどうか。もしくは、質保証のための委員会を別途、設置してはどうか。

2 研究活動

【2017年5月時点における点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

2.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。
2016年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。
①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）
※2016年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。 ①第29回国際労働問題シンポジウム：グローバル・サプライチェーンにおける労働の課題（共催：大原社研、ILO駐日事務所）（2016年10月4日、14時～17時10分、於：市ヶ谷キャンパスボワソナード・タワー・スカイホール、参加者106人） 内容：シンポジウムは、第105回ILO総会における第4議題「グローバル・サプライチェーンにおけるディーセント・ワーク」を取り上げた。構成は、15年のシンポで採用した二部構成を継承し、第1部では、討議に参加した政府および労使の代表から、ILO総会で行われた議論や日本が発信した内容についてご報告をいただいた。第2部では、2人の研究者から当該テーマにかかわるご講演をいただき、フロアからの発言も含めてディスカッションを行った。 ②シンポジウム：人口減少下の労働社会（共催：大原社研、日本労働社会学会） （2016年10月30日、10時30分～16時、於：法政大学多摩キャンパス経済学部棟305教室、参加：約50人） 内容：「少子高齢化社会」による人口減少が現実のものになるなか、とくに労働社会では労働力の減少や高齢化が進むことによって、これまでの働き方・働かせ方が変容を迫られている。本シンポは、（1）日本企業の変容、（2）女性労働、（3）高齢労働者、（4）外国人労働の4つの論点から報告が行われ、それに対してコメンテーターからコメントが出された。その後、フロアを交えて討論を行った。 ③第8回大原社研シネマ・フォーラム（主催：大原社研、2016年11月30日、17時～19時40分、於：多摩キャンパス・エッグドーム5階ホール、参加者50人） 内容：「抗い 記録作家林えいだい」を上映した。映画上映の後、西嶋真司監督と慎蒼宇社会学部准教授のトークを行い、参加者も交えて議論した。 ④国際交流講演会：（6月29日、15時～17時、於：大原社研会議室） テーマ：Gender and the Organization of Working Time in the United States and Western Europe 内容：Elaine McCrate氏（Associate Professor, University of Vermont）が講演を行い、サービス経済の拡大や新自由主義経済の進展に伴う生産や流通の柔軟化によって生じた予測不可能な勤務スケジュールの国際比較（欧米諸国の比較）を論じた。その後参加者と意見交換を行った。（逐次通訳：鈴木玲） ⑤国際交流研究会（11月5日、14時～18時、於：東京大学経済学研究科棟12階・第1共同研究室、参加者11人）

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

テーマ：企業パターナリズムの国際比較

内容：ピョン・ホリビィ氏とクリステル・エリクソン氏（エーレブロー大学教授）が” Trust, loyalty and negotiations” を、齊藤佳史氏（専修大学経済学部教授）が「フランス企業パテルナリズムに関する研究状況」を、榎一江氏が「日本におけるパターナリズムと産業福利」について報告した後、報告者と参加者で議論を行った。（逐次通訳：鈴木玲）

⑥公開講演会（研究員総会と同日開催）（2月22日、15時～17時、於：多摩キャンパス総合棟4階第3会議室、参加者約40人）

テーマ：「失業対策史研究を振り返る」、講演者：加瀬和俊氏（帝京大学教授、前東京大学社会科学研究所教授）

内容：加瀬氏は講演で、戦前期における失業対策（失業救済事業と失業保険構想）、失業統計調査と問題点などを議論し、そのうえで戦後の失業分析への含意について述べた

⑦月例研究会

毎月一回開催される月例研究会を一層充実させるべく、月例研究会企画担当者（榎専任研究員）を決め、報告者を積極的に募り、市ヶ谷での開催を試みるなど柔軟に実施して活性化を図った。Twitter 等での宣伝にも努め、学外からの研究者、市民、ジャーナリストの参加も増えた。月例研究会開催日、報告者、テーマは以下のとおりである。

- ・4月16日：西田善行（社会学部兼任講師）「環境・原発問題をめぐる映像資料整理の意義と課題」、野口由里子（RA）「環境アーカイブズにおけるミニコミ資料利用の展開と可能性」
- ・5月11日：高瀬久直（兼任研究員）「1945年から60年代までの日米財界関係」
- ・6月22日：金直洙（客員研究員）「韓国における労働安全衛生運動と専門知識の政治」
- ・7月1日（子どもの労働と貧困プロジェクトと共催）：江沢あや（ライデン大学）「母子世帯の口述史からみた家族と階層」（市ヶ谷で開催）
- ・8月3日（環境・労働問題研究会と共催）：Felix Jawinski（客員研究員）「Nuclear Labor(ers) in Contemporary Japan」、コメンテーター平林祐子（都留文科大学）
- ・9月21日：飯田未希（客員研究員）「美容＜場＞の誕生——明治末から大正中期における髪結の作家性（authorship）の成立」
- ・10月5日：藤原千沙（専任研究員）「貧困問題からみた制度派労働研究史」
- ・11月9日：下野恵子（客員研究員）「EPAによる外国人看護師・介護福祉士の受入政策の問題点」
- ・12月14日：榎一江（専任研究員）「The International Association of Labour History Institutions (IALHI) 第47回大会（ヘルシンキ）について」
- ・1月18日：鈴木玲（専任研究員）「アメリカ労働運動の公害問題への取り組み」
- ・3月4日：永田瞬（客員研究員）「外国人技能実習生の基幹労働力化とその含意」（市ヶ谷で開催）

⑧16年度に活動が行われた大原社研専任研究員、兼担研究員主催の研究会、研究プロジェクト：

「社会問題史研究会」（代表：榎一江）、「社会党史・総評史研究会」（代表：五十嵐仁[名誉研究員]）、「環境・労働問題研究会」（代表：鈴木玲）、「女性労働研究史研究会」（代表：藤原千沙）、「大原社会政策研究会」（代表：藤原千沙）、「環境・市民活動アーカイブズ資料整理研究会」（代表：清水善仁）、「子どもの労働と貧困プロジェクト」（代表：原伸子）、「労働政策研究会」（代表：相田利雄[名誉研究員]）、「環境政策史の学際的研究プロジェクト」（代表：西澤栄一郎）、「労務供給の多様化研究プロジェクト」（代表：浜村彰）

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・イベント（①～⑤、⑥のチラシを参照(PDF ファイル)）。
- ・①の記録については、『大原社会問題研究所雑誌』2017年4月号を参照。
- ・⑤の記録については、『大原社会問題研究所雑誌』2017年7月号を参照。
- ・⑥の記録については、『大原社会問題研究所雑誌』2017年9・10月合併号に掲載予定。

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2016年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。5

（研究所の集団的作業による刊行物）

- ①『日本労働年鑑』第86集、2016年版（旬報社、2016年6月27日）：研究所所員（所長、副所長、専任研究員、一部の兼任研究員）から構成される編集委員会が編集作業、本文執筆（序章、一部の章および節）を行った。第86集の特集は、「最低賃金の水準と位置づけの変化」「教育労働者の労働問題」であった。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

②『大原社会問題研究所雑誌』（2016年4月号～2014年3月号、9月・10月は合併号）法政大学出版局：本雑誌の編集委員会は、所長、専任研究員、兼任研究員より構成されている。編集委員会は、2ヵ月に一回開かれ、雑誌編集計画、特集案、査読論文の状況、書評本選定について審議する。

16年度に刊行された雑誌の特集は以下のとおり。4月号「第28回国際労働問題シンポジウム 中小企業とディーセントで生産的な雇用創出」、5月号「労働資料協第30回総会記念シンポジウム 社会労働資料活用の可能性と未来」、6月号「労働科学研究所旧蔵資料」、7月号「戦後の労働戦線と日教組」、8月号「環境アーカイブズ所蔵資料の整理と活用」、9・10月合併号「新自由主義とジェンダー平等——経済学とケアの視点から」、11月号「1968年」と社会運動の高揚（1）、12月号「1968年」と社会運動の高揚（2）、1月号「非正規雇用と生活保障」、2月号「安倍政権下の社会経済政策——労働と生活に与える影響」、3月号「労働時間の不安定化と家族生活への影響」であった。

このうち、2017年2月号は700号にあたり、「安倍政権下の社会経済政策——労働と生活に与える影響」との特集テーマで、経済政策、外国人政策、労働法制・雇用政策、貧困対策、女性政策、安保法制・憲法・外交・基地問題について6人の論者から寄稿をいただいた。

③法政大学大原社会問題研究所叢書（西澤栄一郎／喜多川進編著）『環境政策史 なぜいま歴史から問うのか』、2017年3月30日、ミネルヴァ書房：大原社会問題研究所・環境政策史の学際的研究プロジェクト（代表：西澤栄一郎兼任研究員）により実施された調査・研究成果をまとめたもの。

④ワーキングペーパー「持続可能な地域における社会政策策定にむけての事例研究 Vol.6—倉敷市の産業発展過程、公害訴訟和解、地方包括ケア調査報告」（2017年3月）：大原社会問題研究所・労働政策研究会（代表：相田利雄名誉研究員）の中間報告。

（研究所研究員〔所長および専任研究員〕の主要な個人業績）

鈴木玲専任研究員（所長）

・論文 “Japanese Labour Unions and Nuclear Energy: A Historical Analysis of Their Ideologies and Worldviews,” *Journal of Contemporary Asia*. Volume 46, Number 4 (November 2016): 591-613.

・書評 Richard S. Newman 著 *Love Canal : A Toxic History from Colonial Times to the Present* 『大原社会問題研究所雑誌』No. 699（2017年1月）、75～80頁。

原伸子兼任研究員（副所長）

論文

①単著, “Unpaid Labour and the Critique of Political Economy in Home Economics and New Household Economics: From the Feminist Economics Perspective,” *The History of Economic Thought*, Vol. 58, No. 1, 1-20. (2016年7月)

② 単著「社会的投資アプローチとジェンダー平等」『大原社会問題研究所雑誌』第695・696号(2016年9月), 2-18。学会報告

(単独)第25回国際フェミニスト経済学会にて報告。テーマ “Flexible Work, Child Care Policy and Gender Equality: A Critical Assessment of ‘Making Women Active and Promotion Plan’ in Japan”, 2016年6月25日、National University of Ireland, Galway, Ireland.

榎一江専任研究員

論文

・「製糸工女と衣料生産」『総合女性史研究』総合女性史学会、34、2017年3月、102-104頁。

・「特集に当たって」（特集「労働科学研究所旧蔵資料」）『大原社会問題研究所雑誌』692、2016年6月、1-2頁。

・「暉峻義等関係資料について」『大原社会問題研究所雑誌』692、2016年6月、41-45頁（伊東林蔵と共著）。

その他

・項目執筆「糸」「糸車」「織物」「紺」「金巾」「生糸」「寄宿舍」「絹」「絹織物」「更紗」「蚕種」「女工」「女工哀史」「水車」「縮緬」「紬」「唐棧織」「羽二重」「紡績」「養蚕」（『日本生活史辞典』吉川弘文館、2016年）

藤原千沙専任研究員

・論文「なぜ子育て世帯・母子世帯が貧困に陥るのか——若い世代の雇用・労働と社会保障」秋田喜代美・小西祐馬・菅原ますみ編『貧困と保育』かもがわ出版、2016年、168-193頁。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・調査報告書『盛岡市ひとり親世帯の子どもの生活実態に関する調査研究報告書』2017 年 2 月（共著）。 ・学会報告「生活できる賃金をめぐる研究史」社会政策学会 2016 年度秋季（第 133 回）大会、2016 年 10 月 16 日、同志社大学。 清水善仁専任研究員 ・（図書）『レコード・マネジメント・ハンドブッカー記録管理・アーカイブズ管理のための一』日外アソシエーツ、2016（共訳） ・（論文）「日本のアーカイブズ界における「環境アーカイブズ」の位置」『大原社会問題研究所雑誌』694、2016. 8、3-13 頁 ・（書評）「安藤正人・久保亨・吉田裕編『歴史学が問う 公文書の管理と情報公開—特定秘密保護法下の課題』」『大原社会問題研究所雑誌』690、2016. 4、77-80 頁 ・（その他）「法政大学における「環境アーカイブズ」の取り組み」『大学史論輯 燐誌』12、2017. 2、1-22 頁 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等） ※研究所のこれまでに発行した刊行物に対して 2016 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2016 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を箇条書きで記入。 ・社会労働問題分野の多くの研究論文・文献が『大原社会問題研究所雑誌』掲載論文を引用・参照しているが、数は把握していない。 ・叢書の書評：法政大学大原社会問題研究所・原伸子・岩田美香・宮島喬編『現代社会と子どもの貧困——福祉・労働の視点から』（評者：佐久間孝正）『大原社会問題研究所雑誌』（2016 年 11 月号）、49-52 頁。 ・叢書の書評：法政大学大原社会問題研究所／相田利雄編『サステナブルな地域と経済の構想』（評者：三村聡）『大原社会問題研究所雑誌』（2017 年 3 月号）、52-56 頁。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・『大原社会問題研究所雑誌』（2016 年 11 月号）、49-52 頁。 ・『大原社会問題研究所雑誌』（2017 年 3 月号）、52-56 頁。
④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等） （～400 字程度まで）※2016 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。 現在、外部評価を受けていないが、1.1 内部質保証システム（上記）を通じて研究所諸活動の情報共有や課題の意見交換を行っている。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況 ※2016 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2016 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。 （16 年度に採択を受けたもの：研究代表者で採択されたもののみ記載） 〈科学研究費助成事業〉 ・基盤研究（C）「労働運動と環境運動の連携関係の日米比較」（2015～17 年度）研究代表者：鈴木玲専任研究員（所長）（2016 年度 50 万円） ・基盤研究（C）「両大戦間期イギリスにおける家族手当構想と福祉国家の起源」（2014～16 年度）研究代表者：原伸子兼任研究員（副所長）（2016 年度 60 万円） ・若手研究（B）「昭和戦時期の官僚制の変容と体制秩序」（研究代表者：米山忠寛兼任研究員）（2016～18 年度）（2016 年 80 万円） （16 年度に応募したものの不採択だったもの） ・「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業 ～スタートアップ支援～」（2017～2019 年） ・平成 29 年度基盤研究（C）一般「暉峻義等と労働科学に関する基礎的研究」（研究代表者：榎一江） ・基盤研究（C）「公害関係資料の適切な管理と公開に関する研究」（2017-19 年度）、研究代表者：清水善仁専任研究員 ・国際交流基金、2019 年度「知的交流会議助成プログラム」応募

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

「現代社会と子どもの貧困」(仮) シンポジウムへの補助に関して
・野村財団研究助成、2019 年度社会科学部門応募
「現代社会と子どもの貧困」(仮) シンポジウムへの補助に関して
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。
・研究開発センター「2016 (平成 28) 年度 法政大学 公的研究費採択者一覧」を参照

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
大原社研は、11 月に文科省の「平成 29 年度からの共同利用・共同研究拠点の認定」(6 年間の認定)に応募した。申請された拠点事業は、資料整備事業、公募型共同研究、および大原社研資料セミナーの 3 つを柱とした。拠点認定への応募とあわせて、最初の 3 年間(17～19 年)の事業活動をカバーする「スタートアップ支援」(総額 1 億 84 万円)にも応募した。1 月 25 日には文科省からヒアリングを受けたものの、残念ながら不採択となった。	2.1⑤
(国際交流・国際協力の進展) - 大原社会問題研究所は、日本で唯一、労働史研究機関国際協会 The International Association of Labour History Institutions (IALHI)に加盟している。榎専任研究員が 9 月 7 日～10 日にフィンランドのヘルシンキで開催された第 47 回総会に参加し、“OISR.ORG and Sources for Labour History in Japan”を報告した。 - イタリアの The Biographical Archives of the Workers' Movement (ABMO)よりコミンテルン・プロジェクトへの参加要請を受け、このプロジェクトに協力することにした。コミンテルンに関係した日本人のバイオグラフィーの作成・翻訳作業を行っている。	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

- 文科省の「共同利用・共同研究拠点」あるいは類似した大型プロジェクトの公募があった場合、16 年度の経験を生かして応募をする。その際、大原社研が中心となって推進しようとする共同研究の方向性をより明確にしていく。 - IALHI や他の海外の労働史アーカイブズ・研究所、および研究者ネットワークとの連携を強めていく。

【この基準の大学評価】

研究・教育活動実績として、2 回のシンポジウム、シネマ・フォーラム、国際交流講演会、国際交流研究会、公開講演会、11 回の月例研究会が実施され、高く評価できる。 研究成果の対外発信も、高く評価できる。定期刊行物として、「日本労働年鑑」第 86 集、2016 年版、「大原社会問題研究所雑誌」(2016 年 4 月号から 2017 年 3 月号、9 月 10 月は合併号)が刊行された。研究所研究員の論文、学会報告も多い。 外部資金も、科学研究費助成事業で、複数、採択されており、高く評価できる。

III 2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況

評価基準	研究活動
現状の課題・今後の対応等	- 研究所創立 100 年記念事業(『大原社会問題研究所 100 年史』や叢書の刊行など)の準備を着実に進める。 - 資料整理や復刻事業を着実に進めること。DB 化された資料の WEB サイト公開を進めること。 - 国際講演会やシンポジウム等国際交流事業を最低年 1 回開催すること。 - 定期刊行物(『大原社会問題研究所雑誌』『日本労働年鑑』)の刊行準備を着実に進め、必要に応じて編集・執筆作業の見直しを行うこと。 - 大原社研所蔵資料の調査を進めるための外部資金の獲得を目指す。
年度末	執行部による
	(1) 研究所創立 100 年記念事業について:

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

報告	点検・評価	大原社会問題研究所 100 周年史編纂委員会／100 周年記念事業準備委員会を、16 年度は 5 月、7 月、9 月、11 月、2 月と 5 回開催した。大原社会問題研究所の継続的事業である『大原社会問題研究所雑誌』、『日本労働年鑑』の内容の変遷、データベース構築の技術的変化などについて調査して報告を行った。また大学沿革史編纂の事例の検討も行った。これらの委員会の議論を通じ、100 年史の内容（通史、テーマ史）および執筆体制および公開の媒体（刊行物およびWEB サイト）について決めた。 （2）資料整理・復刻事業等について： ①資料整理：労働科学研究所旧蔵資料については、一般公開に向け、目録データの入力など作業を進めている。 ②復刻事業：柏書房より産別会議資料の刊行を復刻事業として進めており、17 年度出版社引き渡し、18 年度より復刻版刊行開始に向けて資料の整理・データ入力を進めている。 ③DB 化された資料のWEB 公開：鈴木茂三郎文庫の資料はすでに研究所内では検索できるが、データベース化してWEB サイトで公開する作業を、業者を通じて進めている。 （3）国際交流事業について：国際交流では講演会（6 月）と研究会（11 月）を開催した。また海外の労働史研究機関等の交流・協力も進めた。 ①海外からの研究者と国内の研究者の交流を目的とした講演会、研究会を以下の通り実施した。 *国際交流講演会（6 月 29 日、於：研究所会議室） テーマ：Gender and the Organization of Working Time in the United States and Western Europe 講演者：Elaine McCrate 氏（Associate Professor, University of Vermont） （逐次通訳：鈴木玲） *国際交流研究会（11 月 5 日、於：東京大学経済学部） テーマ：企業パターナリズムの国際比較 報告者： ビヨン・ホリビィ／クリステル・エリクソン（エーレブロー大学教授）”Trust, loyalty and negotiations” 斎藤佳史（専修大学経済学部教授）「フランス企業パテルナリズムに関する研究状況」 榎一江「日本におけるパターナリズムと産業福利」 （逐次通訳：鈴木玲） ②大原社会問題研究所は、日本で唯一、労働史研究機関国際協会 The International Association of Labour History Institutions (IALHI) に加盟している。本年度は、9 月 7 日～10 日にフィンランドのヘルシンキで開催された第 47 回総会に榎専任研究員が参加し、イタリアの The Biographical Archives of the Workers' Movement (ABMO) よりコミンテルン・プロジェクトへの参加要請を受け、このプロジェクトに協力することにした。 （4）定期刊行物（『大原社会問題研究所雑誌』、『日本労働年鑑』）：『大原社会問題研究所雑誌』と『日本労働年鑑』の刊行は着実に進められた。 ①『大原社会問題研究所雑誌』 *2016 年度（2016 年 3 月 14 日現在）の新規の投稿論文は 18 本 *特集は以下のとおり 4 月号「第 28 回国際労働問題シンポジウム 中小企業とディーセントで生産的な雇用創出」 5 月号「労働資料協第 30 回総会記念シンポジウム 社会労働資料活用の可能性と未来」 6 月号「労働科学研究所旧蔵資料」 7 月号「戦後の労働戦線と日教組」 8 月号「環境アーカイブズ所蔵資料の整理と活用」 9・10 月合併号「新自由主義とジェンダー平等——経済学とケアの視点から」 11 月号「1968 年」と社会運動の高揚（1）」
----	-------	--

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		12月号「「1968年」と社会運動の高揚（2）」 1月号「非正規雇用と生活保障」 2月号「安倍政権下の社会経済政策——労働と生活に与える影響」 3月号「労働時間の不安定化と家族生活への影響」 ②『日本労働年鑑』第86集（2016年版）が6月27日に刊行された。特集は、「最低賃金の水準と位置づけの変化」と「教育労働者の労働問題」の2本である。現在、『日本労働年鑑』第87集（2017年版）の編集作業中である。特集として「子どもの貧困対策——制度化の経緯とその後」と「運輸産業の労働問題：バス運転手の労働問題を中心に」を予定している。 （5）大原社研所蔵資料の調査を進めるための外部資金獲得を目指すこと： 大原社会問題研究所は、社会労働関係資料拠点として文科省の「平成29年度からの共同利用・共同研究拠点の認定」（6年間の認定）に応募した。「共同利用・共同研究拠点」の事業は、3つの柱（資料整備事業、公募型共同研究、大原資料セミナー）から構成されるが、資料整備事業（①未整理資料の整理・公開、②画像、音声資料のデジタル化、③保存資料の修復・保存、④研究所ウェブサイトの充実）が拠点形成の重要な位置を占める。拠点認定への応募とあわせて、最初の3年間の事業活動をカバーする「スタートアップ支援」（申請額：17～19年度で総額100,840千円）にも応募した。
--	--	---

【2016年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

1 研究活動では、今後の対応等として、5点が挙げられていた。いずれも着実に事業が進んでおり、評価できる。

100周年記念事業については、100年史編纂委員会が2カ月毎に開催され、また100周年ウェブサイトを開設することが決まった。資料管理については、資料事務会議が原則毎月3回開催され、資料整理、データベース作成等について意見交換が行われた。国際交流講演会は、6月29日に開催された。定期刊行物については、『日本労働年鑑』、『大原社会問題研究所雑誌』が継続して刊行された。所蔵資料調査のための外部資金の獲得については、文科省の事業に応募したが、不採択であった。今後も外部資金の獲得のために引き続き検討が望まれる。

【大学評価総評】

大原社会問題研究所では、研究・教育活動実績として、2回のシンポジウム、シネマ・フォーラム、国際交流講演会、国際交流研究会、公開講演会、11回の月例研究会が実施され、高く評価できる。

研究成果の対外発信も、高く評価できる。定期刊行物として、『日本労働年鑑』、『大原社会問題研究所雑誌』が刊行された。研究所研究員の論文、学会報告も多い。今後は、100周年記念事業（100年史編纂、記念サイトの開設）に期待したい。また、ウェブサイトでの、刊行物や所蔵資料の公開の一層の充実に、期待したい。

質保証活動については、第三者が客観的に検証できるよう、既存の委員会のうち質保証を担う委員会を特に定め、その会合のいずれかの回で、明示的に、質保証について扱い、結果を自己点検・評価に反映させる、もしくは質保証委員会を別途設置する等、今後の質保証のための改善が望まれる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

I 2016 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016 年度大学評価結果総評】

概ねイオンビーム工学研究所の目的や理念に即した活発な活動を維持していると評価できる。シンポジウムなどを中心に社会に対する情報発信がなされ、被引用論文数などに見るように社会的な評価も高い。学生の教育や研究活動といった研究所としての役割を十分に果たしている。

今後は設備の老朽化への対策が大きな課題となると思われるが、大型の公的な外部資金への申請に期待したい。そのためにも、第三者による研究所活動の点検・評価体制の構築が望まれる。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

研究所の活動について十分評価して頂いている。今後老朽化対策が必要なため、関係機関に対して更新についての働きかけを行いつつ、指摘のあった第三者による点検・評価体制の構築についても運営委員会で議論して行きたい。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

イオンビーム工学研究所の設備の老朽化対策のための外部資金獲得に向けての働きかけや、第三者による点検・評価体制の構築に向けた運営委員会での議論など、評価結果に適切に対応できている。

II 自己点検・評価

1 内部質保証

（1）点検・評価項目における 2016 年度の現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【2016 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

放射線取扱施設であるため、法令に基づいた厳格な運用を行っている。当研究所及び学外の放射線使用施設利用者（教員、学生）のために「放射線取扱講習会」を毎年実施し、放射線取扱についての知識及び安全教育を 80 人を目標に行っている。また国内外の学術論文誌への発表を奨励しており、使用者には「イオンビーム工学研究所報告」への執筆を義務づけて研究水準を維持している。シンポジウムでは発表件数 15 件（招待講演者を含む）を目標にして開催し、学内外の交流を通じて学外者の意見を取り入れている。大学評価委員会の自己点検評価を通じての内部質保証も行っている。これらを PDCA サイクルに対応させると、イオンビーム工学研究所の運営委員会、小委員会、将来計画委員会において計画(P)（中・長期計画、放射線講習、シンポジウムの開催、セミナーの開催、研究所報告、その他）をたてて年度目標に反映させる。これらの実行(D)後に運営委員の意見のみならず大学評価室からの意見も参考にして評価(C)を行い、計画を練り直している(A)。

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

※上記（1）～（2）の記載内容に基づき基準全体の評価を記入。

イオンビーム工学研究所の活動に対して、同研究所の運営委員会、小委員会、将来計画委員会において PDCA サイクルの C（チェック）が実施されており、適切に機能しているといえよう。さらに、研究の質向上に向けて、設備利用者への講習会の開催、研究所報告書への執筆義務は、評価できる。

2 研究活動

【2017 年 5 月時点における点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

2.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

2016 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。
①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）
※2016 年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。 ・2016 年 12 月 7 日のシンポジウム開催のため、大学や関連研究機関に案内状、ポスター送付を行い、応用物理学会誌や物理学会誌へ案内の掲載依頼を行った。またホームページへも案内を掲載した。今年度は以下の 3 名に招待講演をお願いした。一色秀夫教授（電気通信大学）「マイクロ波プラズマによるダイヤモンド合成と応用」、福田大治氏（産業技術総合研究所）「超伝導光検出器の量子通信や精密光計測への応用」、上條健教授（東京大学）「シリコンフォトニクス：Real Photo-Electronic-Circuits への道」。一般講演件数は 31 件で、シンポジウム参加者は 109 名（学外 26 名、学内 83 名）となり、例年と同規模であった。またシンポジウムプロシーディングスを刊行した。 ・2017 年 3 月 7 日には学部学生、院生を対象とした公開セミナーを開催した。理化学研究所の佐藤慶明氏に「有機強相関電子デバイスで追跡する金属と絶縁体のはざま」、法政大学の太田博氏に「自立 GaN 基板上 p-n Diode の高性能化」と題して御講演頂き、26 人の参加者があった。 ・NHK に実験協力した原子衝突実験の内容の一部が高校生向け番組「NHK 高校講座」ベーシックサイエンス 第 39 回「サイエンスヒストリー ～原子の物語～」の中で使用され、番組ホームページからネット配信されている ・2017 年 4 月 22 日に実施された放射線業務従事者のための教育訓練講習会の開催へ協力を行った。 【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・第 35 回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウムに関するポスター、案内状、プログラム、アブストラクト集 ・刊行物「Proceedings of the 35th symposium on materials science and engineering research center of ion beam technology」 ・イオンビーム工学セミナーのポスターや受講者名簿 ・NHK http://www.nhk.or.jp/kokokoza/tv/basicscience/archive/chapter039.html ・放射線安全取扱講習会のポスターや受講者名簿、記録ビデオ等
②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）
※2016 年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。 ● 「法政大学イオンビーム工学研究所報告」 No. 36. (2017 年 2 月 15 日) ● Proceedings of the 35th symposium on materials science and engineering, Research Center of Ion Beam Technology, Hosei University, Dec. 7, 2016. ● Y. Takeuchi, T. Yamashita, K. Kuriyama, and K. Kushida, Synthesis and charge-discharge performance of Li₉SiN₃ as a cathode material of lithium secondary batteries, J. Solid State Electrochemistry 20, pp. 1885-1888 (2016). ● R. Tsuruoka, A. Shinkawa, T. Nishimura, C. Tanuma, K. Kuriyama, and K. Kushida, Persistent Photoconductivity in Oxygen-Ion Implanted KNbO₃ Bulk Single Crystal, Solid State Communications 248, pp.120-122 (2016). ● Y. Torita, N. Nishikata, K. Kuriyama, K. Kushida, and Q. Xu, Modification of the yellow luminescence in gamma-ray irradiated GaN bulk single crystal, Proceedings of ICPS2016 (Journal of Physics, IOP(UK)) (in press). ● R. Tsuruoka, A. Shinkawa, T. Nishimura, C. Tanuma, K. Kuriyama, and K. Kushida, Persistent photoconductivity in hydrogen ion-implanted KNbO₃ bulk single crystal, Proceedings of ICPS2016 (Journal of Physics, IOP(UK)) (in press). ● N. Nishikata, K. Kushida, T. Nishimura, T. Mishima, K. Kuriyama, and T. Nakamura, Evaluation of lattice displacement in Mg-implanted GaN by Rutherford backscattering spectroscopy, Nucl. Instrum, Method Phys. Res. B (in press). ● 吉野理貴、堀切文正、太田博、山本康博、三島友義、中村徹, 「高誘電率絶縁膜を用いたフィールドプレート電極を有する縦型 GaN ダイオード」電気学会論文誌 C 136, 474-488 (2016). ● 葛西 駿、及川 拓弥、木村 純、小川 弘貴、三島 友義、中村 徹, 「Mg 斜めイオン注入 GaN MISFET」電気学会論文誌 C 136, 444-448 (2016).

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- Hiroshi Ohta, Tohru Nakamura, and Tomoyoshi Mishima, High Quality Free-standing GaN Substrates and Their Application to High Breakdown Voltage GaN p-n Diodes, IEEE CAT. No. CF016567-PRT, ISBN 978-1-5090-1977-9, 90-91 (2016).
- Michitaka Yoshino, Fumimasa Horikiri, Hiroshi Ohta, Yasuhiro Yamamoto, Tomoyoshi Mishima and Tohru Nakamura, High-k Dielectric Passivation for GaN Diode with a Field Plate Termination, Electronics **5**, pp.1-7 (2016).
- Kazuki Nomoto, Bo Song, Zongyang Hu, Mingda Zhu, Meng Qi, Naoki Kaneda, Tomoyoshi Mishima, Tohru Nakamura, Debdeep Jena, and Huili Grace Xing, 1.7 kV and 0.55 mΩ·cm² GaN p-n Diodes on Bulk GaN Substrates with Avalanche Capability, IEEE Electron Device Letter **37**, pp.161-164 (2016).
- Zhipeng Wang, Hironori Ogata, Gan Jet Hong Melvin, Michiko Obata, Shingo Morimoto, Josue Ortiz-Medina, Rodolfo Cruz-Silva, Masatsugu Fujishige, Kenji Takeuchi, Hiroyuki Muramatsu, Tae-Young Kim, Yoong Ahm Kim, Takuya Hayashi, Mauricio Terrones, Yoshio Hashimoto, Morinobu Endo, Structural Evolution of Hydrothermal Carbon Spheres Induced by High Temperatures and Their Electrical Properties Under Compression, Carbon, submitted.
- K. Bogdanov, V. Osipov, M. Zhukovskaya, C. Jentgens, F. Treussart, T. Hayashi, K. Takai, A. Fedorov, A. Baranov, Size-dependent Raman and SiV-center luminescence in polycrystalline nanodiamonds produced by shock wave synthesis, RSC Advances **6**, 51783-51790 (2016).
- D. Boukhvalov, V. Osipov, A. Shames, T. Hayashi, K. Takai, T. Enoki, Charge transfer and weak bonding between molecular oxygen and graphene zigzag edges at low temperatures, Carbon **107**, 800-810 (2016).
- F. Shakhov, A. Abyzov, S. Kidalov, A. Krasilin, E. Lähderanta, V. Lebedev, D. Shamshur, K. Takai, Boron-doped diamond synthesized at high-pressure and high-temperature with metal catalyst, Carbon **103**, 224-237 (2017).
- K. Tajima, T. Isaka, T. Yamashina, Y. Ohta, Y. Matsuo and K. Takai, Functional group dependence of spin magnetism in graphene oxide, Polyhedron (in press).
- Tomoaki Nishimura, Computer simulation program for medium-energy ion scattering and Rutherford backscattering spectrometry, Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B **371**, 97-100 (2016).
- R. Tsuruoka, A. Shinkawa, T. Nishimura, C. Tanuma, K. Kuriyama, and K. Kushida, Persistent photoconductivity in oxygen-ion implanted KNbO₃ bulk single crystal, 電子材料国際会議 2016 (ICEM2016), シンガポール, Jul 4-8 (2016).
- Y. Torita, N. Nishikata, K. Kuriyama, K. Kushida, and Q. Xu, Modification of the yellow luminescence in gamma-ray irradiated GaN bulk single crystal, 半導体物理学国際会議 2016 (ICPS2016)、北京, Jul 31- Aug 5 (2016).
- R. Tsuruoka, A. Shinkawa, T. Nishimura, C. Tanuma, K. Kuriyama, and K. Kushida, Persistent photoconductivity in hydrogen ion-implanted KNbO₃ bulk single crystal, 半導体物理学国際会議 2016 (ICPS2016)、北京, Jul 31- Aug 5 (2016).
- Junya Konishi, Takashi Ohsawa, Setsu Suzuki, Keiji Ishibashi, Sung-Gi Ri, Kenichiro Takahashi, and Yasuhiro Yamamoto, Electrical Properties of Al₂O₃ Incorporated CeO₂ Thin Films Deposited by RF Magnetron Sputtering, PRiME 2016/230th ECS Meeting, Abstract 1846, Honolulu, HI, October 2-7 (2016).
- Kenta Kumagai, Kouta Yamaguchi, Kenta Hara, Setsu Suzuki, Keiji Ishibashi, and Yasuhiro Yamamoto, Structure of Pr Oxide Films on Si Deposited by Reactive Sputtering, PRiME 2016/230th ECS Meeting, Abstract 1849, Honolulu, HI, October 2-7, (2016).
- Tomonari Furuya, Takashi Matsumura, Kensuke Kikuchi, Keiji Ishibashi, Setsu Suzuki, and Yasuhiro Yamamoto, Characterization of Compound Thin Films of CeO₂ and SiO₂ deposited by MOCVD, The Pacific Rim Symposium on Surfaces, Coatings and Interfaces, TF-WeP-8, Venue: Big Island of Hawaii, December 11-15 (2016).
- Kenji Shiojima, Takeshi Tanaka, Tomoyoshi Mishima, Yutaka Tokuda, Deep level transient spectroscopy of low-carrier concentration n-GaN layers grown on freestanding GaN substrates, 7th International Symposium on Control of Semiconductor Interfaces (ISCSI-VII) and International SiGe Technology and Device Meeting 2016, Naogya, Jun 8-9.
- Fumimasa Horikiri, Hiroshi Ohta, Yoshinobu Narita, Takehiro Yoshida, Toshio Kitamura, Tohru Nakamura, Tomoyoshi Mishima, Masayuki Imanishi, Mamoru Imade, Yusuke Mori, Fatigue Characteristics by the Current

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

Stress in Vertical GaN p-n Junction Diodes Fabricated on Free-Standing GaN Substrate, International Workshop on Nitride Semiconductors (IWN 2016), Orland, USA, Dec 3-7, 2016.

- Michitaka Yoshino, Fumimasa Horikiri, Hiroshi Ohta, Yasuhiro Yamamoto, Tohru Nakamura, Tomoyoshi Mishima, High-k Dielectric Passivation for GaN p-n Diodes with a Field-Plate Terminated Structure, International Workshop on Nitride Semiconductors (IWN 2016), Orland, USA, Dec 3-7, 2016.
- Hiroshi Ohta, Sho Kanazawa, Fumimasa Horikiri, Naoki Kaneda, Tohru Nakamura, Tomoyoshi Mishima, Process-Damage Recovered Fabrication of High Breakdown Voltage GaN p-n Junction Diodes over 4 kV, International Workshop on Nitride Semiconductors (IWN 2016), Orland, USA, Dec 3-7, 2016.
- Kota Sugamata, Kiyoji Ikeda, Hiroshi Ohta, Tohru Nakamura, Kazuo Kuriyama, Tomoyoshi Mishima, Normally-Off Operation of Ion Implanted MISFET on Freestanding GaN Substrates, International Workshop on Nitride Semiconductors (IWN 2016), Orland, USA, Dec 3-7, 2016.
- Kenji Shiojima, Moe Naganawa, and Tomoyoshi Mishima, Effect of Surface Treatment in Au/Ni Schottky Diodes Formed on Cleaved m-plane Surfaces of Free-Standing n-GaN Substrates, International Workshop on Nitride Semiconductors (IWN 2016), Orland, USA, Dec 3-7, 2016.
- Kenji Shiojima, Shingo Murase, Masataka Maeda, and Tomoyoshi Mishima, Observation of Initial Stage of Degradation in Ni/n-GaN Schottky Diodes Using Scanning Internal Photoemission Microscopy, International Workshop on Nitride Semiconductors (IWN 2016), Orland, USA, Dec 3-7, 2016.
- Hiroshi Ohta, Tohru Nakamura, Tomoaki Nishimura, Kazuo Kuriyama and Tomoyoshi Mishima, Plasma-ion induced damage on GaN p-n junction diodes and its recovery by thermal treatment, IBMM2016 (the 20th International Conference on Ion Beam Modification of Materials), Wellington, New Zealand, Dec 31-Nov 4, 2016.
- Hirofumi Tsuge, Kiyoji Ikeda, Shigeki Kato, Tomoaki Nishimura, Tohru Nakamura, Kazuo Kuriyama, Tomoyoshi Mishima, Impact of Mg-ion implantation with various fluence ranges on optical properties of n-type GaN, IBMM2016 (the 20th International Conference on Ion Beam Modification of Materials), Wellington, New Zealand, Dec 31-Nov 4, 2016.
- Kentaro Hayashi, Hiroshi Ohta, Fumimasa Horikiri, Yoshinobu Narita, Takehiro Yoshida, Tohru Nakamura, Tomoyoshi Mishima, Current crowding caused by surface roughness of vertical GaN p-n diodes, ISPlasma 2017 (9th International Symposium on Advanced Plasma Science and its Applications for Nitrides and Nanomaterials), Aichi, Japan, Mar 1-5, 2017.
- Daisuke Suzuki, Kazuyuki Takai, Charge/Covalent Interactions at the Interface between Graphene and Electrolyte, The 51st Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, Sapporo, Hokkaido, September 7-9, 2016.
- Hironori Ogata and Saki Kawano, Local structures and crystallinities of bulk heterojunction films constituting organic solar cells studied by Solid-state NMR spectroscopy, KJF International Conference on Organic Materials for Electronics and Photonics 2016 (KJF-ICOMEF 2016), ACROS Fukuoka, Japan, Sep 5, 2016.
- Yutaka Sato, Yosuke Kataoka, Eita Yokokura and Hironori Ogata, Electronic states of chalcogen encapsulated in single-walled carbon nanotubes studied by First-Principles DFT Calculations, The 51st Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, Hokkaido citizens actives center kaderu2・7, Sapporo, Hokkaido, Japan, Sep 5, 2016.
- Hironori Ogata, Haruhiko Yoshitake, Yutaka Sato, Tomoaki Nishimura, Zhipeng Wang, Shingo Morimoto, Yoshio Hashimoto, Morinobu Endo, Catalytic properties of non-metal and platinum supported surface-modified nanocarbon materials, The 51st Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, Hokkaido citizens actives center kaderu2・7, Sapporo, Hokkaido, Japan, Sep 7, 2016.
- Saki Kawano and Hironori Ogata, Solid-State NMR Studies on the Aggregated Structures in Organic Bulk Heterojunction Solar Cells, The 51st Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, Hokkaido citizens actives center kaderu2・7, Sapporo, Hokkaido, Japan, Sep. 8, 2016.
- Eita Yokokura, Yosuke Kataoka and Hironori Ogata, First-principles calculations of electronic states and solid state NMR parameters in alkali halides encapsulated single-walled carbon nanotubes, The 51st Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, Hokkaido citizens actives center kaderu2・7, Sapporo, Hokkaido, Japan, Sep. 8, 2016.

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- Zhipeng Wang, Hironori Ogata, Jet Jet Hong Gan, Michiko Obata, Shingo Morimoto, Josue Ortiz-Medina, Rodolfo Cruz-Silva, Masatsugu Fujishige, Kenji Takeuchi, Hiroyuki Muramatsu, Takuya Hayashi, Mauricio Terrones, Yoshio Hashimoto, Morinobu Endo, Structural Evolution of Hydrothermal Carbon Spheres Induced by High Temperatures and Their Electrical Properties under Compression, The 77th JSAP Autumn meeting, 2016, TOKI MESSE, Nigata, Japan, Sep. 15, 2016.
- Zhipeng Wang, Hironori Ogata, Gan Jet Hong Melvin, Shingo Morimoto, Josue Ortiz-Medina, Ana Laura-Elias, Masatsugu Fujishige, Kenji Takeuchi, Hiroyuki Muramatsu, Takuya Hayashi, Mauricio Terrones, Yoshio Hashimoto and Morinobu Endo, High temperature induced carbon-related nanomaterials from rice husk: synthesis and characterization, INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON CARBON NANOTUBE in Commemoration of its Quarter-Century Anniversary(2016-CNT25), Tokyo, Japan, Nov. 17, 2016.
- Hironori Ogata and Eiichi Inami, Study on the Molecular Motions and Defect Structures in Methyl Ammonium Lead Halide Films Constituting Perovskite Solar Cells Studied by Solid-State NMR Spectroscopy, The 2016 MRS Fall Meeting, Boston, Massachusetts, USA, Nov. 30, 2016.
- Hironori Ogata, Eita Yokokura, Eiichi Inami, Effects of Scaffold Layer on the Crystallinity of Methyl Ammonium Lead Halide Perovskite Films and Carrier Transport Properties in Perovskite Solar Cells, The 2016 MRS Fall Meeting, Boston, Massachusetts, USA, Nov. 30, 2016.
- Yutaka Sato, Yosuke Kataoka, Eita Yokokura and Hironori Ogata, Local structures and electronic states of chalcogen encapsulated in single-walled carbon nanotubes studied by molecular dynamics simulations and First-Principles DFT calculations, The 2016 MRS Fall Meeting, Boston, Massachusetts, USA, Nov. 30, 2016.
- Eita Yokokura, Yosuke Kataoka and Hironori Ogata, Local structure and properties of ionic crystals encapsulated in single-walled carbon nanotubes studied by MD simulation and DFT calculations, The 2016 MRS Fall Meeting, Boston, Massachusetts, USA, Nov. 30, 2016.
- Saki Kawano and Hironori Ogata, Local structures and crystallinities of bulk heterojunction films constituting organic solar cells with solvent additives studied by Solid-state NMR spectroscopy, The 2016 MRS Fall Meeting, Boston, Massachusetts, USA, Dec. 1, 2016.
- Hironori Ogata, Eiichi Inami, Crystallinity and defect structures of methyl ammonium lead halide perovskite films constituting perovskite solar cells, The 8th Asian Conference on Organic Electronics 2016 (A-COE 2016), Uji, Kyoto, Japan, Dec. 6, 2016.
- Satomi Nishijima, Asataro Yamada, Kazuyuki Takai, Magnetic Characterization of NO_x adsorption by Nanographene Host Material, The 51th Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, Sapporo, Hokkaido, September 7-9, 2016.
- Takuya Isaka, Kentaro Tajima, Tomoki Yamashina, Yutaka Ohta, Kazuyuki Takai, Evaluation of GO Catalyst regarding oxidative amine coupling reaction, The 51th Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, Sapporo, Hokkaido, September 7-9, 2016..
- Eita Yokokura, Yosuke Kataoka, Hironori Ogata, DFT calculations of electronic states and solid state NMR parameters in Cesium Iodide encapsulated single-walled carbon nanotubes, The 52nd Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, Tokyo, Japan, March 1, 2017.
- Saki Kawano and Hironori Ogata, Studies on the Aggregated Structures and Crystallinities of Bulk Heterojunction Films Constituting Organic Solar Cells, The 52nd Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, Tokyo, Japan, March 2, 2017.
- Yutaka Sato, Eita Yokokura, Yosuke Kataoka and Hironori Ogata, Electronic states of chalcogen encapsulated in single-walled carbon nanotubes studied by First-principles DFT calculations(II), The 52nd Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, Tokyo, Japan, March 3, 2017.
- Satomi Nishijima, Asataro Yamada, Kazuyuki Takai, NO_x MAGNETISM IN ACTIVATED CARBON AS NANO-GRAPHNE HOST MATERIAL, The 15th Internatinal Conference on Molecule-Based Magnets, Sendai, Miyagi, September 4-8, 2016.
- A. Suzuki, K. Takai, Host-Guest interactions between nanographene host and magnetic guest molecule, The 15th Internatinal Conference on Molecule-Based Magnets, Sendai, Miyagi, September 4-8, 2016.

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- K. Tajima, T. Isaka, T. Yamashina, Y. Ohta, Y. Matsuo and K. Takai, MAGNETIC AND STRUCTURAL EVALUATION OF GRAPHENE OXIDE, The 15th International Conference on Molecule-Based Magnets, Sendai, Miyagi, September 4-8, 2016.
- Kazuyuki Takai, Akinori Izumiyama, Daisuke Suzuki, Taichi Umehara, Controlling of charge injection kinetics by Molecular proximity effect on Graphene, 2016 MRS FALL MEETING&EXHIBIT, Boston, USA, November 27 - December 2, 2016.
- Daisuke Suzuki, Kazuyuki Takai, Electrochemical Interaction at the Interface between Graphene and Electrolyte, 2016 MRS FALL MEETING&EXHIBIT, Boston, USA, November 27 - December 2, 2016.
- A. Suzuki, K. Takai, Host-Guest interactions between nanographene host and magnetic guest molecule, 2016 MRS FALL MEETING&EXHIBIT, Boston, USA, November 27 - December 2, 2016.
- Takuya Isaka, Kentaro Tajima, Tomoki Yamashina, Yutaka Ohta, Kazuyuki Takai, Evaluation of Graphene Oxide Catalyst Regarding Organic Reaction in Aqueous Media, 2017 MRS FALL MEETING&EXHIBIT, Boston, USA, November 27 - December 3, 2016.
- Kentaro Tajima, Takuya Isaka, Tomoki Yamashina, Yoshiaki Matsuo, Kazuyuki Takai, Spectroscopic Investigation on Structure of Graphene Oxide, 2016 MRS FALL MEETING&EXHIBIT, Boston, USA, November 27 - December 3, 2016.
- Kentaro Tajima, Takuya Isaka, Tomoki Yamashina, Yoshiaki Matsuo, Kazuyuki Takai, Functional group dependence of Spin magnetism of Graphene Oxide, The 52nd Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, Bunkyo, Tokyo, March 1-3, 2017.
- Daisuke Suzuki, Kazuyuki Takai, Influences of Graphene Structure on Electrochemical Interactions in LiBF₄ Organic Electrolyte Solution, The 52nd Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, Bunkyo, Tokyo, March 1-3, 2017.
- Takuya Isaka, Kentaro Tajima, Tomoki Yamashina, Kazuyuki Takai, Factors for reactivity of GO regarding oxidative amine coupling reaction, The 52nd Fullerenes Nanotubes Graphene General Symposium, Bunkyo, Tokyo, March 1-3, 2017.
- Akira Suzuki, Kazuyuki Takai, Magnetic interactions between Edge-state spins and Ferrocenium ion spins, The 52nd Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, Bunkyo, Tokyo, March 1-3, 2017.
- Takashi Umehara, Kazuyuki Takai, Influence of Water Molecules on Molecular Adsorption induced Charge Transfer in Graphene, The 52nd Fullerenes-Nanotubes-Graphene General Symposium, Bunkyo, Tokyo, March 1-3, 2017.
- 小室貴之、栗山一男、串田一雅、「Li₂CN₂の結晶作成と物性評価」応用物理学会学術講演会, 14p-P2-1 (2017年3月).
- 田代惇也、取田祐樹、栗山一男、串田一雅、徐虬、木野村淳、「ZnOバルク単結晶へのガンマ線照射効果：低抵抗の起源」, 応用物理学会学術講演会, 25p-P8-9 (2017年3月).
- 菊地健介、古矢智也、鈴木摂、石橋啓次、山本康博、「MOCVD法によるCeO₂/SiO₂複合酸化膜の生成及び評価」, 応用物理学会学術講演会, 新潟 朱鷺メッセ, 14a-A37-5 (2016年9月).
- 今立 宏美、青木 俊周、三島 友義、塩島 謙次、「自立基板の劈開面に形成したn-GaNショットキー接触の評価 (3) —電流-電圧特性の温度依存性—」応用物理学会講演会, 新潟 朱鷺メッセ, (2016年9月).
- 塩島謙次、橋爪孝典、堀切文正、田中丈士、三島友義、「界面顕微光応答法によるn-GaN自立基板表面の波形モフロジーの2次元評価」応用物理学会講演会, 新潟 朱鷺メッセ (2016年9月).
- 林 賢太郎、太田 博、堀切 文正、成田 好伸、吉田 丈洋、中村 徹、三島 友義「自立 GaN 基板上 p-n 接合ダイオードにおける順方向電流集中領域の検討Ⅱ」応用物理学会講演会, 新潟 朱鷺メッセ, (2016年9月).
- 堀切 文正、太田 博、成田 好伸、吉田 丈洋、北村 寿朗、中村 徹、三島 友義「自立 GaN 基板上 p-n 接合ダイオードの信頼性試験」応用物理学会講演会, 新潟 朱鷺メッセ, (2016年9月).
- 柘植 博史、堀切 文正、成田 好伸、金田 直樹、中村 徹、三島 友義「p++-GaN 薄層を用いた縦型 p++-n 接合ダイオード」応用物理学会講演会, 新潟 朱鷺メッセ, (2016年9月).
- 今立 宏美、三島 友義、塩島 謙次「自立基板の劈開面に形成した nGaN ショットキー接触の評価 (4) —金属仕事関数依存性—」応用物理学会講演会, パシフィコ横浜, (2017年3月).

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- 堀切 文正、成田 好伸、吉田 丈洋、北村 寿朗、太田 博、中村 徹、三島 友義「自立 GaN 基板上ショットキー接合ダイオード用エピタキシャル層における基板オフ角と PL-YL 発光強度の関係」応用物理学会講演会，パシフィコ横浜，(2017 年 3 月)。
- 林 賢太郎、柘植 博史、太田 博、堀切 文正、成田 好伸、吉田 丈洋、中村 徹、三島 友義「p+薄層を用いた自立 GaN 基板上 JBS ダイオード」応用物理学会講演会，パシフィコ横浜，(2017 年 3 月)。
- 横倉 瑛太，片岡 洋右，緒方 啓典，「DFT・MD 法による単層カーボンナノチューブに内包されたヨウ化セシウムの局所構造と物性評価」，日本コンピュータ化学会 2016 春季年会 東京工業大学大岡山キャンパス，(2016 年 6 月 3 日)。
- 佐藤 豊，横倉 瑛太，片岡 洋右，緒方 啓典，「分子動力学シミュレーションおよび第一原理計算によるカーボンナノチューブに内包されたカルコゲンの構造評価」，日本コンピュータ化学会 2016 春季年会 東京工業大学大岡山キャンパス，(2016 年 6 月 3 日)。
- 木内 宏弥，竹内 大将，高野 菜丘，横倉 瑛太，稲見 栄一，緒方 啓典，「ZnO ナノ構造体を電子輸送層に用いたペロブスカイト太陽電池の作製および特性評価(III)」，第 77 回応用物理学会秋季学術講演会，朱鷺メッセ，新潟，(2016 年 9 月 13 日)。
- 竹内 大将，木内 宏弥，高野 菜丘，横倉 瑛太，稲見 栄一，緒方 啓典，「ペロブスカイト太陽電池における金属酸化物層の作製法がキャリア輸送特性に及ぼす効果」，第 77 回応用物理学会秋季学術講演会，朱鷺メッセ，新潟，(2016 年 9 月 13 日)。
- 緒方 啓典，木内 宏弥，竹内 大将，高野 菜丘，横倉 瑛太，稲見 栄一，「ペロブスカイト太陽電池を構成するヘテロ接合薄膜の構造と電子物性」，第 77 回応用物理学会秋季学術講演会，朱鷺メッセ，新潟，(2016 年 9 月 15 日)。
- 横倉 瑛太，片岡 洋右，緒方 啓典，「単層カーボンナノチューブに内包されたアルカリハライドの電子状態および固体 NMR パラメーターの第一原理計算」，第 77 回応用物理学会秋季学術講演会，朱鷺メッセ，新潟，(2016 年 9 月 15 日)。
- 佐藤 豊，横倉 瑛太，片岡 洋右，緒方 啓典，「分子動力学シミュレーションおよび第一原理計算によるカーボンナノチューブに内包されたカルコゲンの構造評価」，第 77 回応用物理学会秋季学術講演会，朱鷺メッセ，新潟，(2016 年 9 月 15 日)。
- 河野 紗希，緒方 啓典，「固体 NMR 分光法によるバルクヘテロ接合型有機薄膜太陽電池の局所構造解析」，第 77 回応用物理学会秋季学術講演会，朱鷺メッセ，新潟，(2016 年 9 月 16 日)。
- 横倉 瑛太，佐藤 豊，片岡 洋右，緒方 啓典，「第一原理計算による単層カーボンナノチューブに内包されたアルカリハライドの電子状態および固体 NMR パラメータ計算」，第 26 回日本 MRS 年次大会，波止場会館，横浜，(2016 年 12 月 21 日)。
- 佐藤 豊，片岡 洋右，横倉 瑛太，緒方 啓典，「分子動力学シミュレーションおよび第一原理計算によるカーボンナノチューブに内包されたカルコゲンの構造評価」，第 26 回日本 MRS 年次大会，波止場会館，横浜，(2016 年 12 月 21 日)。
- 高井和之，「走査プローブ顕微鏡 (SPM) 測定の基礎とグラファイト・グラフェンへの応用」，炭素材料学会 10 月セミナー，千代田，東京，2016，43022。
- 泉山 彰里，高井和之，「基板表面化学修飾によるグラフェンのフェルミエネルギー変調」，第 35 回イオンビーム工学研究所シンポジウム，小金井市，東京都，2016，42711。
- 井坂琢也，田嶋健太郎，山科智貴，太田豊，高井和之，「酸化アミンカップリング反応における酸化グラフェン触媒の評価」，第 36 回イオンビーム工学研究所シンポジウム，小金井市，東京都，2017，42712。
- 高井和之，梅原太一，中本圭亮，「グラフェンへの分子吸着における水分子共存効果」，第 43 回炭素材料学会年会，千葉市，千葉県，(2016 年 12 月 7-9 日)。
- 高井和之，「酸化グラフェンの磁性と触媒活性との相関」，第 7 回酸化グラフェンシンポジウム，姫路市，兵庫県，2016，42720。
- Dong Hao, Takamasa Ishigaki, Hironori Ogata, Yoshihiro Tsujimoto, Tetsuo, Uchikoshi, Visible light photocatalytic activity given by high-temperature heat-treatment of solvothermally-synthesized high-concentration niobium doped TiO₂, 第 55 回セラミックス基礎科学討論会，岡山コンベンションセンター，岡山，(2017 年 1 月 13 日)。
- 緒方 啓典，竹内 大将，木内 宏弥，「有機金属ハロゲン化物ペロブスカイト薄膜における欠陥構造と分子運動性の分光学的研究(III)」，第 64 回応用物理学会春季学術講演会，パシフィコ横浜，横浜市，(2017 年 3 月 14 日)。
- 森 達彦，緒方 啓典，「Cu₂O を正孔輸送層として用いたペロブスカイト型太陽電池の作製および特性評価」，第 64

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

回応用物理学会春季学術講演会, パシフィコ横浜, 横浜市, (2017 年 3 月 16 日). ● 木内 宏弥, 竹内 大将, 横倉 瑛太, 稲見 栄一, 緒方 啓典, 「ZnO ナノ構造体を電子輸送層に用いたペロブスカイト太陽電池の作製および特性評価(IV)」, 第 64 回応用物理学会春季学術講演会, パシフィコ横浜, 横浜市, (2017 年 3 月 16 日). ● 竹内 大将, 木内 宏弥, 稲見 栄一, 緒方 啓典, 「ペロブスカイト太陽電池における金属酸化物層の作製法がキャリア輸送特性に及ぼす効果 II」, 第 64 回応用物理学会春季学術講演会, パシフィコ横浜, 横浜市, (2017 年 3 月 16 日). ● 緒方 啓典, 竹内 大将, 木内 宏弥, 円山 隆治, 高野 菜丘, 「有機金属ハロゲン化物ペロブスカイト太陽電池を構成するヘテロ接合薄膜の構造と電子物性」, 日本化学会第 97 春季年会, 慶應義塾大学日吉キャンパス, 神奈川, (2017 年 3 月 18 日). ● 中村 徹, 三島 友義, 池田 清治, 吉野 理貴「GaN へのイオン注入とデバイスへの応用」応用物理学会講演会, パシフィコ横浜, (2017 年 3 月), シンポジウム招待講演. ● 緒方 啓典, 「木質系バイオマスを用いた機能性材料の開発」, 第 59 回藤枝会主催講演会, (株)フジクラ 本館 1 F 大会議室, (2016 年 6 月 7 日), 招待講演. ● 緒方 啓典, 「ペロブスカイト太陽電池を構成するヘテロ接合薄膜の構造と電子物性」, 「新世代太陽電池の素材開発と性能評価に関するワークショップ」, 城西大学, 埼玉, (2017 年 2 月 28 日), 招待講演. ● Tomoyoshi Mishima and Fumimasa Horikiri, Development of Freestanding GaN Substrates and 4 kV Power p-n Junction Diodes, 7th International Symposium on Control of Semiconductor Interfaces (ISCSI-VII) and International SiGe Technology and Device Meeting 2016, Nagoya, June 8-9, 2016, invited. ● Kazuyuki Takai, Host-Guest Interactions in Graphene (Keynote), 3rd International Graphene Forum, Shenzhen, China, April 14-16, 2016, invited. ● Hiroshi Ohta, Tohru Nakamura, and Tomoyoshi Mishima, High Quality Free-standing GaN Substrates and Their Application to High Breakdown Voltage GaN p-n Diodes, IEEE The 2016 International Meeting for Future of Electron Devices, Kansai, Kyoto, 2016, invited. ● Fumimasa Horikiri and Tomoyoshi Mishima, Development of free-standing GaN substrates and high breakdown voltage GaN p-n diodes, ISPlasma 2017 (9th International Symposium on Advanced Plasma Science and its Applications for Nitrides and Nanomaterials), Aichi, Japan, Mar 1-5, 2017, invited. ● Tomoaki Nishimura, High and medium energy backscattering analysis using computer simulation program, The Scientific International Symposium on SIMS and Related Techniques Based on Ion-Solid Interactions (SISS-18), Tokyo, Japan, July 21-22, 2016, invited.
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）
※研究所のこれまでに発行した刊行物に対して 2016 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2016 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を箇条書きで記入。 ・2016 年度の被引用件数は延べ 150 件で活発に引用されていた。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・Web of Science を用いた引用文献調査
④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）
(～400 字程度まで) ※2016 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。 専門家による外部評価は受けていない。公的な外部資金を受けて運営する研究所では期間により、中間および最終の専門家による評価があるが、大学の予算により運営されている本研究所では制度としてない。今後、外部から大型設備の補助を受ける可能性も考えて、第三者による点検・評価体制の構築についても運営委員会で議論して行きたい。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況
※2016 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2016 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

採択中

- ・環境省「未来のあるべき社会・ライフスタイルを創造する技術イノベーション事業」委託(7000万円)
- ・文部科学省「省エネルギー社会の実現に資する次世代半導体研究開発」再委託(994万円)
- ・受託研究((株)サイオクス(50万円))

応募したもの

- ・科研費1件(400万円)

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・バンデグラフ加速器の老朽化対策のひとつとして偏向電磁石用電源の更新・改良を行い、NMR(核磁気共鳴)を用いたフィードバック回路も含めて正しく動作していることを確認した。	

(3) 現状の課題・今後の対応等(任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

特になし

【この基準の大学評価】

イオンビーム工学研究所では、研究に関するシンポジウムの開催をはじめ、学部生・院生向けの公開セミナー開催、メディア協力、教育訓練講習会協力が実施され、研究・教育活動実績は評価できる。研究所報告書発行、多数の論文成果、学会発表が実施され、研究成果も充分にあるといえる。研究成果に対しては、2016年度に被引用件数が述べ150件(Web of Science)あり、高い社会的評価があるといえよう。第三者点検・評価体制の評価に向けての議論については前述したので割愛する。科研費の応募は1件、外部資金の獲得は3件あり、外部資金の応募・獲得活動も適切であろう。

III 2016年度における現状の課題等に対する取り組み状況

評価基準	研究活動
現状の課題・今後の対応等	2016年度中に偏向電磁石用電源の老朽化対策を実施する。
年度末 報告	執行部による 点検・評価 新しい電源への交換が終了し、NMR(核磁気共鳴)を用いた磁場値のフィードバック回路も含めて正しく動作していることを確認した。

【2016年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

偏向電磁石用電源の老朽化対策のため、同電源の更新・改良・動作確認も実施されており、適切に対応できている。

【大学評価総評】

「自立的で人間力豊かなリーダーの育成と時代の最先端を行く高度な研究」を行い、教育と研究、「イオンビーム工学技術」を社会に還元することを通じて「持続可能な地球社会の構築」に貢献するという、イオンビーム工学研究所の目的は達成できていると、評価できる。

小型加速器など設備の管理、公開セミナーなどを通して、研究者、学部生・院生に対しての教育と研究が実施できしており、研究所としての役割を十分に果たしているといえる。さらに、シンポジウム、公開セミナー、研究雑誌、論文、講演を通して、広く社会に向け情報発信が行われ、Web of Scienceでの被引用件数も前年の述べ61件から、150件へと大きく増加しており、高く評価できる。

設備老朽化対策に対して、大型資金の申請、そのための第三者点検・評価体制構築に向けての議論から、さらなる進展を期待する。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

I 2016 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016 年度大学評価結果総評】

情報メディア教育研究センターでは、これまで高く評価されてきた、組織全体として定量的達成指標を徹底して提示する姿勢を継続し、定期的な自己点検を行う委員会体制が効果的に機能し、高い水準のプロジェクト活動を維持している。そのことは特筆に値する。

時代が要請する、情報教育の重要性に応じた教育・研究の多様化・グローバル化を意識した取り組みについては、科研費を獲得した研究活動によって適切に実行されており、2015 年度大学評価委員会による評価結果への対応は、充分になされている状況だと認められる。今後もますますそうした取り組みが充実し、その成果が適切に社会に還元されていくことが期待される。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

高い評価をいただいた自己評価の仕組みと達成度の数値化による管理方法を 2016 年度も継続し、所長、副所長、3 名の専任教員からなる所員会議による 3 ヶ月毎の自己点検および運営委員会による半年毎の自己点検を行った。結果として期首に計画した 2016 年度のプロジェクト活動は 96%を達成した。(添付「2016 年度自己点検(情報メディア教育研究センター)_期末」資料参照)

教育・研究の多様化・グローバル化を意識した取り組みについては、主として専任教員が獲得した科研費により継続した。教育支援では反転学習などビデオを利用した授業が 36 科目、21 名の教員によって行われ、モバイル端末を活用したアクティブラーニングは経済学部や理工学部を展開した。また、研究面では本学の授業支援システムの開発母体である国際的な Sakai コミュニティでの活動に加え、教育システムの標準化を担う国際組織である IMS に新たに加盟し、米国で開催されたカンファレンスでの発表、開発者を招聘したカンファレンスを行った。これらの成果は国内外の学会への論文投稿、センター主催のシンポジウム、および Web サイトでの公開を通じて社会還元を行った。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

情報メディア教育研究センター所員会議による 3 か月ごとの自己点検および運営委員会による半年ごとの自己点検は大変優れた取り組みである。教育・研究の多様化・グローバル化の取り組みも行っており、教育支援でもビデオを用いた授業やモバイル端末を活用したアクティブラーニングが行われている。研究面でもカンファレンス発表やシンポジウム、国内外の学会への論文投稿が行われており、研究成果の社会還元という点で大変優れている。

II 自己点検・評価

1 内部質保証

(1) 点検・評価項目における 2016 年度の現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【2016 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

- ・所長、副所長、専任研究員 3 名から構成される所員会議は 10 回開催された。うち、初回の会議では年間の活動計画を合意し、その後 3 ヶ月毎に自己点検レビューを 4 回行った。
- ・運営委員会は 5 回開催され、うち期首(5/13)、期中(10/11)、期末(3/15)は自己点検レビューを行った。
- ・3 月に主催したシンポジウムは学外への研究成果報告を通じた研究の質保証という役割を含んでいる。
- ・2016 年度の詳細な自己点検結果については、別紙「2016 年度自己点検(情報メディア教育研究センター)_期末.pdf」に示す。なお、本資料は 2014-2016 年度の中期計画の結果を一覧することもでき、網掛けしたプロジェクトは 2014 および 2015 年度に完了している。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・本研究センターでは中期計画年度を 2014-2016 年度としており、2016 年度は最終年度にあたるため 3 年間の総括も合わせて行った。	2014-2016 中期計画全般

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【この基準の大学評価】

※上記（１）～（２）の記載内容に基づき基準全体の評価を記入。

情報メディア教育研究センターの質保証活動については、所員会議で３か月ごとに自己点検レビューを４回行い、運営委員会では５回の開催中３回で自己点検レビューを行っており適切に活動している。

２ 研究活動

【2017 年 5 月時点における点検・評価】

（１）点検・評価項目における現状

2.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。				
2016 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。				
①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）				
※2016 年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を簡条書きで記入。 - IMS ワークショップ(2016 年 8 月 25 日、市ヶ谷キャンパス、国際的な e-Learning 技術標準を策定する IMS GLC が展開する事業の日本国内での普及、9 名の発表者による 8 件の報告、参加者 60 名) - 情報メディア教育研究センターシンポジウム(2017 年 3 月 1 日、市ヶ谷キャンパス、IT を活用した新たな教育方法の実践、5 名の発表者による 5 件の報告、参加者 77 名) - 情報メディア教育研究センター研究プロジェクト (23 プロジェクト)				
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 http://www.media.hosei.ac.jp/imsworkshop_2016/ http://www.media.hosei.ac.jp/symp2017/ http://www.media.hosei.ac.jp/research/project_2016/				
②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）				
※2016 年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を簡条書きで記入。 - 情報メディア教育研究センター研究報告(Vol. 30、2016 ISSN 1882-7594) (6 件) - 公表論文は多数になるため根拠資料を参照 (29 件)				
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 http://www.media.hosei.ac.jp/vol30/ http://www.media.hosei.ac.jp/research/paper_2016/				
③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）				
※研究所のこれまでに発行した刊行物に対して 2016 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2016 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を簡条書きで記入。 情報メディア教育研究センターWeb サイト ページビュー数：67,964。ダウンロード数の多かったコンテンツの TOP10 を下表に示す。				
	種別	タイトル	発行年	ダウンロード
1	研究報告	岡野裕征他、共鳴型サイレンサの高性能化に関する研究	2006	838
2	講演資料	中島尚正、国際社会で活躍できる人材の育成と課題	2012	484
3	研究報告	近藤淳史、片岡洋右、分子軌道法による化学反応の解析	2000	435
4	研究報告	岩原光男他、ステッピングモータの低騒音化	2010	427
5	その他	ARCS モデルに基づいた授業チェックシート	2014	400
6	講演資料	藤井聡一郎、LTI を用いたプログラミング学習支援システムの開発	2015	342
7	講演資料	常盤祐司、法政大学版 YouTube - OATube	2016	331
8	講演資料	宮崎誠、e ポートフォリオシステム評価 - Mahara と Sakai OSP -	2011	326
9	講演資料	田村晶子、飯野厚、ゼミ募集における ePortfolio システムの活用と展開	2015	311
10	研究報告	栗原祥吾他、ステッピングモータの低騒音化	2007	253
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 情報メディア教育研究センターWeb サイト 2016 年度アクセスログ				

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

（～400 字程度まで）※2016 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

学外の有識者による外部評価は実現できていないが、所長、副所長、3 名の専任教員といったセンター内部の教員が所員会議を毎月開催し、研究活動に関して Plan、Do、Action を行い、センター外部の教員が 6 名含まれる運営委員会がその研究活動を年 2 回の自己点検プロセスとして Check することによって、運営委員会が第三者評価機関と同等の役割を果たしている。また、年度末に開催された本センター主催のシンポジウムを通じて本センターの研究成果が学外の参加者に報告されている。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ 2016 年度中期目標・年度目標達成状況報告書に添付した 2016 年度自己点検

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2016 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2016 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。

- ・ 採択を受けた科研費：基盤(C) 2 件（1,000 千円、400 千円）
- ・ 応募した科研費：基盤(B) 1 件

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ 平成 28 年度科研費交付申請書

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
2015 年度の【この基準の大学評価】として「総じて、研究活動と成果発表は充実していると言えるが、それに対する社会的評価が研究報告の総ページビュー数だけでは十分に把握できないのでページビュー数の多かった研究報告を分析するなどの手法の検討が望まれる。」というご指摘をいただいた。そのため、専用の分析ツールを用いてページビュー数以外の 2016 年度データを分析し、③に結果を示した。それによると研究報告の他、シンポジウムの講演資料などについてもダウンロードされており、トップは 10 年以上も前の論文であった。これより Web サイトには、多様な研究成果や発表資料を長年にわたって公開する重要性を認識でき、今後、より多くの研究成果を公開していきたい。	対外的に発表した研究成果

（3）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

- ・ 特になし

【この基準の大学評価】

研究・教育活動実績については IMS ワークショップ、情報メディア教育研究センターシンポジウムが開催され、23 件の研究プロジェクトも進行していることは高く評価できる。対外的に発表した研究成果については情報メディア教育研究センター研究報告が 6 件と公表論文が 29 件であるが、前年度と比較して減少していることは懸念材料である。研究成果に対する社会的評価を Web サイトのページビュー数のみならず、コンテンツのダウンロード数で評価したことは特筆に値する。今後もより多くの研究成果を公開し、研究成果の社会への還元を促進していただきたい。第三者評価についてはセンター内部の教員による自己点検のみとなっており、学外や学内の他組織による外部評価システムの導入の検討が望まれる。科研費の獲得状況については昨年度の 3 件から基盤(C)のみの 2 件となっており、減少していることは懸念材料である。

III 2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況

該当なし

【2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【大学評価総評】

情報メディア教育研究センターは3か月ごとの自己点検や運営委員会による半年ごとの自己点検により、研究センターとして定量的な達成指標が確立しており、2016年度では96%のプロジェクト活動が達成されたことから、高い水準でのプロジェクト活動が維持されていることは特筆に値する。さらに、研究成果に対する社会的評価に関しては、新たにコンテンツのダウンロード数を指標に用いる等の積極的な評価方法の確立がうかがえ、高く評価できる。今後は内部質保証にとどまらず、第三者評価等の外部組織からの評価についても検討が望まれる。

研究報告や公表論文、科研費の獲得状況については、前年度と比較して減少しており、研究成果を求められる研究センターとしては残念な結果である。今後の科研費の獲得および研究成果の充実および成果の社会への還元が適切に行われていくことが望まれる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

I 2016 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016 年度大学評価結果総評】

沖縄文化研究所の教育・研究活動は一定の水準を保っており高く評価される。自己点検・評価活動についても、新たに内部質保証委員会が発足したことは評価されるものの、その活動はまだ十分とは言えず、さらなる活動が望まれる。

「2015 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況」に書かれている「沖縄研究の中心的拠点としての地位を確立する」という戦略目標は妥当である。「2015 年度には、早稲田大学琉球沖縄研究所が閉鎖されたこともあり、外的状況として結果的にその目標は『達成』に近づいた」との記述があるが、限られた専任所員数と予算の中での困難さを理解しながらも、沖縄文化研究所自体の活動でこの戦略目標の達成にさらに近づくことを期待したい。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

自己点検・評価活動については、2015 年度に内部質保証委員会を発足させ、同委員会を、毎年度 4 回程度開催される研究所運営委員会と同日に開催し、諸課題について検討した。

研究所の、特に研究活動については、ここ数年抱え続けている問題である研究所経常予算からの事務職員人件費の一部補てんを、2016 年度も余儀なくされたことが大きく、率直に言って決して望ましいレベルの活動がなされたとは言えない。ただし、定期刊行物休刊といった事態を最小限にとどめる努力はなされたと自負している。

なお、各種研究教育活動（次項 2・1（1）を参照）の実態には、沖縄文化協会の定例研究発表会を本学で開催したことなど、本研究所が本土における「沖縄研究の中心的拠点となった」一端が示されている。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

沖縄文化研究所では、課題として指摘のあった内部質保証の充実について、2015 年度に内部質保証委員会を発足させ、同委員会を毎年度 4 回開催して諸課題について検討するなど積極的な取り組みがなされているが、引き続き充実に向けての検討を行うことが期待される。

また、「沖縄研究の中心的拠点としての地位の確立」という戦略目標については、研究所経常予算からの事務職員人件費の一部補てんなどの困難な状況の中で、定期刊行物の発行、沖縄文化協会の定例研究発表会の本学での開催など、本土における中心的拠点としての活動が行われており、今後も一層の取り組みが期待される。

II 自己点検・評価

1 内部質保証

（1）点検・評価項目における 2016 年度の現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【2016 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

・上記「2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況」を参照。

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

※上記（1）～（2）の記載内容に基づき基準全体の評価を記入。

沖縄文化研究所では、2015 年度に内部質保証委員会を発足させ、同委員会を定期的に開催して諸課題について検討するなど、積極的な取り組みがなされているが、研究所という構成員の規模及び予算的な制約がある中で、独立性と透明性の確保といった点から、引き続き充実に向けての検討を行うことが期待される。

2 研究活動

【2017 年 5 月時点における点検・評価】

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。
2016 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。
①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）
※2016 年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。 ・2016 年度春・秋・両学期 オムニバス形式の総合講座「沖縄を考える」(L.A. 通年授業科目)を開催。受講学生約 300 名。一般受講者約 70 名 (各回平均) ・2016 年 9 月 沖縄文化協会・定例研究発表大会を法政大学で開催。発表者約 20 名、参加者約 40 名。 ・2016 年 11 月 世界平和アピール七人委員会 2016 講演会「沖縄は日本なのか」を法政大学で同委員会と共催。各種講演とシンポジウム。参加者約 320 名。 ・2017 年 3 月 沖縄文化研究者・故仲原善忠氏遺族宅より、同氏に関する諸資料類を、研究所への寄贈をにらんで搬入し、内容の調査に着手。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・http://worldpeace7.jp/ など。
②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）
※2016 年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。 ・『沖縄文化研究』（研究所紀要）第 44 号 発刊 ・『琉球の方言』第 41 号 発刊 ・『沖縄文化研究所所報』第 79 号、第 80 号 発刊 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・いずれも本研究所開架閲覧室に所蔵・公開。
③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）
※研究所のこれまでに発行した刊行物に対して 2016 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2016 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を箇条書きで記入。 2015 年度末に、本研究所の企画である「叢書・沖縄を知る」シリーズ中の 1 冊として刊行した、屋嘉宗彦（2016）：『沖縄自立の経済学』（七つ森書館）に対する書評が以下のように発表された。 ・川平成雄（琉球大学名誉教授）：東京新聞 2016 年 5 月 29 日付。 ・榎木誠（常磐大学講師）：「ジャーナリスト」誌 6 9 9 号、2016 年 6 月 25 日号。 ・上原良幸（沖縄コンベンション・ビューロー前社長）：琉球新報 2016 年 8 月 7 日付。 ・宮平真弥（流通経済大学教授）：「沖縄文化研究所所報」第 80 号。2017 年 3 月 31 日。 ほか。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・http://www.tokyo-np.co.jp/article/book/shohyo/list/CK2016052902000191.html ・http://ryukyushimpo.jp/news/entry-331228.html ・https://news.yahoo.co.jp/byline/onokazuoki/20161008-00063048/
④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）
(～400 字程度まで) ※2016 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。 恒例となった「沖縄学研究機関所長会議」が 2016 年 7 月 16 日に沖縄・宜野湾市の沖縄国際大学南島文化研究所で開催され、本研究所を含めて 7 大学の研究所長が参集。相互に活動状況などを報告し情報交換を行なった。法政大学沖縄文化研究所についてはおおむね好評価で、「本土唯一の」存在としての充実した活動への期待が表明された。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況
※2016 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2016 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。 ・本研究所を母体とした科研費研究課題の採択件数はゼロ。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・各兼担所員が個別に代表者もしくは分担者となった科研費研究課題の採択件数は、3名合計3件あった。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・特になし

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における2016年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

（３）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・新たな研究課題に取り組む人的・予算的余裕を生み出せるよう努力すること。

【この基準の大学評価】

沖縄文化研究所の研究・教育活動実績については、2016年度に3種の定期刊行物を発行したほか、本学において春・秋の両学期オムニバス形式の総合講座「沖縄を考える」を開講し、また同じく本学において沖縄文化協会・定例研究発表大会、講演会「沖縄は日本なのか」の開催など、本土における沖縄研究の中心的拠点にふさわしい活動がなされている。 研究成果に対する社会的評価については、本研究所の元所長である屋嘉宗彦氏の『沖縄自立の経済学』（七つ森書館）に対する書評が複数発表されており、今後もさらなる成果が期待される。 研究所に対する外部からの組織評価は行われてはいないが、本研究所を含めて7大学の研究所長が参集する「沖縄学研究機関所長会議」において、相互に活動状況などを報告し情報交換が行なわれている。 科研費等外部資金の獲得状況については、各兼担所員が個別に代表者もしくは分担者となった科研費研究課題の採択件数が3件あったが、本研究所を母体とした採択件数はゼロとなっており、今後の努力が期待される。

Ⅲ 2016年度における現状の課題等に対する取り組み状況

評価基準		研究活動
現状の課題・今後の対応等		本研究所の使命は、外部スタッフを巻き込んだ沖縄研究の推進、研究に有用な史資料の継続的受け入れと閲覧公開サービス、研究成果の学内外への公開・還元等々多岐にわたるが、それらを機能的・効率的に遂行するための人的ポテンシャル、特に専門的資料整理を含む事務部門のその貧弱さは、当事者としても目を覆うばかりの状況である。研究所が直面している組織的問題の所在は十分認識しているつもりであるが、現状では、創立以来半世紀近くにわたる当研究所の存在意義をいかに保持し続けるかに腐心しつつ、大学財政状況の好転を待つしかないのが率直なところである。
年度末報告	執行部による点検・評価	・事務部門の体制については、専門的知識及び技術をもった職員を継続的に雇用するために、業務委託契約による人材派遣という形をとり、ようやく前年度並みの体制を確保した。 ・しかしそのために、研究所経常予算の中からそのおよそ3分の1を人件費不足分に充当することになり、当初予定していた事業のうちのいくつかを、2016年度は遂行できないことになった。 ・また、2017年度の事務体制についても今年度内に検討を重ねたが、いまのところ状況に改善は見られないのが実情である。

【2016年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

沖縄文化研究所の事務部門の体制について、専門的知識及び技術をもった職員を継続的に雇用するために、業務委託契約による人材派遣という形をとり、前年度並みの体制を確保するなど、財政的な困難な状況が続く中で、研究所の機能の維持に向けての一定の取り組みがなされている。財政基盤の安定化に向けて、本研究所を母体とした科研費を含む各種外部資金の獲得などの積極的な取り組みがなされるなど、なお一層の努力が期待される。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【大学評価総評】

沖縄文化研究所の研究・教育活動実績については、前述のとおり 3 種の定期刊行物の発行、春・秋・両学期のオムニバス形式の総合講座「沖縄を考える」の開講、本学における沖縄文化協会・定例研究発表大会、講演会「沖縄は日本なのか」の開催など、財政的な困難な状況が続く中でも一定の活動が維持されている点が評価できる。

国内外において沖縄の諸問題が注目を集める中、本土で唯一の沖縄研究機関となった本研究所の社会的責任は重く、その安定的な運営は極めて重要な課題である。各兼担所員が関わられた科研費研究課題の採択件数は 3 件あるが、財政基盤の安定化に向けて、研究所として組織的に各種外部資金の獲得に積極的に取り組むことが期待される。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

I 2016 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016 年度大学評価結果総評】

スポーツ研究センターでは教育・研究活動の一環として、2016 年 2 月に市ヶ谷キャンパスのスカイホールで開催された公開講座「オリンピックとメディア」が学内外から多くの参加者を集め、スポーツ健康学分野に対する社会的な関心の高さを証明した。多くの所員の研究活動の成果は、論文や学会報告として対外的に公表され、また、その成果は社会的に評価されたものも多いことは高く評価される。また、これら研究活動を支える、科研費等の外部資金も獲得されている。ただ、組織評価に関しては、所員による自己点検・評価にとどまっていると思われ、他学部有識者や学外有識者による第三者評価組織を設置して、活動に関する客観的評価を受けることが、スポーツ研究センターの今後のさらなる発展につながるものと考えられる。

スポーツ研究センターのホームページが 2015 年 10 月 6 日を最後に更新がされておらず、兼担所員の一覧も 2015 年度のままとなっていたが 2016 年 7 月末までに当該ホームページの更新が予定され対応が見込まれる。ホームページは重要な対外的広報ツールであり、刷新も含め定期的な更新を行うよう改善が見込まれる。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

昨年度の評価において「他学部有識者や学外有識者による第三者評価組織を設置して、活動に関する客観的評価を受けることが、スポーツ研究センターの今後のさらなる発展につながる」とのコメントを受けた。これに対し、研究活動に関しては昨年度より研究倫理委員会を設置し、そのメンバーには本研究所員のみならず、他学部の有識者を含めて構成し、研究計画に対する客観的評価を受けるようにした。またホームページの更新に関しては、2016 年 7 月に更新を行った。今後は専任研究員により、従来よりも頻繁に更新できるように努めたい。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

2016 年度の大学評価で「他学部有識者や学外有識者による第三者評価組織を設置して、活動に関する客観的評価を受けることが、スポーツ研究センターの今後のさらなる発展につながる」との指摘に対して、2016 年度より研究倫理委員会を設置し、他学部の有識者を含めて構成し、研究計画に対する客観的評価を受けるように対応した。またホームページの更新に関しても、2016 年 7 月に更新を行い適切に対応した。今後は、ホームページの更新方式を組織的に明示し、内容のより一層の充実を期待する。

II 自己点検・評価

1 内部質保証

（1）点検・評価項目における 2016 年度の現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。	はい いいえ
------------------------------	--------

【2016 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

2015 年度より、内規により原則として前所長が内部質保証委員を担当している。
年間 3 回程度開催される運営委員会と全所員間のメール審議を通じ、全所員が参画して自己点検評価を行っている。

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・2015 年度より、内部質保証委員を内規により制定した。	

【この基準の大学評価】

※上記（1）～（2）の記載内容に基づき基準全体の評価を記入。

スポーツ研究センターでは年 3 回程度開催されている運営委員会と、メール審議を利用した全所員参加による自己点検・評価活動の実施、内部質保証委員会の内規制定、前所長の内部質保証委員担当など、内部質保証活動が始められたことは評価できる。今後は、内部質保証委員会の組織、機能、活動方針などを明文化するなど明確にし、自己点検活動との綿密な連携を中心に内部質保証活動の整備強化を図ることを期待する。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

2 研究活動

【2017 年 5 月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。
2016 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。
①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）
※2016 年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。 ・2017 年 3 月 13 日（月）市ヶ谷キャンパスに於いて、プロジェクト報告会を実施した。各プロジェクトの報告および質疑応答を実施した。プロジェクトの内容については以下のようになっている。 ① 2016 年度法政大学新入生対象体力テスト結果報告 ② 法政大学硬式野球部所属選手を対象としたコンディショニングに関する研究 ③ 大学スポーツの大学ブランディングに対する影響 ④ 大学スポーツと大学の地域における評価との関係について ⑤ アスリートとアスリート・アントラージュが考えるスポーツパーソンシップ 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）
※2016 年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。 ○出版物 1. 書籍 ・放送席から見たサッカー日本代表の進化論，祥伝社（2016 年 4 月） ・アスリートの心理学，日本文化出版（2016 年 5 月） ・岡崎慎司 身体覚醒メソッド，学研プラス（2016 年 10 月） ・科学する野球 ピッチング&フィールドイング，ベースボール・マガジン社（2016 年 10 月） ・科学する野球 バッティング&ベースランニング，ベースボール・マガジン社（2016 年 12 月） ・スポーツメンタルトレーニング教本 三訂版，大修館書店：163-P.167（2016 年 12 月） ・よくわかるスポーツ倫理学，ミネルヴァ書房：178-179（2017 年 3 月） 2. 論文 ・Perception of Japanese collegiate athletes about the factors related to mentoring support. Journal of Physical Education Research 3(4): 12-24, 2016. ・障がいを持つトップアスリートの心理的競技能力と心理的 well-being の関連. アダプテッド・スポーツ科学 14: 25-32, 2016. ・大学生アーチェリー選手のパフォーマンス向上へのアクセプタンス&コミットメントセラピーの適用事例. 行動療法研究 42: 413-423, 2016. ・受傷アスリートとそのチームメイトが持つ認識の明確化. スポーツ産業学研究 27: 37-47, 2016. ・スポーツパフォーマンス向上のためのアクセプタンスおよびマインドフルネスに基づいた介入研究のシステムティックレビュー. 行動療法研究 43: 61-69, 2016. ・Characteristics of Japanese collegiate athletes with motivation and feasibility for coaching in junior high and high school extracurricular sports activities. International Journal of Coaching Science 10: 115-126, 2016. ・Cooperative coaching: Benefits to students in extracurricular school sports. Journal of Physical Education and Sport 16: 806-815, 2016. ・Relative Age Effect on Psychological Factors Related to Sports Participation among Japanese Elementary School Children. Springer International Publishing・Advances in Human Factors in Sports and Outdoor Recreation: 199-211, 2016.

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ・高速度スパイクに対するディグ方法の提案. スポーツパフォーマンス研究 8: 335-342, 2016.
- ・エゴグラムを用いたアスリート理解と心理支援. 交流分析研究 41(2): 64-70, 2016.
- ・指導者のリーダーシップの在り方が選手の社会的スキルに及ぼす影響—中学校野球部員を対象とした競技レベルとの関係性—. 法政大学スポーツ研究センター紀要 35: 33-38, 2016.
- ・Differences in post-exercise T2 relaxation time changes between eccentric and concentric contractions of the elbow flexors. European Journal of Applied Physiology 116: 2145-2154, 2016
- ・Muscle plasticity related to changes in tubulin and α B-crystallin levels induced by eccentric contraction in rat skeletal muscles. Physiology International 103: 300-309, 2016.
- ・Eicosapentaenoic and docosahexaenoic acids-rich fish oil supplementation attenuates strength loss and limited joint range of motion after eccentric contractions: a randomized, double-blind, placebo-controlled, parallel-group trial. European Journal of Applied Physiology 116: 1179-1188, 2016.
- ・Increases in M-wave latency of biceps brachii after elbow flexor eccentric contractions in women. European Journal of Applied Physiology 116: 939-946, 2016.
- ・日本人一流競技選手における形態および身体組成の競技種目特性. トレーニング科学 27(1): 35-46, 2016.
- ・スポーツ現場におけるあはき師の役割. 東洋療法学校協会学会誌 40: 13-18, 2016.
- ・米国におけるスポーツ鍼灸の実践 : Boise State University での鍼治療を中心に(1). Training journal 38(3): 42-45, 2016.
- ・米国におけるスポーツ鍼灸の実践 : Boise State University での鍼治療を中心に(2). Training journal 38(4): 42-45, 2016.
- ・米国におけるスポーツ鍼灸の実践 : Boise State University での鍼治療を中心に(3). Training journal 38(5): 44-49, 2016.
- ・The Relationship between Perceived Social Media Marketing Activities of J. League Clubs and Behavioral Intention of Spectators. Asian Sport Management Review 11, 2016.
- ・フィギュアスケート観戦のプロダクト構造: 競技的要素に着目して. スポーツマネジメント研究 8(1), 2016.
- ・Prolonged sitting-induced leg endothelial dysfunction is prevented by fidgeting. American Journal Physiology - Heart and Circulatory Physiology 311: 177-182, 2016.
- ・スポーツ演習の授業プログラムと受講生の社会的スキルの関連. 法政大学スポーツ研究センター紀要 35: 1-5, 2017.
- ・指導スタイルとパーソナリティ, 社会的スキルの関連に関する一考察. 法政大学スポーツ研究センター紀要 35: 7-10, 2017.
- ・高校運動部員用礼儀マナー尺度の開発. 法政大学スポーツ研究センター紀要 35: 15-25, 2017.
- ・スポーツ競技者における二分法的思考と心理的健康, 成長感との関連. 法政大学スポーツ研究センター紀要 35: 27-32, 2017.
- ・陸上競技短距離選手における早朝練習が午後からの練習に与える影響. 法政大学スポーツ研究センター紀要 35: 39-47, 2017.
- ・体力および健康に対する主観的評価がスポーツ実施行動に与える影響. 法政大学スポーツ研究センター紀要 35: 49-57, 2017.
- ・指導者の言葉がけがパフォーマンスに及ぼす影響 : 成績低下が著しい種目を対象に. 法政大学スポーツ研究センター紀要 : 35, 59-68, 2017.
- ・日本人及びフィリピン人若年女性におけるボディ・イメージと自意識の関連の比較. 法政大学スポーツ研究センター紀要 : 35, 69-77, 2017.
- ・ダンス学習における即興表現の可能性 -小学校体育科における「表現運動」の授業実践-. 法政大学スポーツ研究センター紀要 35: 85-87, 2017.
- ・学生における体育会活動に対する意識調査. 法政大学スポーツ研究センター紀要 35: 95-102, 2017.
- ・本学学生の諸年次における体格・体力について. 法政大学スポーツ研究センター紀要 35: 103-122, 2017.
- ・法政大学小金井キャンパスの学生の身体的特徴および体力について-学年・学科別の検討(2015 年度)-. 小金井論集 (印刷中)
- ・教育実習「事前指導と事後指導」を組み合わせた相互参加型演習の効果と課題—実習経験者と未経験者の「学び合い」に着目して—. 法政大学スポーツ健康学研究第 8 号 (印刷中)
- ・Prior exercise and standing as strategies to circumvent sitting-induced leg endothelial dysfunction.

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

3. その他（研究報告、DVD 等）

- ・静岡新聞社（朝刊）時評. （2016 年 6 月、7 月、8 月、9 月、11 月、1 月、3 月）
- ・アスリートの心の強化法 指導者・選手のためのメンタルトレーニングの理論と方法（DVD 全 4 巻）. ティアンドエイチ株式会社（2016 年 11 月）

○学会発表等

1. 学会発表

- ・スポーツにおける M-Test の有用性に関する検討 高校ハンドボール選手を対象とした検討. 第 65 回全日本鍼灸学会学術大会（2016 年 5 月）
- ・はり師・きゅう師養成校に在籍する学生への意識調査 スポーツトレーナーに対する意識について. 第 65 回全日本鍼灸学会学術大会（2016 年 5 月）
- ・鍼灸治療に用いる機能的な動作の評価方法. 第 65 回全日本鍼灸学会学術大会（2016 年 5 月）
- ・Impact of order of exercises on substrate oxidation in healthy men. 63rd Annual Meeting of American College of Sports Medicine. （2016 年 6 月）
- ・エイコサペンタエン酸は伸張性収縮に伴う筋・関節機能低下および筋痛を抑制する. 日本運動・スポーツ科学学会第 23 回大会（2016 年 7 月）
- ・肘関節屈曲による伸張性収縮が骨格筋の活性パターンおよび損傷に及ぼす影響. 日本運動・スポーツ科学学会第 23 回大会（2016 年 7 月）
- ・The Effect of Team Unity on Resilience of Athletes. 国際心理学会・第 31 回大会（2016 年 7 月）
- ・Muscle activity of lower extremities and the trunk while doing squats with ViPR. European College of Sports Science, Vienna. （2016 年 7 月）
- ・異なる関節角速度における繰り返しの伸張性収縮が筋および支配神経の機能・構造へ与える影響. 第 2 回日本筋学会学術集会（2016 年 8 月）
- ・局所的な骨格筋の巧緻性が全身動作の巧緻性に及ぼす影響および運経験と関連. 第 64 回日本教育医学会大会（2016 年 8 月）
- ・チームメンバーの属性はメンタルヘルス改善のプロセスに影響を及ぼすのか -競技種目と性別の違いによる検討-. 日本体育学会・第 65 回大会（2016 年 8 月）
- ・スポーツ演習の授業プログラムが受講生の社会的スキル向上に及ぼす影響に関する一考察. 日本体育学会第 67 回大会（2016 年 8 月）
- ・身体表現の教育と人間形成に関する研究（4）. 日本体育学会・第 67 回大会（2016 年 8 月）
- ・運動の実施順序の相違が基質酸化に及ぼす影響. 第 71 回日本体力医学会大会（2016 年 9 月）
- ・小学校のダンス学習における「即興表現」のあり方に関する一考察. 日本スポーツ教育学会・第 36 回大会（2016 年 10 月）
- ・Does the muscle output of an antagonist improve by inserting needles in an agonist? International Conference of World Federation of Acupuncture-Moxibustion Societies Tokyo/Tsukuba 2016（2016 年 11 月）
- ・指導スタイルとパーソナリティ, 社会的スキルの関連 -ジュニアラグビー選手を対象とした予備調査結果-. 日本スポーツ心理学会第 43 回大会（2016 年 11 月）
- ・ギャンブルを行うアスリートはメンタルが強いのか? 日本スポーツ心理学会 43 回大会（2016 年 11 月）
- ・今後求められる学生野球の姿とは? 日本野球科学研究会第 4 回大会（2016 年 12 月）
- ・高校運動部員用礼儀マナー尺度の開発. 九州スポーツ心理学会第 30 回大会（2017 年 3 月）
- ・Differences of MRI T2 Activation Pattern and Damage in Elbow Flexor Muscles After Eccentric Contractions. 5th International Congress on Magnetic Resonance Imaging（2017 年 3 月）
- ・強度を自己選択した有酸素性運動中の生理学的および心理学的指標の変化 -若齢者と中高齢者との比較-. 日本体育測定評価学会第 16 回大会（2017 年 3 月）
- ・選択課題を複合した上肢の調整力テストの試作と選択反応時間との関係. 日本体育測定評価学会第 16 回大会（2017 年 3 月）
- ・福祉作業所におけるダンス活動の意味-20 年を超えるダンスクラブのとりくみから-. 日本養生学会・第 18 回大会（2017 年 3 月）

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

2. 講演 ・合理がメダルを引き寄せる，理工・建築環境学会（2016 年 11 月） ・トレーニングと傷害の境，第 39 回東海スポーツ傷害研究会（2017 年 2 月） 3. その他（放送出演，コラム等） ・バーベルを上げるために，日本放送協会ラジオ第一放送（2016 年 5 月） ・ロシアドーピング問題を受けて，NHK 国際放送（2016 年 7 月） ・波乱の中のリオ五輪，日本放送協会ラジオ第一放送（2016 年 7 月） ・新たなクライテリアの構築が日本のスポーツを大きく変える，Sports Japan，文化出版（2016 年 7 月、8 月） ・アベマプライム，テレビ朝日（2016 年 8 月） ・チェックイレブン，日本放送協会（2016 年 8 月） ・視点・論点：リオ大会を終えて（2016 年 8 月） ・リオオリンピックを振り返って，BCC（山陰放送）ラジオ「特盛りブンショウドン」（2016 年 8 月） ・リオ五輪を振り返って，月刊「W i l l」11 月号/ワック出版（248-267）（2016 年 8 月） ・リオパラリンピックの今，日本放送協会ラジオ第一放送：マイあさラジオ（2016 年 9 月） ・陸上競技日本三段跳史，公益財団法人日本陸上競技連盟 創立 100 周年記念誌（2016 年 10 月） ・新・週刊フジテレビ批評，フジテレビジョン（2016 年 10 月） ・オリンピック競技会場 整備費用見直し，日本放送協会（2016 年 10 月） ・卓球界の育成戦略，日本放送協会ラジオ第一放送：マイあさラジオ（2016 年 11 月） ・競技施設見直しに方向性，日本放送協会NHKニュース7（2016 年 11 月） ・スポーツ歴史の検証～次世代の架け橋となる人びと～，公益財団法人 笹川スポーツ財団（2017 年 3 月） ・スポーツの力を考える，月刊「みんなのスポーツ」平成 29 年 8・9 月号 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等） ※研究所のこれまでに発行した刊行物に対して 2016 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2016 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を箇条書きで記入。 ・引用論文：2 件 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等） （～400 字程度まで）※2016 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。 各所員が個々で学会に所属して精力的に研究活動を行っており、学術論文や学会発表への評価を通じ、本センターに対する客観的評価も高まっていると推察している。また、本センター運営委員会と全所員参加のメール審議を通じてセンターの活動に対する自己点検評価を行うことにより、包括的・多角的な意見を踏まえた組織運営に勤しんでいる。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況 ※2016 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2016 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。 「2016 年度中に応募した科研費等外部資金」 ・2017（平成 28）年度科研費：7 件 「2016 年度中に採択を受けた科研費等外部資金」 ・2016（平成 28）年度科研費 0 件 ・科研費継続課題：4 件 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・「HOSEI2030 アクションプラン」におけるブランディング推進の一つとして挙げられている体育会の強化に寄与するため、本年 5 月 1 日付けで専任研究員を採用し、今後の体育会強化におけるコーディネーターの役割を担ってもらい、また体育会強化のプロセス通じてスポーツ科学に関する研究も遂行してもらい、論文作成および学会発表など、外部への実績発信も積極的に行ってもらい。	

（３）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

特になし

【この基準の大学評価】

2016 年度の研究・教育活動実績については、スポーツ研究センターにふさわしい 5 つのプロジェクトを進めている。対外的に発表した研究成果については、出版物（書籍・論文等）、学会発表、講演や放送出演など、多数の研究成果がある。しかし、著者の情報が記載されていないので、今後記載することが望まれる。研究成果に対する社会的評価は、引用論文 2 件という事実のみが報告されているだけであり、今後は具体的な記載をお願いしたい。外部からの組織評価（第三者評価等）は推察にとどまっており、今後の外部評価の可能性について検討を期待したい。科研費等外部資金の応募・獲得状況については、7 件の応募を試みたが、伸び悩みが見られる。継続課題の 4 件の今後も含め、今後の外部資金の獲得方法を十分に検討することが望まれる。

III 2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況

【2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

該当なし

【大学評価総評】

スポーツ研究センターはスポーツ科学に関する調査・研究、スポーツ施設を利用した実践活動のために設立された研究センターの使命として、多くの書籍・論文や学会発表・放送出演があることは高く評価される。しかし記載された情報には、著者名や発表者名等の情報が無いため、今後はセンターのどの所員の研究活動の成果物が明確にすることが望まれる。また外部資金は継続した科研費を 4 件獲得しているが、今後は、公的資金だけではなく民間研究資金獲得など継続した外部資金獲得の努力を期待したい。また本学のブランディング推進の一環として体育会強化に寄与するため、積極的な情報提供・科学的サポートの支援など、今後の具体的な成果に期待する。この際には、スポーツ・サイエンス・インスティテュート（SSI）の教育・研究に対する連携強化も視野に入れた取り組みも必要である。さらに、2015 年 10 月にスポーツ庁が設立され、国としてのスポーツ振興策が強化された。そのような情勢を積極的にとらえて、国のスポーツ政策との協力をも視野に入れることを期待したい。また研究センターとしては、今まで以上に、地域に密着した社会貢献活動などの活性化の実現にも期待したい。また内部質保証委員会の組織、機能、活動方針などをより明確にし、今後の内部質保証活動の整備強化を図ることを期待したい。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

I 2016 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016 年度大学評価結果総評】

現代法研究所における、2015 年度大学評価委員会による評価結果への対応状況については、定期刊行物の刊行、シンポジウム、セミナー等の活動を積極的に内外に発信したり、必要な人員の確保、予算の配分等が運営委員会において適切に検討されており、概ね妥当である。また今年度より、運営委員会から独立した質保証委員会を設置されたことも評価できる。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

従来通り、定期刊行物（叢書）の刊行を計画的におこない、シンポジウムやセミナーをふくめた活動内容等を積極的に内外に発信する施策等について運営委員会にて検討し、HP のあり方をはじめとする発信体制整備等の実現に必要な人員の確保および予算の確保・配分をおこなっていききたい。

2016 年度より運営委員会内に設置した 3 名からなる所長から独立した質保証委員会を設置し、その活動方針について協議した。2017 年度において本格的な活動に取り組む予定である。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

2016 年度も研究プロジェクトの実施、セミナー・シンポジウムが開催されたことは、現代法学研究所の研究活動が順調であることを示しており、これらの活動は高く評価できる。一方、2016 年度大学評価委員会の評価の対応として、活動内容を内外に発信する施策等が議論された点は評価できる。発信体制の一環としてホームページを充実させるなど施策を通じて、積極的に研究活動を広め、さらなる研究の躍進を期待したい。また、運営委員会から独立した質保証委員会が開催されたことは評価できる。今後は質保証活動を効果的に活用し、当該研究所の研究活動が益々発展することを期待したい。

II 自己点検・評価

1 内部質保証

（1）点検・評価項目における 2016 年度の現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【2016 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

2016 年度に設置した質保証委員会を開催し、今後の質保証活動の方針と計画について協議した。その方針に基づき 2017 年度において本格的に取り組む予定である。

【根拠資料】「特になし」。

・特になし

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

※上記（1）～（2）の記載内容に基づき基準全体の評価を記入。

2016 年度に設置された質保証委員会が無事開催されたことは評価できる。今後実質的な質保証活動が継続し、現代法研究所の質向上につながることを期待する。

2 研究活動

【2017 年 5 月時点における点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

2.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2016 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）
※2016 年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。 【2016 年度 研究プロジェクト】 ・法史学 「判例を通じてみたイギリス法—歴史的経緯と現代との架け橋—」 ・社会法 「地方分権下における自治体議会」 ・現代法システム 「一般社団法人および一般財団法人に関する法律の逐条研究」 「現代社会における生命倫理の法制化をめぐる人権論の国際比較研究」 「公的規制の法と政策—ネットワーク産業を中心に」 「行政紛争の処理に関する適切な法の解明—国家と個人の関係の現代的変容を背景として」 ・都市法 「都市法改正に関する研究」 「会社法と金融商品取引法との交錯とコーポレート・ガバナンス論の新展開」 【2016 年度セミナー】 於：法政大学 研究所会議室 3 ・2015 年 5 月 13 日「フランスにおける人工妊娠中絶と人工生殖技術の法制化をめぐる」 ・2016 年 5 月 28 日「分野別ガイドライン（電力・電気通信）の改訂について」 ・2016 年 7 月 9 日「独占禁止法・知的財産権ガイドラインの改訂について」 ・2016 年 7 月 30 日「母子保健と健康権—公衆衛生における視点から」 ・2016 年 10 月 14 日「生命倫理の法制化」 ・2016 年 11 月 5 日「卸電力取引所の活動について」 ・2016 年 1 月 27 日「生殖補助医療と人権」 ・2016 年 2 月 18 日「第三者の関与する生殖医療—医学的・倫理的側面」 ・2016 年 3 月 24 日「電力・ガス取引等監視委員会の活動と課題」 【講演会】 於：法政大学 研究所会議室 3 ・2016 年 10 月 1 日「韓国における梅謙次郎の立法活動」 【シンポジウム】 ・2016 年 7 月 30 日～7 月 31 日 於：外濠校舎 さったホール 「議会基本条例で進んだ改革、これからの改革」 ・2016 年 11 月 13 日 於：富士見ゲート G503 教室 「自治体の記憶をつなぐ—被災地方議会文書復旧保存の意義と課題」 ・2017 年 3 月 26 日 於：外濠校舎 S306 教室 「新公会計示度と議会の予算・決算報告」 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・2016 年度活動報告
②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）
※2016 年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。 ・2016 年度刊行 出版物 法政大学現代法研究所叢書第 42 号『現代総有論』 五十嵐敬喜 編著 発刊日：2016 年 12 月 15 日 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・法政大学現代法研究所叢書第 42 号『現代総有論』 五十嵐敬喜 編著
③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

※研究所のこれまでに発行した刊行物に対して 2016 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2016 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を箇条書きで記入。

- ・刊行後まだ時間が経過していないこともあり、評価を定めることはできない。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

（～400 字程度まで）※2016 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

- ・該当する組織評価はない。専任スタッフが充実した際に検討したい。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2016 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2016 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。

- ・2016 年度 応募 科研費：10 名
- ・2016 年度 採択 科研費：3 名
- ・2016 年度 継続 科研費：13 名

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・2016 年科研費応募状況一覧

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

（3）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

【この基準の大学評価】

現代法研究所の研究プロジェクトは法学史、社会法、現代法システム、都市法にそれぞれ 1～4 のプロジェクトが設定されており、妥当なプロジェクト運営がなされている。セミナーは 9 回、講演会 1 回、シンポジウム 1 回開催されており、活発な研究活動がなされていることが伺える。一方、研究成果としては、2016 年度は、法政大学現代法研究所叢書第 42 号を発刊されたことは評価に値する。一方で、研究成果に対する社会的評価については、「刊行後まだ時間が経過していないこともあり評価を定めることはできない」としているが、自己点検・評価シートには研究所のこれまでの発行物に対して 2016 年度に書かれた書評や 2016 年度に引用された論文を記入することが明示されている。法政大学現代法研究所叢書は既に 42 号発刊されており、今後はそれらに対する書評や引用された論文等の把握に努めることが望まれる。科研費採択率は全国平均並み（10 件の応募で 3 件の採択）であるが、継続研究を含めると高い獲得状況であり大変優れている。

III 2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況

該当なし

【2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

該当なし

【大学評価総評】

現代法研究所のセミナー、講演会、シンポジウムと研究活動は積極的に高く評価できる。研究所叢書の継続的な発刊は、

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

研究所の社会的評価を高めることに大いに貢献していよう。また、質保証委員会が立ち上がったことは評価される。今後の質保証活動に期待したい。一方、研究所に対する組織評価については、外部の有識者に評価を依頼するなどの検討が望まれる。さらに、研究活動の評価の分析は重要であるため、まずはこれまでの発行物に対する書評や引用された論文等の把握に努めることが望まれる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

I 2016 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016 年度大学評価結果総評】

能楽研究所は、研究・教育活動実績として、国際研究集会、資料展示、複数回のシンポジウム等で国内外に発信したことは、非常に有意義であり高く評価できる。各種関係機関や団体と連携し発表している研究成果は対外的に高く評価されている。また、芸能史研究や各種論文が学会誌や学術誌に掲載され高い評価を受けていることも優れた成果である。今後のさらなる発展を期待したい。

科研費等外部資金の応募・獲得状況は、関係者が科研費を獲得しており、高く評価できる。

質保証活動については、運営委員会を月 1 回開催しており適切に運営されている。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

大学評価委員会から高い評価を受けている状況に安住することなく、今後も能楽研究所の研究成果の社会に向けた積極的な発信、学界における更なる評価の向上、教育プログラムの推進など、より高い目標に向けた多様な取り組みを行っていききたい。具体的には、海外の学生に向けた能楽教育プログラムの充実、英語版能楽全書、能楽資料デジタルアーカイブの拡充などを当面の課題とし、学内外の研究者と手を携えて、能楽研究所の「さらなる発展」につとめる。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

能楽研究所の国際的な拠点としての高い評価は、優れた研究・教育活動や組織運営に裏打ちされている。能楽研究所は 2016 年度の大学評価委員会より高い評価を受けているが、引き続きこの水準を維持した質の高い研究活動が推進されている。2016 年度の評価は、今後の躍進を期待するものであり、2017 年度も新たな取り組みによる研究所のさらなる発展が期待される。

II 自己点検・評価

1 内部質保証

（1）点検・評価項目における 2016 年度の現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【2016 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

1) 能楽研究所運営委員会

構成員

山中玲子 法政大学能楽研究所所長
宮本圭造 法政大学能楽研究所教授
星野 勉 法政大学文学部教授
阿部真弓 法政大学文学部教授
伊海孝充 法政大学文学部准教授
鈴木 靖 法政大学国際文化学部教授
竹内晶子 法政大学国際文化学部教授
岩月正見 法政大学デザイン工学部教授
高村雅彦 法政大学デザイン工学部教授

活動概要

原則として月一回、運営委員会を開き、研究所の活動の検証を行っている。2016 年度は 4 月、6 月、9 月、10 月、11 月、1 月、2 月、3 月に実施。

2) 文科省認定の「能楽の国際・学際的研究拠点」の運営委員会

構成員

増田正人 学術支援本部担当常務理事
山中玲子 法政大学能楽研究所所長
宮本圭造 法政大学能楽研究所教授
スティーヴン・ネルソン 法政大学文学部教授
竹内晶子 法政大学国際文化学部教授

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

坂上 学 法政大学経営学部教授
 稲田秀雄 山口県立大学国際文化学部教授
 大谷節子 成城大学文芸学部教授
 観世喜正 観世流能楽シテ方、能楽協会理事
 佐藤禎一 元ユネスコ日本政府代表部大使、東京国立博物館名誉館長
 竹本幹夫 早稲田大学文学学術院教授
 マイケル・ワトソン 明治学院大学国際学部教授

活動概要

原則として年に一、二回、専門委員会を開き、研究拠点としての活動の検証を行っている。2016年度は2017年3月に実施。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

※上記(1)～(2)の記載内容に基づき基準全体の評価を記入。

能楽研究所の質保証は、月1回の運営委員会と年1～2回の専門委員会の中で議論されている。質保証に関する独立委員会が設置されていないが、これは研究所という組織の規模を考えると妥当な判断と言える。

2 研究活動

【2017年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2016年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2016年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

- 研究会「作品研究〈籠祇王〉」能楽学会との共催 7月1日（参加者30名）
- 茂山家×なごみ狂言会チェコ東京公演「笑いは国境を越える」 於矢来能楽堂 7月27日（参加者190名）
- 英語版能楽全書作成のための研究集会と編集会議（非公開） 7月28～30日（参加者14名）
- 作品研究セミナー・シンポジウム（非公開） 9月11日（参加者13名）
- 研究会「幕末期大蔵流台本「悪太郎」の実態と声による復元」能楽学会との共催 9月30日（参加者30名）
- 第19回能楽セミナー「能をめぐる学際研究」 於スカイホール 10月8日（参加者70名）
- 研究集会「国語学から見た能楽伝書」 10月16日（参加者35名）

場所は特記したもの以外は全てBT会議室

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・ジャーナル6号

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2016年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。

*研究所としての刊行物

- ・紀要『能楽研究』41号（専任所員の論文二本、兼担所員の論文二本、外部からの寄稿・投稿三本などを収録）
2017年3月刊
- ・能楽研究叢書6『近代日本と能楽』（外部の研究者を含め、九本の論文を収録。口絵を含め全376頁）
2017年3月刊
- ・能楽研究叢書7『金春家文書の世界』（外部の研究者を含め、七本の論文を収録。口絵を含め全202頁）

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

2017年3月刊 ※専任所員の研究成果 山中玲子『御世話筋秘曲』の解説と復元の記録（『能楽研究』41号） 『新時代への源氏学』第十卷（共著、竹林舎） 『ともに読む古典』（共著、笠間書院）ほか 宮本圭造「御家石橋」の成立と相伝の経緯（『能楽研究』41号） 『近代日本と能楽』（編著、能楽研究所） 『金春家文書の世界』（編著、能楽研究所） 『世阿弥を学び、世阿弥に学ぶ』（共著、大阪大学出版会） 「徳川家康の政治戦略と能」（『観世』第83巻5号～第84巻3号）ほか
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）
※研究所のこれまでに発行した刊行物に対して2016年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や2016年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を箇条書きで記入。 ・本研究所の多年にわたる研究協力に対し、6月、日本芸術文化振興会から感謝状が贈られた。 ・10月に開催した能楽セミナー「能をめぐる学際研究」が11月4日付『読売新聞』夕刊に取り上げられた。 ・能楽研究において最も権威ある学会誌『能と狂言』14号所載の論文2本に、専任所員2名の論文がそれぞれ引用されているほか、『藝能史研究』216号の書籍紹介欄に、専任所員1名が監修・執筆を行った国立能楽堂の企画展図録が、『金春月報』に専任所員1名の論文が取り上げられている。 ・紀要等では、『能楽研究』41号所載の論文1本に専任所員1名の論文が引用されているほか、『神戸女子大学古典芸能研究センター』10号所載の論文1本にも専任所員1名の論文が数回にわたって引用されている。2016年度に刊行された全ての書籍・論文を検索したわけではなく、引用の総件数を具体的に挙げることは出来ないが、以上の例から、参照すべき業績として学界で高く評価されていると言える。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）
（～400字程度まで）※2016年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。 定期的な外部評価は受けていないが、文科省の共同利用・共同研究拠点として毎年細かなチェックを受けている。2016年度には、文科省の研究支援係長による現地調査が行われ、アドバイスを受けた。また、2013年度から三年間にわたる「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業」の事後評価が行われ、「A：事業の目的は概ね達成された」と高い評価を得た。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業」事後評価結果について（通知）
⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況
※2016年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および2016年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。 ※2016年度中に応募した科研費等部位部資金 ・学術研究振興資金「能楽の国際参照標準確立と多面的展開に向けての総合研究」（採択。100万円＋学内予算220万円）（2017年度分） ・文科省補助金「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業 機能強化支援」（不採択） ※2016年度中に採択を受けた科研費等外部資金 ・学術研究振興資金「能楽の国際参照標準確立と多面的展開に向けての総合研究」（140万円＋学内予算308万円） ・科学研究費補助金基盤（B）「能楽及び能楽研究の国際的定位と新たな参照標準確立のための基礎研究」（研究代表者：山中玲子、2016年度390万円） ・科学研究費補助金基盤（B）「能楽資料データベース構築に向けた金春家文書の総合的研究」（研究代表者：宮本圭造、2016年度180万円）
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・特になし

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

特になし

【この基準の大学評価】

能楽研究所の研究・教育活動実績として、研究会・セミナー等が 7 回、対外的に発表した研究成果として、刊行物が 3 件、さらに専任教員の多くの研究成果が著書等として発表されており活発な研究活動が繰り広げられていることが伺える。また、日本芸術文化振興会からの感謝状の贈呈、「能をめぐる学際研究」が読売新聞紙上で紹介されるなど社会的な評価が高く、かつ学術的にも能楽研究所関係者の多くの論文が引用されることから、社会・学術両サイドから高く評価されていると判断される。

一方、外部評価の一環として、これまでの拠点として能楽研究所の「特色ある共同拠点の整備の推進事業」が A 評価を受けたことは特筆される。外部資金も科研費基盤 B に 2 件採択されるなど、高いレベルの研究がなされていることは能楽研究所の高い研究力が反映されていると判断され、これは極めて高い評価に値する。さらに、研究所の Journal16 には、理工系の教員によるコメントが記されている点にも注目したい。これは能楽という特定分野に専門外からの意見を求めるものであり、このような柔軟な取り組みは、大いに評価されるべきものであろう。

III 2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況

該当なし

【2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

該当なし

【大学評価総評】

能楽研究所の研究・教育活動は、実績として十分な研究成果があり、活発な研究活動が継続的になされていることは特筆に値する。また、日本芸術文化振興会からの感謝状の贈呈、研究所の学際的研究が新聞に掲載され、学術論文の引用数も多く社会・学術両面から高い評価を受けていることも優れた成果である。

一方、外部評価結果として、「特色ある共同拠点の整備の推進事業」が A 評価を受けたことは、優れた研究活動が客観的にも認識されていることを示しており、これまでの研究所の活動に敬意を表したい。外部資金も科研費基盤 B に 2 件採択されるなど申し分ない。

質保証活動も運営委員会を月 1 回開催しており、適切に運営されている。能楽研究所の国内外の研究拠点としてのさらなる躍進に期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

I 2016 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016 年度大学評価結果総評】

日本統計研究所は、小規模な組織ではあるものの、国際ワークショップや講演会、自治体統計セミナー、出版物の刊行など、十分なプレゼンスを発揮していると言える。2016 年度大幅な予算削減にともない、八王子市を対象とするデータ購入経費を中心に大幅な見直しを行うなど、研究活動面での見直し並びに対応を行いつつある。厳しい財政状況の下、研究活動への影響は大きいものがあると思うが、公的資金による研究との積極的な連動など、効率化に努めていることは評価できる。重点事業の設定や外部研究資金の獲得など、対応策のさらなる検討を期待したい。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

国際ワークショップや自治体職員を対象とした統計セミナーについては、開催テーマも含めて開催情報を記載した。また、各研究所員（兼担）による公刊論文やそれぞれの所属学会等での報告については多岐・多数にのぼるため本シートでは研究所の刊行物による公開分にとどめている。なお、本研究所は、「統計分野での官学連携の学側の拠点」施設として研究活動を展開していることから、研究成果を現実の政府統計の質の向上、統計システムの機能の改善に直接反映することを社会的貢献と位置づけている。具体的には、近年世界の統計の新たな潮流として注目されている民間のウェブデータの統計への利活用、欠損情報のデータ補完による統計データの質の改善、経度・緯度情報の統計への利活用に関する研究は、政府統計における取り組みに直接反映された。重点事業の設定としては、全市区町村について小地域産業連関表を作成し、地方自治体への提供を通じた社会貢献を行なった。実際に 8 県府市（兵庫県、福島市、京都市、大阪府、伊勢市、舞鶴市、弘前市、太宰府市）から利用申請があり、日本統計研究所から無償での提供を行った。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

日本統計研究所に対し、財政状況が厳しくなる中、研究活動が後退しないよう外部資金の獲得や効率化が期待されていたが、民間のウェブデータの統計への活用、欠損情報のデータ補完による統計データの質の改善、緯度経度情報の統計への活用などの研究で得られた成果は外部からも高く評価され、政府統計における取組に直接反映された。また、全市町村について作成した小地域産業連関表については、兵庫県や京都市、大阪府など 8 県府市からの利用申請に基づき無償で提供されるなど、活発な研究活動が行われていると高く評価できる。

II 自己点検・評価

1 内部質保証

（1）点検・評価項目における 2016 年度の現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【2016 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

- ・本研究所は兼担所員6名という小規模組織であるため特に質保証委員会等の組織を設けてはいないが、運営委員会での討議を通じて研究活動内容の質保証をはかってきた。
- ・外部評価報告書において指摘された事項を研究の質保証に反映している。

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・予算が大幅に削減されたという厳しい制約の中で、最大限の对外情報発信を行う方策として考えたのが、全市区町村について小地域産業連関表を作成し、地方自治体に提供するという取り組みを実施した。 ・これは特定の地方自治体との連携を探るのではなく、全市町村について小地域産業連関表を作成することにより、潜在的なニーズを掘り起こすことを意図したものであった。実際に 8 県府市から利用申請があり、日本統計研究所から無償での提供を行った。 ・さらに国際ワークショップをさらに開かれたものとするため、研究所ホームページに開催案内を掲載するとともに、統計関連の学会を通じて関係する研究者への周知を行った。	

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【この基準の大学評価】

※上記（１）～（２）の記載内容に基づき基準全体の評価を記入。

日本統計研究所は兼担所員が６名であるため特別な質保証委員会は設けられていないが、運営委員会で質保証活動および外部評価などの活用により質保証活動は適切であると評価できる。

2 研究活動

【2017年5月時点における点検・評価】

（１）点検・評価項目における現状

2.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2016年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2016年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を簡条書きで記入。

（１）国際ワークショップ

第11回 Challenges in Big Data Privacy 2016年10月14日（金）

ボアソナードタワー25階B会議室（参加者20名）

第12回 The 2011 British Population Census and the 2021 Census Programme 2016年10月20日（木）

ボアソナードタワー19階研究所会議室4（参加者19名）

第13回 Guidelines on Statistical Business Registers 2017年3月14日（火）

ボアソナードタワー19階研究所会議室4（参加者14名）

なお各回のワークショップ開催の前日（翌日）に総務省統計局において本研究所と共催による講演会を開催（毎回50～60名参加）。

（２）自治体統計セミナー

第4回 自治体の人口ビジョンと人口移動 ―GISによるアプローチ―

2016年8月9日（火）ボアソナードタワー26階A会議室（参加者53名）

第5回 小地域統計情報の利用と活用 ―人口減少社会における地域課題の分析―

2016年9月11日（日）鹿児島大学法文学部3号館103講義室（参加者16名）

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・詳細については年次活動報告Ⅱ5及び6を参照

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2016年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を簡条書きで記入。

・研究所の出版物については論文等の参照の際の報告を特に義務づけてはいない。そのため具体的な引用件数は研究所では把握を行っていない。本研究所では、各兼担所員個人の制度化された業績の蓄積よりも、学界に対しては統計関連学会の新たな研究分野展開の契機となるような研究、報告、セッションの提案、またわが国の政府統計機関に対しては国際水準の統計データを作成、提供できるようなシステム構築や技術面での対応に関する各種助言を政府委員会等で行うことで研究成果を現実の統計行政へ反映させる活動を中心に行っている。後者の近年の特筆すべき成果としては、政府統計調査の基盤情報としての事業所母集団データベース（日本版ビジネス・レジスター）の統計局による構築（平成25年度供用開始）などがある。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・本研究所の所員の具体的な社会貢献についての詳細は年次活動報告Ⅱ7を参照

③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）

※研究所のこれまでに発行した刊行物に対して2016年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や2016年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を簡条書きで記入。

（１）『研究所報』

No.48 首都圏における人口移動

（２）『統計研究参考資料』

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

No. 117 東京都の人口予測 2016 .08

No. 118 地方ジェンダー(男女共同参画)統計書の作成と活用 そのⅡー岡山市と東京都大田区のジェンダー統計リーフレット作成の記録ー 2016 .08

(3)『オケーショナルペーパー』

No. 58 小地域データから見た東京23区への移動者による移動先選択について (1)ー東京都の市郡部から都区部への移動ー 2016.04

No. 59 The Measurement of Labour Exchange Rate through Intermediate Trade in Japan, the U.S., and China 2016.04

No. 60 Q G I S上で動作する公共交通経路検索プラグインの試作とそれを用いた交通利便性の評価 2016.04

No. 61 移動選択指数から見た東京60キロ圏から特別区部への移動者の移動圏の地域特性についてー東京23区における移動先選択パターンによる移動元のクラスタリングー 2016.05

No. 62 ライフステージから見た世帯の空間分布についてー東京50キロ圏を対象としてー 2016.06

No. 63 タワーマンションに伴う事業所の開業についてー東京都江東区湾岸地域の考察ー 2016.07

No. 64 居住地移動の小地域データから見た地域の特性についてー1990、2000年代後半期の江東区を事例にー 2016.08

No. 65 都区部各区における人口動向に関する一考察ー人口移動に見られる局面転換時点と人口推移のパターンによる区の類別化ー 2016.09

No. 66 フランスのビジネス・レジスターSIRENEの創設と初期の状況について 2016.09

No. 67 人口の社会移動の統計的把握と「不詳」ー社会増減に関する二種類の把握方法の比較を手掛りにー 2016.09

No. 68 「その他全ての自由人」ー「マイノリティ」への米国センサス調査の初期事例ー 2016.11

No. 69 2010年代前半東京50キロ圏におけるインバウンド・アウトバウンド移動者の距離帯別年齢特性について 2016.12

No. 70 東京多摩地区における域内人口移動の空間的特徴とその変化 2016.12

No. 71 東京多摩地区から特別区部への人口移動の空間的特徴とその変化 2016.12

No. 72 東京50キロ圏における距離帯間の移動選好についてー住民基本台帳人口移動報告「参考表」による年齢階級別移動状況ー 2017.01

No. 73 つくばEX沿線における地域間人口移動について 2017.01

No. 74 「チャイニーズ」と「ホワイト」との間でー1852年カリフォルニア州センサスにおける中国人をめぐる調査の実態ー 2017.01

No. 75 鉄道開業前・後期における鉄道沿線域内人口移動についてーつくばEX沿線域内18市・区間の移動を事例としてー 2017.02

No. 76 首都圏南西翼地域における距離帯間・距離帯内移動について 2017.02

No. 77 首都60キロ圏における移動ホットスポットの検出 2017.03

(4)『ディスカッションペーパー』

No. 11 90年代における都区部人口の移動者特性の変質について地域 2016.08

No. 12 地域間移動における移動先選択の評価についてー移動選択指数における移動期待数の評価方法を中心にー

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・特になし

③ 研究所(センター)に対する外部からの組織評価(第三者評価等)

(～400字程度まで) ※2016年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

本研究所では2名の外部評価委員による外部評価をいただいている。

- ・研究所で開催している国際ワークショップ、自治体職員を対象とした統計セミナー、研究所員の政府委員会等での学術専門委員としての政府統計の改善への参画、自治体等で開催されるセミナーでの報告といった研究成果の対外発信について高い評価
- ・学内への統計情報の提供サービス面での貢献

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・外部評価委員による評価報告の詳細については年次活動報告V3を参照

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

※2016 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2016 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。

所員が研究代表者である科学研究費のみを記載

- ①平成 27 年度日本学術振興会科学研究費（基盤（C） 課題番号 50287033）「経済センサスの情報充実及び精度向上のための技法開発」 330 万円
- ②平成 27 年度日本学術振興会科学研究費（挑戦的萌芽 課題番号 90565300）「OTC 医薬品の広告表現が知覚リスクを通して意思決定過程に与える影響」 104 万円
- ③平成 28 年度日本学術振興会科学研究費（基盤研究 B 課題番号 16H03625）「開発途上国の持続的発展を支えるインフラストラクチャーの役割に関する経済理論研究」 533 万円

兼但所員全員が科研費申請を行った。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・2016（平成 28）年度法政大学公的研究費採択者一覧

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・限られた予算という厳しい制約の中で、業務を改めて洗い直し最大限の対外情報発信を行うことのできる方策を模索した結果、全市区町村について小地域産業連関表を作成し、地方自治体に提供するという取り組みを実施した。実際に 8 県府市から申請があり、無償で提供を行った。	

（3）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・現在、政府では GDP 統計の大改革が進められている。現在の研究所の態勢は基礎統計に重点があるが、国民経済計算との連携が課題であり、その方法を検討する。

【この基準の大学評価】

日本統計研究所では、国際ワークショップを 3 回、自治体統計セミナーを 2 回開催し、それぞれ多数の出席者を集めた。各所員による研究の成果も多数あると認められることから、研究活動は活発に行われており、成果も上がっていると評価できる。2 名の外部評価委員からも高い評価を得ている。所員が研究代表者である科研費は 3 件あり、この点でも高く評価できる。引き続き外部資金の獲得に向けた努力を期待したい。

III 2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況

評価基準		研究活動
現状の課題・今後の対応等		限られた予算という厳しい制約の中で、業務を改めて洗い直し最大限の対外情報発信を行うことのできる方策を模索したい。
年度末報告	執行部による点検・評価	①活動の費用対効果の面からの洗い直し ・国際ワークショップと自治体統計セミナーについては政府、地方自治体の統計関係者の間で本研究所の活動として広範に認知されていることから、研究所員が取得している科研費による研究と連動させることで、その充実を図った。ワークショップについては第 11 回、12 回、13 回、また自治体統計セミナーは第 5 回と第 6 回を開催し、新たな統計の展開方向についての実質的な討論の場とすることができた。 ・研究成果の発表については、『研究所報』を初めとして本研究所が保有する様々な成果公刊媒体によって、研究所員による研究成果だけでなく、統計関連学会の研究者、政府・自治体職員との共同研究等において過年度を超える刊行物を公刊した。なお、これらの研究成果については同時にウェブ公開することで社会への普及を図っている。 ・昨年度から試験的に行ってきた地方自治体に対する地域産業連関表データの提供について、予想を超える利用申請が寄せられたことから、本研究所の活動として位置づけ、デー

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

	タ提供面での社会貢献さらに強化することとした。 ・データベースの更新用データの入手経費の合理化を図る目的で新たに使用したデータについてその代替可能性を検証した結果、それまでとの時系列的連続性が担保できないことが判明した。研究所の将来的研究活動の方向との整合性、費用対効果等を勘案した結果、研究所プロジェクトの一つとしてこれまで行ってきた事業所データベース整備事業を中止することとした。 ②公的資金の取得に向けての取り組み 研究所の研究活動のさらなる拡充を図るために、新期申請の可能な研究者は 2017 年度科研費への申請を行い、公的研究資金の取得に努めた。 ③データ提供サービス事業の開始 本研究所によるデータサービスとして市区町村産業連関表の提供を開始した。同資料については、人口減少局面にある多数の基礎自治体から提供の依頼があり、行政施策立案のための分析資料として活用されている。
--	---

【2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

限られた予算の中で最大限の対外情報発信ができるよう、費用対効果の面からの事業の選択およびより効率的な実施方法の模索が行われた。具体的には、国際ワークショップや自治体統計セミナーを科研費による研究と連動させて開催したり、統計関連学会の研究者や政府・自治体職員との共同研究による成果を刊行・出版したりといったことである。こうした中でも地方自治体に対する地域産業連関表データの提供といった社会貢献が行われており、着実に成果を挙げていると高く評価できる。

【大学評価総評】

日本統計研究所は、長い歴史を持ち、大きな成果を挙げてきた研究所であるため、伝統を守りつつ限られた予算の中で持続的に成果を挙げていくことは大きな困難を伴うと推察される。統計データは自治体や政府などが行政施策を立案する際に威力を発揮するものの、一般の人々には直接成果として見えにくい性質のものである。こうしたものを時系列的連続性を保ちつつ長年にわたって研究し、成果を挙げていることを高く評価する。少人数の所員にもかかわらず継続的に国際ワークショップや研究会等を開催していることも研究所の高いアクティビティを示すものであり評価できる。市区町村産業連関表データの提供は、これからの日本における地方再生などになくてはならないものになると考えられることから高く評価できる。財政面での問題を公的資金の獲得で解決しようとする姿勢も評価できる。今後の活動が継続的に活発に行われていくことを期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

I 2016 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016 年度大学評価結果総評】

比較経済研究所は国際比較の研究・調査をテーマに 30 年を超えた歴史のある研究機関として、国際専門誌・シンポジウム・セミナー等の研究は安定した高い評価を得ている。研究領域については、国内はもとより東アジア・東南アジアの諸国を対象として、独創的な研究を進めてきている。

法政大学のグローバル化においてもアジア諸国からの留学生の増強を意図しており、海外研究機関ネットワークの拡充、研究活動・研究成果のより対外的な情報発信、大学院生・若手研究者の育成などを、より進めるよう望みたい。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

比較経済研究所の研究活動については従前のおおむね高い評価を受けており、今後も継続して国際雑誌と国際学会における研究成果の公表を積極的に進めるとともに、シンポジウムやセミナーなどの対外発信に努めたい。また研究プロジェクトへの若手研究者の積極的参画や客員研究員制度を用いた海外研究者の招聘などを通じて国際的なプレゼンスを向上させることを企図していく。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

比較経済研究所は、30 年にわたって経済問題に関する国際比較研究を着実に進めている。2016 年度の大学評価報告書においても、その点が高く評価されている。2016 年度の研究所の対応も、従来の研究活動の継続に力が注がれているようである。高い質を維持していることは、十分に評価できる。

一方で、グローバル化に対応して開催された国際会議は参加者が多くはない。専門的研究であることもその理由であるが、研究成果をより多くの参加者に還元するためのシンポジウム開催の取り組みに期待したい。

II 自己点検・評価

1 内部質保証

（1）点検・評価項目における 2016 年度の現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【2016 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

- ・2016-17 年度の質保証委員会は絵所秀紀（経済学部・委員長）、胥鵬（経済学部）、近藤章夫（比較経済研究所所長）で構成された。
- ・質保証委員会は 2017 年 5 月 12 日に開催され、2016 年度の活動に対する評価を受けた。

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

※上記（1）～（2）の記載内容に基づき基準全体の評価を記入。

比較経済研究所の質保証委員会は経済学部の教員 3 名で構成され、2017 年 5 月 12 日に開催されている。2016 年度の研究活動は順調であり、年度計画が真摯に実行されている。

2 研究活動

【2017 年 5 月時点における点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

2.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2016 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

※2016 年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

・【研究プロジェクト関連コンファレンス等】

・比較経済研究所国際シンポジウム

開催日：2016 年 12 月 2 日、開催場所：法政大学市ヶ谷キャンパス、参加者 12 名

テーマ：STAMP（システム理論に基づく事故モデル）研究討論会

コーディネーター：馬場敏幸（法政大学）

発表者：John Thomas 博士（マサチューセッツ工科大学）

共催・支援：日本 MOT 学会、科学研究費補助金基盤研究 (B)「インド・ブラジルの金型産業研究：技術形成・発展段階・競争力・他地域との比較検証」（代表：馬場敏幸（法政大学）、科学研究費補助金基盤研究 (B)「サイエンス型産業における技術・人的連関と集積効果に関する経済地理学的研究」（代表：近藤章夫（法政大学）、科学研究費補助金基盤研究 (S)「アーキテクチャ指向形式手法に基づく高品質ソフトウェア開発法の提案と実用化」（代表：荒木啓二郎（九州大学）

・『政治経済学的要因を考慮に入れた経済政策分析と経済制度設計：理論と実証』プロジェクト中間報告コンファレンス

開催日：2017 年 3 月 15 日、開催場所：法政大学市ヶ谷キャンパス、参加者 16 名。

コーディネーター：篠原隆介（法政大学）

発表者：平賀一希（東海大学）、近藤春生（西南学院大学）、大野太郎（信州大学）、小林航（千葉商科大学）

・【講演会・セミナー等】

・第 34 回比較研公開講演会、

開催日：2016 年 6 月 15 日、開催場所：法政大学多摩キャンパス、参加者 100 名

比較研シリーズ No. 30『金型産業の技術形成と発展の諸様相：グローバル化と競争の中で』出版記念講演会

テーマ：夢・アイデアを製品に具現化させる「金型」とはなにか？：グローバル競争下、日本のものづくり復権にむけて

講演者：馬場敏幸（法政大学）、兼村智也（松本大学）、田中美和（神奈川大学）、川邊安彦（株式会社ユニバンス）

・第 35 回比較研公開講演会

開催日：2016 年 10 月 12 日、開催場所：法政大学多摩キャンパス、参加者 110 名

テーマ：世界経済の潮流 2016 I ～世界経済の直面するリスクと課題～

講演者：阿部龍斗（内閣府政策統括官（経済財政分析担当）付参事官）

・第 32 回比較研サロン

開催日：2016 年 6 月 3 日、開催場所：法政大学比較経済研究所、参加者 14 名

報告者：小黒一正（経済学部）

テーマ：「日本財政を巡る課題」

・第 33 回比較研サロン

開催日：2016 年 12 月 16 日、開催場所：法政大学比較経済研究所、参加者 6 名

報告者：山崎友紀（経済学部）

テーマ：「米国カリフォルニア州における二酸化炭素削減技術、そして理科を主体とする学校教育の現状について」

・八王子市学園都市大学（いちよう塾）

開催日：2016 年 11 月 2 日、会場：学園都市センター 第 1 セミナー室

テーマ：「戦略的思考で読み解く経済社会問題～ゲーム理論とその応用について～」

講師：篠原隆介（比較研専任研究員）

・【その他】

・各共同研究プロジェクトにおいて実施されている研究会の詳細については、比較経済研究所「年次活動報告 2016 年度（平成 28 年度）」を参照のこと。

・【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・比較経済研究所「年次活動報告 2016 年度（平成 28 年度）」

※ホームページ上にて公表 (<http://www.hosei.ac.jp/ices/study/04.html>)

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2016 年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。

・図書（共同研究比較研シリーズプロジェクトの成果）の刊行

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

法政大学比較経済研究所・田村晶子編『国際競争力を高める企業の直接投資戦略と貿易（法政大学比較経済研究所 研究シリーズ 31）』日本評論社、2017 年 3 月 25 日刊。 ・英文ジャーナルの発行…比較研の英文紀要 “Journal of International Economic Studies”、No.31、発行日：2017 年 3 月。6 本の論文を収録（特集論文 5 本、テーマ：Studies of Dies and Molds: Special Tools Realizing Dreams and Ideas of Industrial Products、査読論文 1 本収録）。 ・各共同研究プロジェクトにおいて公表した研究成果については、比較経済研究所「年次活動報告 2016 年度（平成 28 年度）」を参照のこと。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・比較経済研究所「年次活動報告 2016 年度（平成 28 年度）」 ※ホームページ上にて公表（http://www.hosei.ac.jp/ices/study/04.html）
③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）
※研究所のこれまでに発行した刊行物に対して 2016 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2016 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を箇条書きで記入。 ・Shinohara R (2009) The possibility of efficient provision of a public good in voluntary participation games. Social Choice and Welfare 32:367-387. (2016 年度引用件数 3 件) ・Shinohara R (2010) Coalition-proof equilibria in a voluntary participation game. International Journal of Game Theory 39:603-615. (2016 年度引用件数 2 件)
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）
（～400 字程度まで）※2016 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。 ・比較経済研究所では隔年で外部評価を実施しており、直近では 2015 年に実施した。次回は 2017 年度秋学期を予定している。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況
※2016 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2016 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。 ・2016 年度の科学研究費補助金への応募、5 件。採択 3 件。 ・2016 年度の科学研究費補助金の採択、8 件（研究所研究員が代表者のみ）。 内訳：基盤研究 B（一般）2 件（交付額 4,900 千円）、基盤研究 B（海外学術調査）1 件（交付額 2,700 千円）、基盤研究 C 3 件（交付額 2,900 千円）、若手研究 B 1 件（交付額 1,100 千円）、国際共同研究加速基金 1 件（5,300 千円）
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・学内資料「2016（平成 28）年度法政大学公的研究費採択者一覧」

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

（3）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（1）～（2）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・特になし

【この基準の大学評価】

比較経済研究所では、研究プロジェクトに関連したコンファランス、公開講演会、サロン（研究会）などが適切に開催

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

されている。また、2つの比較研シリーズプロジェクト、10の兼担プロジェクト、ならびに四つのその他の事業・活動が、活動報告に記載されるとともにホームページ上に記載されており、図書や英文ジャーナルなどが順調に刊行されている。研究員の個人的研究や学会発表などを含め、活発に研究成果を発表しており、高く評価できる。研究成果に対する社会的評価は、一名の研究員について記述されている。

外部評価に関しては隔年で開催されており、適切であると評価できる。科研費の採択状況は、2016年度に5件の応募に対して3件が採択されている。それ以前からの継続も含めて、研究員が代表者となっている科研費の採択件数が8件と高い採択率であり、評価できる。

III 2016年度における現状の課題等に対する取り組み状況

該当なし

【2016年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

該当なし

【大学評価総評】

比較経済研究所は設立以来、30年にわたって経済諸問題に関する国際比較研究を着実にを行っている。毎年刊行される研究所叢書、英文ジャーナルの継続性と質の維持、および国際会議や講演会の開催も順調に執行されていることは高く評価できる。また12の研究プロジェクトと四つのその他の事業・活動が活動報告に記載されるとともにホームページ上に記載されており、積極的活動が対外的に公開されている。さらに科学研究費補助金の採択率も高く、今後も積極的な研究活動の継続が期待できる。

特に、海外の研究者を招いた国際会議はグローバル化の観点からも優れた取り組みである。ただ、学生向けのセミナーなどの参加人数は多いが、その一方、国際会議や研究報告コンファレンスの参加人数が少ないようである。研究の社会的還元という観点からは、テーマの設定も含めて、広く一般向けの会議の開催についても今後検討されることが望ましい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

I 2016 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016 年度大学評価結果総評】

イノベーション・マネジメント研究センターは、多くの所員が科研費等の外部資金を獲得し、質や量ともに高い研究活動と成果の公表が行われている点で高く評価できる。今後は、国際性の高い事業を企画するなど、法政大学のグローバル化への対応に配慮しながら、より一層社会に貢献していくことが期待される。

また内部質保証についても、研究所運営主体とは異なった関係者による内部質保証を充実させ、より厳格な PDCA サイクルを機能させる取り組みにも期待したい。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

法政大学として平成 26 年度に採択されたスーパーグローバル大学等事業「スーパーグローバル大学創成支援」に基づき、当センターでも以下のような国際性の高い事業等に取り組んでいる。具体的な活動として、海外から講師を招聘し、国際セミナーや国際シンポジウムを開催した。また、外国人客員研究員を受け入れ当センター所員の指導により研究を行っている。今後、セミナーやワーキングペーパー等で研究成果を報告する予定である。

内部質保証については、定期的に運営委員会を実施し、事業内容を随時報告している。運営委員会に参加する運営委員は様々な学部の教員で構成され、学部を超えた研究所ならではの事業を実施している。今後も外部団体による点検等を実施する予定はない。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

イノベーション・マネジメント研究センターは、昨年度に引き続き、多くの所員が科研費等の外部資金を獲得している。また 14 の研究プロジェクトによる活発な研究活動が行われており高く評価できる。2016 年度大学評価に対応して、海外から講師を招いたシンポジウムやセミナーなども頻繁に開催されており、引き続き国際性の高い活動を継続していくことが期待される。

また、内部質保証に関しては、研究所運営主体とは異なった関係者による質保証の点検は行われていないが、運営委員会の内部での充実した報告・審議によって一定程度の対応は行われているといえよう。

II 自己点検・評価

1 内部質保証

（1）点検・評価項目における 2016 年度の現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【2016 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

- ・所員の構成は、所長 1 名、副所長 1 名、運営委員 7 名、兼担所員 26 名、兼任所員 1 名、客員研究員 15 名（2017 年 3 月 31 日時点）。
- ・運営委員会を年 5 回実施。運営委員会では、セミナーやシンポジウム等の催事の計画や報告、新所員の委嘱、叢書の出版、その他当センターにおける運営事業全般について審議、報告する。

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
特になし。	

【この基準の大学評価】

※上記（1）～（2）の記載内容に基づき基準全体の評価を記入。

イノベーション・マネジメント研究センターの所員は、所長 1 名、副所長 1 名、運営委員 7 名、兼担任所員 26 名、兼任所員 1 名、客員研究員 15 名で構成されている。運営委員会は年 5 回開催されており、運営事業全般について審議、報告が適切に行われている。

研究所として、運営委員会以外にも、全所員が一同に会して研究活動全般に関して審議する場があるのかどうかについて

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

ても、明記されることが望ましい。

2 研究活動

【2017年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2016年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2016年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

1 研究プロジェクト

- ①日仏労働市場の比較（奥西好夫）
- ②企業家史研究会（長谷川直哉）
- ③スポーツチーム・マネジメント研究会（荒井弘和）
- ④ブランド・マネジメント研究会（小川孔輔）
- ⑤Where do Innovations Come From? A Case Study of Biopharmaceuticals（イヨ シャオ ジャ）
- ⑥ロジスティクス・クラスター研究会（李瑞雪）
- ⑦プロスポーツ観戦者におけるチームとの関係性に関する研究（井上尊寛）
- ⑧事象アプローチによる会計ディスクリージャーの拡張（坂上学）
- ⑨消費者行動とマーケティング戦略研究会（新倉貴士）
- ⑩地域活性化研究会（木村純子）
- ⑪半導体製造装置産業における製品アーキテクチャ変遷とサプライヤー・マネジメント（田路則子）
- ⑫戦後日本における鉄道事業経営史（二階堂行宣）
- ⑬統合思考研究会（非財務情報と企業価値の関係性に関する実証分析（長谷川直哉）
- ⑭産業クラスターの知的多様性とグローバリゼーション集合知経営の構築ー（洞口治夫）

2 シンポジウム、セミナー等

- ①【共催】 国際セミナー「即！役立つ花き日持ち性向上対策の最新技術とは？
～切り花、鉢物の品質管理の先端技術をオランダのプロに学ぶ！～」
2016年6月21日 法政大学 ボアソナード・タワー26階 スカイホール
- ②【共催】「起業体験イベント Startup Weekend HOSEI」
2016年7月1日～7月3日 法政大学 ボアソナード・タワー26階 スカイホール
- ③国際シンポジウム「ビッグバンド型組織マネジメントの可能性」
2016年9月21日 法政大学 ボアソナード・タワー26階 スカイホール
- ④【協力】第2回法政大学 MBA セミナー2016「模擬ワークショップと模擬授業」
2016年10月22日 法政大学 外濠校舎4階 S401～S405
- ⑤セミナー「社会を形作る音楽ー南米ベネズエラ発・音楽教育による創造性のマネジメントー」
2016年11月21日 法政大学 ボアソナード・タワー26階 スカイホール
- ⑥国際シンポジウム「起業家教育の最前線ー米国、スウェーデン、日本の取り組みー」
2017年2月23日 法政大学 ボアソナード・タワー26階 スカイホール
- ⑦シンポジウム「ブランドとグローバルエコノミーーブランド戦略の変容ー」
2017年2月26日 法政大学 ボアソナード・タワー26階 スカイホール

3 公開講座

「不連続社会と向き合った企業家の光と陰ー社会環境と戦略の適合性をめぐってー」

2016年10月15日、2016年11月12日、2016年12月10日 計3回

法政大学 ボアソナード・タワー25階 研究所会議室5

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

以下のサイトを参照。

①研究プロジェクト (<http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/activities/project.html>)

②シンポジウム、セミナー等 (<http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/activities/symposium-2.html>)

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

③公開講座 (http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/activities/lecture.html)
②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）
※2016 年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。 1 学術雑誌 1 冊 イノベーション・マネジメント No.14 2 研究叢書 2 冊 ①メディアの循環「伝えるメカニズム」 ②価値共創時代の戦略的パートナーシップ 3 流通産業ライブラリー研究書 1 冊 地域商業の底力を探る—商業近代化からまちづくりへ— 4 ワーキングペーパー 5 件 ①No.172 『戦略・事業計画の策定における非営利組織の環境対応力』 ②No.173 『A Dynamic Equilibrium Model for U-Shaped Pricing Kernels』 ③No.174 『LinkedIn: The Growth Path of the World Largest Professional Network』 ④No.175 『西山俊太郎 オーラル・ヒストリー』 ⑤No.176 『B2B プラットフォーム型流通企業に見られる流通システムのイノベーション—星利源の事例—』
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 以下のサイトを参照。 ①学術雑誌 (http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/results/journal.html) ②研究叢書 (http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/results/publication.html) ③ワーキングペーパー (http://riim.ws.hosei.ac.jp/research/results/working_paper.html)
③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）
※研究所のこれまでに発行した刊行物に対して 2016 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2016 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を箇条書きで記入。 1 シリーズ公開講座『企業家・教育者活動でたどる日本の学校経営—人づくりの先駆者に学ぶ—』には内外の研究者や大学院生の参加を得た。 2 所員による研究書籍は、学会、学術雑誌等で書評を得ている。なお、確認できただけで、学会発表を含め 68 件に引用されている。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 特になし。
④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）
（～400 字程度まで）※2016 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。 特に第三者評価は受けていない。年 5 回の運営員会を実施し、適正な運営を行う。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 特になし。
⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況
※2016 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2016 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。 所員の科研費の応募は、定年延長者等の特段の事情を除き専任教員に義務付けている。2016 年度に応募した 2017 年度の科研費の獲得は、分担者、基金、補助金を含め専任教員 35 人中 25 人であり、28 件であった。 また、民間企業からの受託研究が 1 件継続している。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 特になし。

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

内容	点検・評価項目
特になし。	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

- ・法政大学として平成 26 年度に採択されたスーパーグローバル大学等事業「スーパーグローバル大学創成支援」に基づき、英語による研究成果の公表を積極的に行う。
- ・イノベーション・マネジメント研究センターには学術雑誌、セミナー、ワーキングペーパー等での研究成果を公表する機会が様々ある。現状、イノベーション・マネジメント研究センターには多くの客員研究員（外国人を含む）が所属しており、客員研究員にこれらの機会を有効活用してもらい、これまで以上に多くの研究成果を社会に発信する。

【この基準の大学評価】

イノベーション・マネジメント研究センターの研究活動は、14 の研究プロジェクトにより国際性に優れたシンポジウム、セミナー、公開講座などが行われている。今後は、シンポジウム、セミナー等への参加者を把握して、参加人員を明記することが望ましい。
研究成果については、学術雑誌 1 冊、研究叢書 2 冊、流通産業ライブラリー 1 冊、ワーキングペーパー 5 件が刊行されており、高く評価できる。また、研究成果に対する社会的評価は所員全体で 68 件あり、大変優れている。
第三者評価は行われていないが、科研費等外部資金の応募・獲得状況は採択率も高く、研究センターとしての研究実績は高く評価できる。

III 2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況

評価基準		研究活動
現状の課題・今後の対応等		法政大学として平成 26 年度に採択されたスーパーグローバル大学等事業「スーパーグローバル大学創成支援」に基づき、当センターでも以下のような国際性の高い事業等に取り組む。 1. 英語による国際セミナーや国際シンポジウム等の実施。また、毎年実施しているビジネスプランコンテストでは、学生の英語による発表を行う。 2. 外国人客員研究員を受け入れ、研究報告会やセミナー等を実施する。
年度末報告	執行部による点検・評価	1. 海外から講師を招聘し、以下の国際セミナーおよび国際シンポジウムを開催した。 (1)「即！役立つ花き日持ち性向上対策の最新技術とは？-切り花、鉢物品質管理の先端技術をオランダのプロに学ぶ！-」をテーマとし、2016 年 6 月 21 日に国際セミナーを一般社団法人日本フローラルマーケティング協会との共催で開催した。お花屋さんに必要な花きの品質管理や切り花の品質管理の先端技術についての講演があり、オランダのプロから「鉢物の日持ち保証」の背景と具体的な技術を学べた。 (2)「ビッグバンド型組織マネジメントの可能性」をテーマとし、2016 年 9 月 21 日に国際シンポジウムを開催した。「ビッグバンド型組織」の可能性について提案し、アンサンブルを重視するオーケストラの要素と、ソリストを重視するジャズコンボの要素を併せ持つビッグバンドが、果たして最強の組織として機能しうるのはかを議論した。 (3)「起業家教育の最前線-米国、スウェーデン、日本の取り組み-」をテーマとし、2017 年 2 月 23 日に国際シンポジウムを開催した。起業家教育には、大学の技術を使って事業化させるアカデミック・スピノフの促進だけではなく、ビジネスモデルの作成や組織運営の体験をさせるものもあり、米国やスウェーデン、九州大学の先端事例を紹介しながら、効果や課題を論じた。 2. 外国人客員研究員を受け入れ、当センター所員李瑞雪教授の指導により、「東アジアにおける物流政策の比較研究」を行っている。なお、2017 年度にはセミナーやワーキングペーパー等で研究成果を報告する予定である。

【2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

イノベーション・マネジメント研究センターでは、法政大学が 2014 年に採択された「スーパーグローバル大学創成支援」
--

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

に基づき、国際性の高い事業を積極的に行うという課題に対して、国際セミナーもしくは国際シンポジウムを3件開催した。今後も継続して国際的な事業を発展させることが期待される。

研究所が抱えている多くの客員研究員（外国人を含む）による、研究所の利用を促進するという課題が提示されているが、研究所の対外的・社会的役割という観点からも、その実現が大いに期待される。

【大学評価総評】

イノベーション・マネジメント研究センターは、運営委員以外にも多くの兼任研究員、客員研究員をかかえている。研究所が、それらの研究者全体による積極的な活動を展開している点は大変評価できる。

シンポジウムやセミナーは、研究の社会的還元という観点からみて、国際的で具体的なテーマが選ばれており、大変優れた取り組みである。今後、その成果を継続して実行されることに期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

I 2016 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016 年度大学評価結果総評】

地域研究センターは、受託研究費等の外部資金を獲得しており、積極的に研究成果の公表が行われている点で評価できる。地域創生が叫ばれる現状では、今後とも当該研究センターの持つノウハウや知的・人的財産など、これまでの成果等を十分に活用しながら、より一層社会へ貢献していくことが期待される。また外部からの第三者評価を実施するなど、より厳格な PDCA サイクルを機能させる取り組みにも期待したい。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

民間の営業活動とまではいかないまでも自治体や企業に働きかけて研究活動の充実に努めたい。また、外部の第三者委員会の設置は資金や人材の点で難しいとしても、外部評価を受ける仕組みを検討したい。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

科研費等による外部資金の獲得は確認できるが、今後、自治体・企業との連携がなされるよう期待する。また、地域研究センター内で定期的な委員会等を実施し、そこに外部の方に参加してもらう方法などにより、第三者評価を受ける仕組みを構築するなど、今後の改善が望まれる。

II 自己点検・評価

1 内部質保証

（1）点検・評価項目における 2016 年度の現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

はい いいえ

【2016 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

・今年度質保証に関する活動を議論したい。

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

※上記（1）～（2）の記載内容に基づき基準全体の評価を記入。

地域研究センター内で行われる質保証活動等の取り組みが確認できない。センターが所轄される会議体の中で質保証に関する議論がなされるといった改善が今後望まれる。

2 研究活動

【2017 年 5 月時点における点検・評価】

（1）点検・評価項目における現状

2.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2016 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2016 年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

【シンポジウム及びセミナー】

a 地方創生シンポジウムの開催（2017 年 3 月 1 日）

【その他】

a 「社会貢献・課題解決教育」の授業実施（最終成果報告会：2017 年 1 月 31 日）

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・ http://www.hosei-hurin.net/ へ掲載および各事業チラシ
① 外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）
※2016 年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。 a 紀要「地域イノベーション」vol.9（2017 年 3 月 31 日発行） b 第 13 回国際シンポジウム報告書（2017 年 1 月発行） c 2016 年度社会貢献・課題解決教育成果報告集（2017 年 3 月発行） d 本研究センターの各研究員による出版物や学会発表 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・各冊子
③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）
※研究所のこれまでに発行した刊行物に対して 2016 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2016 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を箇条書きで記入。 ・特になし 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）
（～400 字程度まで）※2016 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。 地域研究センターが設置された当初が外部の研究者に依頼して外部評価を実施した。費用や労力がかかり継続できなかった。その経験を踏まえて実効ある第三者評価の方法を今年度検討したい。 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし
⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況
※2016 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2016 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。 a 文部科学省・JST「気候変動適応技術社会実践プログラム」 2015～2019 年度、2016 年度事業額：43,348 千円 b 戸田市 共同研究「地域コミュニティ世代間断絶をつなぐ、女性の地域開業の可能性」 2016 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日、受託額 1,170 千円 c 岡山県鏡野町 業務委託契約 2016 年 4 月 11 日～2017 年 3 月 31 日、受託額 500 千円 d 岡山県鏡野町 業務委託契約 2016 年 7 月 21 日～2017 年 3 月 31 日、受託額 300 千円 e 北海道室蘭市 事業協力に関する協定書および覚書締結 2016 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日、受託額 632 千円 f 北海道室蘭市 事業協力に関する協定書及び覚書締結 2017 年 1 月 1 日～2017 年 3 月 31 日、受託額 100 千円 g 「千代田学」事業 2016 年 4 月 1 日～2017 年 3 月 31 日、受託額 663 千円 【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・各契約書・覚書等

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・研究資金獲得活動の方法を確立したい。

【この基準の大学評価】

地域研究センターの研究・教育活動の実施として、地方創生シンポジウムの開催、また、「社会貢献・課題解決教育」最終成果報告会では、その中で課題発見から解決までの手法を学び、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、課題解決能力の向上を図ると同時に地域活性化に貢献したことが伺え、評価できる。

また、対外的に発表した研究成果としては、紀要、国際シンポジウム報告書などが出版されており、これら外部に発表した複数の研究成果、科研費や外部資金の募集・獲得状況を見ると、貴センターの研究・教育活動実績は、概ね評価できる。

一方、研究成果に対する社会的評価やセンターに対する外部からの組織評価については、実施がなされておらず、今後の検討が望まれる。

III 2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況

評価基準		研究活動
現状の課題・今後の対応等		現在の内閣で「地域創生」が叫ばれているが、これは地域活性化に他ならない。当センターの持っている知財を投入し、地域活性に役立てたい。同時に、その間の研究成果を発表したい。 また、さらなる外部資金の獲得を行いたい。
年度末報告	執行部による点検・評価	・これまで関係にあった鏡野町など自治体の具体的な施策に対応した。委員会への参加、そして政策提言や調査研究報告書を提出した。 ・HP や成果報告書を検索して、本研究センターにアクセスし調査研究を依頼してきた事例が増えてきた。現在も 新たな案件が来ており、調査研究の事例を確実に残すこと自体が外部資金獲得につながっている。

【2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

現在の内閣で「地域創生」が叫ばれているが、これは地域活性化に他ならない。地域研究センターの持っている知財を投入し、さらなる地域活性に寄与するような取り組みを期待したい。

また、優れた研究成果の発表や外部評価により、さらに外部資金の獲得がなされることを期待したい。

【大学評価総評】

地域研究センターの理念・目的を踏まえ、グローバルな視点を持った地域問題研究の拠点として、行政や地方自治体等との連携を深め、様々な地域問題に対する支援など、精力的に活動が行われている。

その証左として、地方自治体を中心として、受託研究等の外部資金を獲得するほか、シンポジウムや報告書の刊行、学会発表等により、研究成果が社会に還元されていることは、評価できる。今後もより一層の社会への貢献を期待したい。

一方、研究成果に対する社会的評価については把握されておらず、これまでの貴センターにおける研究成果の検証という観点からも今後の検討が望まれる。

内部質保証に関しては、積極的な活動が行われておらず、第三者評価を含め 2017 年度に検討を進められるとのことではあるが、貴センターとしての質保証活動が適切に行われることを期待する。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

I 2016 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016 年度大学評価結果総評】

国際日本学研究所の研究員が、総じて個々の専門的な研究活動を積極的に行っている点は極めて高く評価されるが、必ずしも「国際日本学研究所の構築と推進」という規程に掲げられている目標に直接結び付いていないと思われる。

「2015 年度大学評価結果総評」にある「研究所の理念・目的に沿う研究プロジェクトを意識的に立ち上げる必要があるのではないか」という指摘に対して、「2015 年度大学評価委員会の結果への対応状況」で「新たなプロジェクトの企画に取り組んでいる」と回答している。『(法政大学) 憲章にいう「地域から世界まで」を対象に、地球規模での「自然」「環境」をめぐる諸問題の解決を目指す実践知形成に取り組んでいる』という方向性の中で『国際日本学』をどう位置付けるのか検討し、プロジェクトを早急に立ち上げることにより、研究所の理念・目的に沿う研究がさらに推進されることを期待したい。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】(～400 字程度まで)

大学評価委員会からは、前年同様、本研究所兼担所員各自の研究活動が活発に行われている点は高く評価していただいたが、それらが必ずしも本研究所の目標である「国際日本学の構築と推進」に結びついていないのではないかという指摘がなされ、研究所全体として新たなプロジェクトを早急に立ち上げてほしいとの希望がだされた。そこで本研究所としては、2017 年度私立大学研究ブランディング事業にエコデザイン地域研究センターと連携して、「江戸東京研究の先端的・学際的拠点形成」というタイトルにて申請することとした。内容的には、基層構造としての水都、江戸東京の「ユニークさ」、テクノロジーとアートからみた現代東京、都市東京の近未来といった 4 つの要素を掲げ、「江戸東京から持続可能な地球社会の未来へ」をめざすものとしている。すでに大枠としては学内的に合意を得られていて、6 月 8 日に応募書類提出の段取りになっている。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

「2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況」において指摘のあった「国際日本学の構築と推進」という研究所の理念・目的に沿う新たな研究の推進という点に関して、国際日本学研究所では、エコ地域デザイン研究センターと連携し、2017 年度私立大学研究ブランディング事業に応募するという、積極的な取り組みがなされている。「江戸東京研究の先端的・学際的拠点形成」をテーマに、両研究所の強みを生かしたものとなっており、今後に期待したい。

II 自己点検・評価

1 内部質保証

(1) 点検・評価項目における 2016 年度の現状

1.1 内部質保証システム(質保証委員会等)を適切に機能させているか。

① 質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【2016 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

- ・質保証に関する委員会としては、毎月開催される研究所の運営委員会を宛てている。
学際的・国際的と言う研究様態そのもの、そしてそれに依拠し形成されている研究組織そのものが質保証のシステムであるといえる。具体的には、研究組織内では、アプローチ代表が、研究会等の報告を運営委員会で行い、別のアプローチ代表や兼担所員より指摘やアドバイス等を受けるという形式がとられている。また年に一度、総括的国際シンポを欧州日本学研究所にて開催し、国外の専門家からの評価を受けている。
- ・また毎月の運営委員会に専任所員や他の兼担所員が、そこに積極的に参加して委員会が機能するよう工夫している。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

※上記(1)～(2)の記載内容に基づき基準全体の評価を記入。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

国際日本学研究所においては、毎月開催される研究所の運営委員会において、研究チームの代表が研究会等の報告を運営委員会で行い、別の研究チームの代表や兼担所員より指摘やアドバイス等を受けるといった形式で、質保証に関する検討が行われている。研究所という構成員の規模の制約はあるものの、独立性と透明性の確保といった点から、引き続き内部質保証の充実に向けての検討を行うことが期待される。

2 研究活動

【2017 年 5 月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2016 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2016 年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を簡条書きで記入。

1. 国際シンポジウム『人間の試練にさらされる〈自然〉』。2016 年 11 月 3 日（木）－ 11 月 5 日（土）。アルザス・欧州日本学研究所。「人間と自然」をシンポジウムの主題とし、日本側 5 名、欧州側 4 名の発表者が学際的かつ国際的に論じた。
2. 環境・自然研究会主催講演会『エコロジーの新たな展開／一人称エコロジーと自然の詩学』（エラスムス・ムンドゥス修士課程〈ユーロフィロソフィ〉法政プログラム 2016）。2016 年 6 月 13 日（月）18 時 30 分から 21 時 00 分。法政大学ボアソナード・タワー 25 階 B 会議室。講師：ジャン＝フィリップ・ピエロン（リヨン第 3 大学哲学部教授、学部長）
3. 私立大学研究ブランディング事業申請ワークショップ等開催。
 - ・『情報共有の会』
2016 年 7 月 23 日（土）15 時から。法政大学ボアソナード・タワー 25 階 C 会議室。
 - ・『第 1 回ワークショップ』
2016 年 11 月 25 日（金）14 時から 18 時。法政大学九段校舎別館 3 階研究所会議室 6。
 - ・『第 2 回ワークショップ』
2016 年 12 月 16 日（金）16 時から 19 時。法政大学九段校舎別館 3 階研究所会議室 6。
 - ・『第 3 回ワークショップ』
2017 年 1 月 13 日（金）13 時 30 分から 17 時。法政大学九段校舎別館 3 階研究所会議室 6。
 - ・『第 4 回ワークショップ』
2017 年 2 月 24 日（金）12 時から 14 時 30 分。法政大学九段校舎別館 3 階研究所会議室 6。
4. 公益財団法人日中友好会館所管の学際的総合研究の一環となるセミナー「後楽講堂」と本研究王敏研究室との共催講座。
 - ・『日本文学と中国の文化——宮沢賢治と西遊記』。2016 年 4 月 15 日（金）20 時から 22 時。日中友好会館後楽寮内。
 - ・『古代シルクロードへの旅人—日本の学問僧』。2016 年 5 月 13 日（金）20 時から 22 時。日中友好会館後楽寮内。報告者：楼正豪（浙江海洋大学東海発展研究院専任講師）
 - ・『国際日本学と国際中国学の交差点—日本における禹王信仰に関する調査を中心に』。2016 年 12 月 30 日（金）20 時から 22 時。日中友好会館後楽寮内。報告者：王敏（法政大学国際日本学研究所専任所員・教授）。
5. 平成 27 年度科学研究費若手研究（B）採択「戦前の民間組織による対外的情報発信とその影響：英語版『東洋経済新報』を例として（[研究課題番号：15K16987] 代表：鈴木裕輔）」、本研究後援研究会。
 - ・第 4 回研究会『「大正維新」、「昭和維新」とは何であったのか—出口王仁三郎の思想と行動を中心に—』。2017 年 8 月 1 日（月）18 時 30 分から 20 時 30 分。法政大学九段校舎別館 3 階研究所会議室 6。報告：徐玄九（法政大学）
 - ・第 5 回研究会『パブリック・ディプロマシーの観点からみた新渡戸稲造』。2017 年 2 月 24 日（金）18 時 30 分から 20 時 30 分。法政大学九段校舎別館 3 階研究所会議室 6。報告：上品和馬（早稲田大学）
 - ・第 6 回研究会『戦後 PR の移植と受容をめぐる』。2017 年 3 月 6 日（月）18 時 30 分から 20 時 30 分。法政大学九段校舎別館 3 階研究所会議室 6。報告：河尻珍（東京大学）

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

1. <http://hijas.hosei.ac.jp/news/20161103-05report.html>
2. <http://hijas.hosei.ac.jp/news/20160613report.html>
3. 国際日本学研究所事務室保管の議事録
4. <http://hijas.hosei.ac.jp/news/20160415report.html>
<http://hijas.hosei.ac.jp/news/20160513report.html>
<http://hijas.hosei.ac.jp/news/20161230report.html>
5. <http://hijas.hosei.ac.jp/news/20160801report.html>
<http://hijas.hosei.ac.jp/news/20170224report.html>
<http://hijas.hosei.ac.jp/news/20170306report.html>

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2016 年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。

[出版物]

- ・本研究所の紀要に当たる研究成果報告集『国際日本学』14 を 2017 年 1 月に刊行した。国際日本学に関する一般的な研究成果報告 5 本、「アルザスシンポジウム 2015：中心と周縁—搾取に抗う環境・自然」報告論文 7 本、本研究所が公募している若手研究者論文採用研究 3 本、第 1 回ヨーゼフ・クライナー博士記念・法政大学国際日本学賞受賞論文 1 本、関連記念講演論文 1 本を掲載した。
- ・*Le Koré, Revue ivoirienne de philosophie et d'écriture, No 50* (2016 年 12 月、谷崎潤一郎についてフランスで論じた、安孫子信 “Une présentation d'Éloge de l'ombre de Junichiro Tanizaki” を掲載)
- ・『日本における中国小説及び伝説の受容学術会議論文資料集』(2016 年 6 月、宮沢賢治の西遊記受容から生成した文学的成果と、日中比較文化的要素について論じた、王敏「宮沢賢治からの宿題—西遊記と孫悟空、そして禹へ」を掲載)
- ・『「東亜内部の自他認識」学術研究会論文集』(2016 年 6 月、日本における禹王信仰の現存形態に関する調査研究の成果をのべた、王敏「日中相互の参照枠となる『禹王信仰』について」を掲載)
- ・『北東アジア外国語研究』(2016 年 12 月、シルクロードの歴史文化の時空における日本とアジアと欧州の間の文化関係を論じた、王敏「中日仏とシルクロード及び相互の互惠関係」を掲載)
- ・『法政史学』86 号(2016 年 10 月、サンクトペテルブルク・ロシア科学アカデミー東洋写本研究所蔵の論語関係の典籍から分かる東西交流を論じた、小口雅史「在サンクトペテルブルク・ロシア科学アカデミー東洋写本研究所蔵世俗文書補訂(2)」を掲載)
- ・『法政史学』87 号(2017 年 3 月、フィンランド・ヨエンスー美術館所蔵の日本関係美術品を紹介した、小口雅史「在欧美術館・博物館所蔵の日本仏教美術を訪ねて(1)」を掲載)
- ・『文学(隔月刊)』17 巻 4 号(2016 年 7 月、山東京伝の地方読者を分析して中央と鄙の関係を論じた小林ふみ子「山東京伝の地方読者へのまなざし」を掲載)
- ・『太平詩文』70 号(2016 年 11 月、近世日本人の唐土への憧憬の事例を論じた小林ふみ子「鈴木芙蓉の唐土憧憬」を掲載)
- ・『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究—国際関係と地域の視点から』(2016 年 6 月、札幌華僑社会を築いた人たちを論じた、曾士才「日本残留中国人」を掲載)
- ・『小金井論集』(2016 年 3 月、法政大学大学院国際日本学の授業で大学院生とともに日本の絵本を読む授業実践について述べた横山泰子「日本の絵本を非日本語で読む」を掲載)
- ・『ユリイカ』2016 年 6 月号(歌舞伎にみえる妖怪から呪術・演劇・遊びなどについて論じた横山泰子「歌舞伎の妖怪」を掲載)

[学会発表等]

- ・“Bushido et le Japon moderne- NISHI Amane et NITOBE Inazo”(2016 年 3 月 15 日、コートジボワール、フェリックス・ウフエ・ボアニ大学で開催された安孫子信の講演会で、武士道と現代日本の関係について述べた)
- ・「民俗文化と美しい郷：2016 年嘉興端午国際学術研究会議」(2016 年 6 月 9 日、中国で開催された王敏の基調報告「民俗学と美しい故郷との相関関係」で、日本における禹王信仰の現存形態を事例に、比較民俗学およびその参考価値について述べた)
- ・“LIAS(Leiden University Institute of Area Studies) Lecture Series”(2016 年 11 月 11 日、オランダ・ライデン大学での小林ふみ子の講演“Localism in the 19th century”で、19 世紀日本のローカリズムについて述べた。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

※その他、専任所員及び各兼担所員の法政大学学術機関リポジトリに多数の業績が掲載されている。
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・出版物本体および学会配布資料 ・法政大学学術機関リポジトリ
③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）
※研究所のこれまでに発行した刊行物に対して 2016 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2016 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を簡条書きで記入。 ・横山泰子氏の法政大学大学院国際日本学インスティテュートでの実践的な絵本研究が、絵本学会の雑誌『絵本 BOOKEND』2016 号の「絵本研究の動向」に取り上げられた
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・出版物本体
④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）
（～400 字程度まで）※2016 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。 本研究所では、大規模プロジェクトである COE の終了後は、特別な第三者評価は導入していない。その代替措置として内部評価の充実をはかってきた。ただし所員の負担を考え、評価のためだけの新しい組織を作るのではなくて、毎月の運営委員会で相互評価・批判の学術的議論が行われるように工夫してきた。そこでは各研究プロジェクト代表からなされるさまざまな研究成果報告に対して、毎回、その検証評価の議論を、議題上も別途明記して行っている。この方式は以前の大学評価委員会からも認めていただいたので、当面この方式で、引き続き充実させていきたい。
【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・国際日本学研究所事務室保管の運営委員会議事録
⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況
※2016 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2016 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を簡条書きで記入。 ・2016 年度中応募分（すべて科研費、5 件） 基盤研究(C)，王 敏，日本における禹王信仰の現存形態及び現代のその意義 基盤研究(A) (海外学術調査)、菱田 雅晴，現代中国における腐敗パラドックスに関するシステム／制度論的アプローチ 基盤研究(C)，伊藤 達也，脱ダム後の地域計画に関する地理学的研究 基盤研究(B)，小林 ふみ子，近世後期における江戸狂歌流行の社会文化史および文芸史的意義の研究—四方真顔を軸に 基盤研究(C)，米家 志乃布，民間地図作製史からみたフロンティア像の日露比較研究 ・2016 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（すべて科研費、本研究所兼担所員を代表とするもの 9 件，分担者 1 名） 基盤研究(C)，安孫子信，西周の「哲学」の再検討を通じて実証哲学を新たに展望する，900,000 円 基盤研究(C)，米家志乃布，19 世紀におけるフロンティアの地域像に関する日露比較研究，700,000 円 基盤研究(C)，山本真鳥，太平洋現代芸術の人類学的研究—ニュージーランド太平洋系住民のアート活動を中心に，1,100,000 円 基盤研究(C)，川村湊，中南米日系移民および韓国系移民による文学に関する総合的研究，900,000 円 基盤研究(C)，村田晶子（代表）・山田泉（分担），人類学の理論的枠組みを応用した日本語学習者のフィールドワーク教育，900,000 円 若手研究(B)，大塚紀弘，資料調査に基づく日本中世における印刷文化の基礎的研究，900,000 円 基盤研究(B)，小口雅史，物質文化と精神文化の交流と断絶からみた、海峡を繋ぐ「北の内海世界」の総合的研究，3,200,000 円 基盤研究(B)，小口雅史，諸国探検隊収集・欧亜諸国保管西域出土史料の包括的再点検による東アジア史料学の革新，3,200,000 円 基盤研究(B)，山中玲子，能楽及び能楽研究の国際的的定位と新たな参照標準確立のための基盤研究，3,900,000 円 基盤研究(B)，宮本圭造，能楽資料データベース構築に向けた金春家文書の総合的研究，1,800,000 円 ・同上（すべて科研費、他機関の研究代表者で本研究所兼担所員を研究分担者とするもの 10 件） 基盤研究(S)，小口雅史，木簡など出土文字資料の資源化のための機能的情報収集と知の結集，300,000 円 基盤研究(B)，小口雅史，在欧日本仏教美術の包括的調査・デジタル化とそれに基づくジャポニズムの総合研究，2,615,000 円

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

基盤研究(A), 菱田雅晴, 中国抗議型維権活動拡大のメカニズム: 認知の解放・支配方式の転換・動員手段の多様化, 400,000 円
基盤研究(B), 安孫子信, ベルクソン『物質と記憶』の総合的研究—国際協働を型とする西洋哲学研究の確立, 150,000 円
基盤研究(B), 小林ふみ子, 大小摺物(絵巻)の美術史及び文化史に関する総合的研究, 300,000 円
基盤研究(B), 山中玲子, 観世家のアーカイブの形成と室町期能楽の新研究, 30,000 円
基盤研究(A), 山中玲子, 伝統芸能文楽の技をヒューマンロボットインタラクション技術へ適応させるデザイン研究, 100,000 円
基盤研究(B), 宮本圭造, 熊本県山鹿市の歌舞伎(式)劇場・八千代座に関する総合的史料研究, 100,000 円
基盤研究(B), 宮本圭造, 観世家のアーカイブの形成と室町期能楽の新研究, 30,000 円
基盤研究(B), 大塚紀弘, 在欧日本仏教美術の包括的調査・デジタル化とそれに基づくジャポニズムの総合研究, 40,000 円
三菱財団学術研究助成 横山泰子・小林ふみ子・米家志乃布, 近世日本における〈北方〉イメージ—絵地図とテキストに探る多様性の研究, 1,000,000 円
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。 ・研究開発センター提供資料による

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・第2回ヨーゼフ・クライナー博士記念・法政大学国際日本学賞の公募・審査・顕彰。第一回に続き、世界各地から多数の応募があり、これまでほとんど知られていなかったオーストリア人写真家 Stillfried の幕末明治維新期の撮影写真を扱ったガートラン氏の“A Career of Japan”を得ることができたのは大きな国際的成果であった。第1回同様、田中総長とクライナー先生の出席を得て、表彰式と記念講演会を開催したが、学内外から多数の参加者があった。	2.1 ①
・2016 年 7 月に『情報共有の会』を開催し、ブランディング事業をどのようなテーマでどのように構築していくのかについて、エコ地域デザイン研究センターと合同で検討に入った。 ・以後 2017 年 3 月に至るまでの間に計 4 回のワークショップを開催し、テーマを「江戸東京研究の先端的・学際的拠点形成」と最終的に決定。 ・それを構成する研究チームとして「基層構造としての水都」、「江戸東京の「ユニークさ」」、「テクノロジーとアートからみた現代東京」、「都市東京の近未来」という四つを選定して具体的研究に入っていく態勢を整えた。	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・大型プロジェクト実施のための資金獲得 すでに 2016 年度大学評価委員会の評価にもあるとおり、本研究所構成メンバーの研究活動は極めて活発で、科研費獲得額も標準を大きく超えているように思われる。ただしそれらを総合した国際日本学の構築は、なお道半ばの感がある。しかし法政大学憲章を踏まえて、2017 年度の私立大学研究ブランディング事業への応募に漕ぎ着けることができ、それが採択されれば、国際日本学研究所としての江戸東京学が確立されることが期待されるし、万一採択されなくとも、応募の準備過程で繰り返し開催されたワークショップの経験が、今後の研究所の活動の基礎となっていくことが期待される。

【この基準の大学評価】

国際日本学研究所では、学内における定期的なワークショップのほか、国際シンポジウム、環境・自然研究会主催講演会、共催講座などを開催することにより、活発な研究と情報発信がなされている点が評価できる。 また、本研究所の紀要に当たる研究成果報告集『国際日本学』14 の刊行のほか、学内外の学術誌に多くの研究成果が発表されている。 科研費等外部資金については、本研究所兼担所員を代表とするもの 9 件、他機関の研究代表者で本研究所兼担所員を研究分担者とするもの 10 件、その他、三菱財団学術研究助成など、研究に関する外部資金の獲得が積極的になされている点が高く評価できる。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

研究所に対する外部からの組織評価については、COE 終了後は導入されていないが、内部質保証体制の充実と合わせて、検討を行うことが期待される。

III 2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況

評価基準		研究活動
現状の課題・今後の対応等		大型プロジェクト実施のための資金獲得…すでに 2015 年度大学評価委員会の評価にもあるとおり、本研究所構成メンバーの研究活動は極めて活発で、科研費獲得額も標準を大きく超えているように思われる。ただしそれらを総合した国際日本学の構築は、なお道半ばの感がある。法政大学憲章を踏まえて、2017 年度の私立大学研究ブランディング事業への応募が強く求められているので、それに応じた態勢をしっかりと固めていきたい。
年度末報告	執行部による点検・評価	・2017 年度私立大学研究ブランディング事業申請に向けて、共同申請母体となるエコ地域デザイン研究センターと早い段階から連携をとっている。具体的には申請に当たって主要な役割を果たすことが期待されるメンバーを中心に、合同で3回のワークショップを開催し、申請テーマ、具体的な研究内容、チーム分け、予算案、成果の取り纏めと公表の仕方にいたるまで、かなり具体的に詰めている。 ・テーマとしては田中総長のもとでの法政大学のブランドとしてふさわしいと考えられる「江戸東京研究の先端的・学際的拠点形成」を設定し、水都、江戸東京の希少性、現代東京といった分野ごとに研究チームを結成し、取り組んでいくことで合意された。 ・この案件の骨子についてはすでに1月26日(木)開催のサステナビリティ実践知研究機構会議および1月27日(金)開催の研究総合本部会議で承認されている。 ・「国際日本学」の確立については、引き続きアルザスの欧州日本学研究所などでの国際シンポにおいて、上記ブランディング事業を中心に今後研究所が取り組むべき課題について外部の意見を取り入れながら検討を続けている。

【2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

国際日本学研究所では、課題として指摘されていた「国際日本学」の確立について、エコ地域デザイン研究センターと連携しつつ、法政大学のブランドとしてふさわしいと考えられる「江戸東京 研究の先端的・学際的拠点形成」をテーマとして設定し、具体的な研究内容、チーム分け、予算案、成果の取り纏めと公表の仕方にいたるまで、具体的に詰めている。また、アルザスの欧州日本学研究所などでの国際シンポにおいて、今後研究所が取り組むべき課題について外部の意見を取り入れながら検討を続けている点も評価できる。

【大学評価総評】

国際日本学研究所では、前年度の指摘を受け、「法政大学憲章」が示す方向性の中で「国際日本学」を位置づけるための取り組みとして、今年度、エコ地域デザイン研究センターと連携して、2017 年度私立大学研究ブランディング事業に申請した点は評価でき、実現されることを期待したい。

また、科研費等外部資金の獲得についても積極的に取り組まれており、今年度もそれが継続されることが期待される。

COE 終了後、特別な第三者評価は導入されていないということであるが、所員に過度な負担とならない範囲で組織的な取り組みを再考されることに期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

I 2016 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016 年度大学評価結果総評】

マイクロ・ナノテクノロジー研究センターにおいては、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に基づいて研究を進めており、その研究業績は高い水準にある。

外部評価委員による第三者評価を受け、概ね高い評価を得ている。さらに改善の姿勢が見られることは高く評価できる。

科研費を始め、外部資金獲得に対して積極的な姿勢が見られる。大型の外部資金の獲得に向けて、研究プロジェクトの方向性を定めることが、大きな課題と言えよう。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「グリーンテクノロジーを支える次世代エネルギー変換システム」の第 4 年度における研究を進めた。研究発表は、論文 32 件、著書 2 件、学会発表 193 件となり、過去 5 年間の水準を維持した（詳細は、「II 2. (1)②対外的に発表した研究成果」に記述した）。教育研究環境を整備するため、外部資金獲得にも積極的に取り組んでいる（詳細は、II 2. (1)⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況）。2016 年度初頭に文科省の中間評価を受け、グリーンテクノロジープロジェクトの継続が承認された。「エネルギー変換システム」を実現するための新たな内容として、新しい構成材を用いた「ペロブスカイト太陽電池」、新規「リチウム二次電池の電極材料」、「大腸菌細胞内の窒素固定」、エネルギー使用量を軽減する「LED の再資源化」、人にやさしい「太陽光エネルギー吸収材」などが見いだされた。「私立大学研究ブランディング事業」への 2018 年度申請にむけたWGを発足し、準備を開始した。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

マイクロ・ナノテクノロジー研究センターは、2016 年度の文科省の中間評価の結果を受け、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に基づいて研究プロジェクトが進められている中で、新たな外部資金の獲得に向け準備が進められており、その積極的な姿勢は評価できる。今後の申請および資金の獲得を期待したい。

II 自己点検・評価

1 内部質保証

(1) 点検・評価項目における 2016 年度の現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【2016 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

- ・研究センターの運営委員会が内部質保証推進の役割を担っている。運営委員会の中に年報編纂、ホームページ更新のためのワーキンググループを設置して、PDCAサイクル整備と内部質保証のためのシステムを構築している。
- ・年報編纂、ホームページ更新のためのデータ収集作業を通じて、各年度の研究成果をチェックしている。
- ・グリーンテクノロジープロジェクト主催の基本テーマ横断セミナーである「グリーンテクノロジーセミナー」において、発表・討論を行うことより、プロジェクト参加者の研究成果の相互検証につとめている。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

※上記 (1) ～ (2) の記載内容に基づき基準全体の評価を記入。

マイクロ・ナノテクノロジー研究センターでは、所長、副所長と 3 つのプロジェクトから複数名の専任教員によって構成される運営委員会が年間 11 回開催され、内部質保証を担っている。質保証に向けた取り組みは概ね適切であると評価できる。

また、研究成果の相互検証の仕組みや成果の共有手段として挙げられているグリーンテクノロジーセミナーの活発な活動状況は評価に値する。セミナーの講演内容および議論の概要なども公表されると、さらなる相互検証の啓蒙につながる

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

のではないかとと思われるので今後の検討を期待したい。

2 研究活動

【2017 年 5 月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2016 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2016 年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

・プロジェクト

私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「グリーンテクノロジーを支える次世代エネルギー変換システム」（2013 年度～）の第 4 年度の研究を実施した。

・グリーンテクノロジーセミナー

プロジェクト主催の基本テーマ横断セミナー。プロジェクト構成員の担当研究テーマの進捗状況の発表、およびその関連トピックに関する外部講師による講演と討論を行うことにより、プロジェクト構成員の相互理解を深め、また研究成果の相互検証を行っている。

第 8 回グリーンテクノロジーセミナー

日時：2016 年 4 月 25 日（月） 15：10～17：10

場所：法政大学小金井キャンパス 西館地下 1 階 マルチメディアホール

講演者と題目：

講演 1 環境汚染物質が存在する土壌での棲息細菌集団の生きざま

津田 雅孝（東北大学 大学院生命科学研究科 生態システム生命科学専攻 教授）

講演 2 有孢子細菌の孢子形成メカニズムの解明と環境浄化への応用

佐藤 勉（法政大学 生命科学部 教授／マイクロ・ナノテクノロジー研究センター 兼任研究員）

参加者数：86 名

第 9 回グリーンテクノロジーセミナー

日時：2016 年 10 月 6 日（木） 15：10～17：30

場所：法政大学小金井キャンパス 西館 1 階 遠隔視聴覚室

講演者と題目：

講演 1 有機 EL 材料の現状とその応用

城戸 淳二（山形大学 工学部 高分子・有機材料工学科 教授）

講演 2 インクジェット法による電子デバイス作成の現状と課題

田沼 千秋（法政大学 理工学部 客員教授／マイクロ・ナノテクノロジー研究センター 客員教授）

参加者数：30 名

第 10 回グリーンテクノロジーセミナー

日時：2017 年 3 月 6 日（水） 15：10～17：30

場所：法政大学小金井キャンパス 西館 3 階 W303 教室

講演者と題目：

講演 1 分子配向を制御した有機薄膜太陽電池及び量子ドット太陽電池の電気化学的評価

福田 武司（埼玉大学 工学部機能材料工学科 助教）

講演 2 ハロゲン化鉛系ペロブスカイト太陽電池開発の現状と課題

緒方 啓典（法政大学 生命科学部 教授／マイクロ・ナノテクノロジー研究センター 兼任研究員）

参加者数：31 名

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・ホームページ セミナーのお知らせ (<http://www.hosei.ac.jp/nano/seminar.html>)

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

※2016 年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。

・ 学術雑誌掲載論文（査読付論文）

緒方 啓典

- 1) Z. Wang, H. Ogata, G.J. Hong Melvin, M. Obata, S. Morimoto, J. Ortiz-Medina, R. Cruz-Silva, M. Fujishige, K. Takeuchi, H. Muramatsu, T.-Y. Kim, Y.A. Kim, T. Hayashi, M. Terrones, Y. Hashimoto, M. Endo, “Structural Evolution of Hydrothermal Carbon Spheres Induced by High Temperatures and Their Electrical Properties Under Compression”, *Carbon, in press*.

水澤 直樹

- 1) Nagai, M., Nagai, Y., Aki, Y., Sakurai, H., Mizusawa, Naoki, Ogura, T., Kitagawa, T., Yamamoto, Y., Nagatomo, S. Heme orientation of cavity mutant hemoglobins (His F8 → Gly) in either α or β subunits: circular dichroism, ^1H NMR, and Resonance Raman Studies. *Chirality* **28**:585-592, (2016).

曾和 義幸

- 1) T. Kasai, Y. Sowa, “Measurements of the Rotation of the Flagellar Motor by Bead Assay”, *Methods Mol Biol.*, **1593**, 185-192 (2017).

栗山 一男

- 1) Y. Takeuchi, T. Yamashita, K. Kuriyama, and K. Kushida, Synthesis and charge-discharge performance of Li_5SiN_3 as a cathode material of lithium secondary batteries, *J. Solid State Electrochemistry*, **20**, pp.1885-1888 (2016).
- 2) R. Tsuruoka, A. Shinkawa, T. Nishimura, C. Tanuma, K. Kuriyama, and K. Kushida, Persistent Photoconductivity in Oxygen-Ion Implanted KNbO_3 Bulk Single Crystal, *Solid State Communications* **248**, pp.120-122 (2016).
- 3) Y. Torita, N. Nishikata, K. Kuriyama, K. Kushida, and Q. Xu, Modification of the yellow luminescence in gamma-ray irradiated GaN bulk single crystal, *Proceedings of ICPS2016 (Journal of Physics, IOP(UK))* (in press).
- 4) R. Tsuruoka, A. Shinkawa, T. Nishimura, C. Tanuma, K. Kuriyama, and K. Kushida, Persistent photoconductivity in hydrogen ion-implanted KNbO_3 bulk single crystal, *Proceedings of ICPS2016 (Journal of Physics, IOP(UK))* (in press).
- 5) N. Nishikata, K. Kushida, T. Nishimura, T. Mishima, K. Kuriyama, and T. Nakamura, Evaluation of lattice displacement in Mg - implanted GaN by Rutherford backscattering spectroscopy, *Nucl. Instrum, Method Phys. Res. B* (in press).

中村 徹

- 1) 葛西駿, 及川拓弥, 木村純, 小川弘貴, 三島友義, 中村徹, “Mg 斜めイオン注入 GaN MISFET”, *電気学会論文誌 C*, (2016/4) Vol.136, No. 4, pp. 444-448, 2016 年.
- 2) 吉野理貴, 堀切文正, 太田博, 山本康博, 三島友義, 中村徹, 高誘電率絶縁膜を用いたフィールドプレート電極を有する縦型 GaN ダイオード, *電気学会論文誌 C*, Vol.136, No.4 pp.474-478, 2016 年.
- 3) M. Yoshino, F. Horikiri, H. Ohta, Y. Yamamoto, T. Mishima and T. Nakamura, “High-k Dielectric Passivation for GaN Diode with a Field Plate Termination”, *Electronics*, vol. 5, No. 15, pp.1-7, 2016 年.
- 4) K. Nomoto, B. Song, Z. Hu, M. Zhu, M. Qi, N. Kaneda, T. Mishima, T. Nakamura, Debdeep Jena, and Huili Grace Xing, “1.7 kV and 0.55 $\text{m}\Omega\cdot\text{cm}^2$ GaN p-n Diodes on Bulk GaN Substrates with Avalanche Capability”, *IEEE Electron Device Letter*, Vol.37, No.2, pp.161-164, 2016 年.

山本 兼由

- 1) H. Takada, T. Shimada, D. Dey, M. Z. Quyyum, M. Nakano, A. Ishiguro, H. Yoshida, K. Yamamoto, R. Sen, A. Ishihama “Differential regulation of rRNA and tRNA transcription from the rRNA-tRNA composite operon in *Escherichia coli*”, *PLoS One*, **11**(12), e0163057(2016).
- 2) H. Urano, M. Yoshida, A. Ogawa, K. Yamamoto, A. Ishihama, H. Ogasawara “Cross-regulation between two common ancestral response regulators, HprR and CusR, in *Escherichia coli*”, *Microbiology*, **163**(2), 243-252(2016).
- 3) K. Yoshida, A. Sakamoto, Y. Terui, K. Takao, Y. Sugita, K. Yamamoto, A. Ishihama, K. Igarashi, K. Kashiwagi “Effect of spermidine analogues on cell growth of *Escherichia coli* polyamine requiring mutant MA261”,

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

PLoS One, **11**(7), e0159494(2016).

- 4) Y. Yamanaka, T. Shimada, K. Yamamoto, A. Ishihama “Transcription factor CecR (YbiH) regulates a set of genes affecting the sensitivity of *Escherichia coli* against cefoperazone and chloramphenicol”, Microbiology, **162**(7), 1253-64(2016).

石垣 隆正

- 1) T. Ohsawa, K. Tsunoda, B. Dierre, C. Zellhofer, S. Grachev, H. Montigaud, T. Ishigaki, N. Ohashi, “Crystalline polarity of ZnO thin films deposited under dc external bias on various substrates”, J. Crystal Growth, DOI. 10.1016/j.jcrysgro.2017.01.048 (2017).
- 2) T. Ishigaki, “Synthesis of Functional Oxide Nanoparticles through RF Thermal Plasma Processing”, Plasma Chem. Plasma Process., DOI. 10.1007/s11090-017-9788-8 (2017). (招待論文)

杉山 賢次

- 1) J.L. Carey, III, A. Hirao, K. Sugiyama, Philippe Bühlmann, “Semifluorinated Polymers as Ion-selective Electrode Membrane Matrixes”, Electroanalysis, 28(1), 739-747 (2016).

田中 豊

- 1) Y. Tanaka, S.-N. Yun, Y. Tanaka, Development of synchronized control system through a pneumatic parallel mechanism and its 3D CG model, Journal of Mechanical Science and Technology 30 (1) (2016) 397~403, DOI 10.1007/s12206-015-1244-1
- 2) 田中豊, 総論：メカトロニクス概念とその沿革, 油空圧技術, 55巻, 5号, pp.1-4, 2016-5.
- 3) 田中豊, 展望（油圧編）・油圧の夢と展望, フルードパワー（日本フルードパワー工業会誌・創立60周年記念特集号）、30巻、第2号、pp.107-109, 2016-5.
- 4) 坂間清子, 田中豊, 油圧作動油と気泡, フルードパワーシステム（日本フルードパワーシステム学会誌）、47巻、第4号、pp.174-177, 2016-7.
- 5) J. Peng, S. Li, Y. Tanaka, Vibration suppression of the armature assembly in a hydraulic servo-valve torque motor using the magnetic fluid, Proc. 20th International Conference on Mechatronics Technology, October 28-31, 2016, Dalian, China, (Best paper awards)

御法川 学

- 1) T.-G. Lim, W.-H. Jeon and G. Minorikawa: Characteristics of unsteady flow field and flow-induced noise for an axial cooling fan used in a rack mount server computer, Journal of Mechanical Science and Technology 30 (10) (2016) 4601-4607 (2016).

安田 彰

- 1) H. Matsuo, Y. Motoyama, S. Saikatsu and A. Yasuda, “Driving a High-Precision Multi-coils-motor by Reducing an Influence of Manufacturing Variations”, DOI:10.17265/1934-8975/2017.01.007, Journal of Energy and Power Engineering 11, 48-55 (2017).
- 2) Y. Hatsude, G. Harumi, S. Saikatsu, M. Y. shino, A. Yasuda, “Third-Order Mismatch Shaping Technique with Improved Small Amplitude Input Performance for a Digitally Driven Speaker System”, International Conference on Analog VLSI Circuits, pp. 49-53, 3-2, Aug., (2016).
- 3) R. Minemura, S. Saikatsu, G. Harumi, M. Yoshino, A. Yasuda, “Implementation and Measurement of a Delta-Sigma DAC with a Jitter Shaper Reducing Jitter Noise”, International Conference on Analog VLSI Circuits, pp.37-41, 2-4, Aug., (2016).
- 4) M. Yoshino, A. Yasuda, S. Moriyama, M. Ishibe, C. Takahashi, Cloud-based Analog LSI CAD system for cooperative design”, International Conference on Analog VLSI Circuits, 4-1, Aug., (2016).
- 5) G. Harumi, S. Saikatsu, M. Yoshino, A. Yasuda, “Digital Direct-Driven Speaker Architecture Using Segmented Pulse Shaping Technique, 14th IEEE International NEWCAS Conference, DSP and multimedia, Jun., (2016).

辻田 星歩

- 1) K. Otsuka, T. Komatsu, H. Tsujita, S. Yamauchi, A. Yamagata, Numerical Analysis of Flow in Radial Turbine (Effects of Nozzle Vane Angle on Internal Flow), International Journal of Fluid Machinery and Systems, Vol.9, No.2, pp.137-142(2016).
- 2) 金子雅直, 辻田星歩, 短翼を有する遷音速遠心圧縮機内の設計点での流れ場における翼端漏れ流れの影響, 日本機械学会論文集, Vol.82, No. 844, p. 16-00159 (2016).

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・著書

栗山 一男

- 1) 串田一雅, 栗山一男 分担執筆「熱刺激電流を用いた材料・デバイス開発の最前線」第7章, 監修: 岩本光正, シーエムシー社 2016. 4. 5. 発行.

田中 豊

- 1) 田中豊 (分担執筆), アクチュエータの組合せによる三脚パラレルメカニズムの開発とその応用, アクチュエータの新材料・駆動制御・最新応用技術, 技術情報協会, 2017 年 3 月 31 日.

・学会発表

緒方 啓典

<招待講演>

- 1) 緒方啓典, “木質系バイオマスを用いた機能性材料の開発”, 第59回藤枝会主催講演会, (2016 年 6 月 7 日, (株)フジクラ 本館 1 F 大会議室, 江東区).
- 2) 緒方啓典, “ペロブスカイト太陽電池を構成するヘテロ接合薄膜の構造と電子物性”, 新世代太陽電池の素材開発と性能評価に関するワークショップ, (2017 年 2 月 28 日, 城西大学, 坂戸市).

<一般講演>

- 1) 横倉瑛太, 片岡洋右, 緒方啓典, “DFT・MD 法による単層カーボンナノチューブに内包されたヨウ化セシウムの局所構造と物性評価”, 日本コンピュータ化学会 2016 春季年会, (2016 年 6 月 3 日, 東京工業大学大岡山キャンパス, 目黒区).
- 2) 佐藤豊, 横倉瑛太, 片岡洋右, 緒方啓典, “分子動力学シミュレーションおよび第一原理計算によるカーボンナノチューブに内包されたカルコゲンの構造評価”, 日本コンピュータ化学会 2016 春季年会, (2016 年 6 月 3 日, 東京工業大学大岡山キャンパス, 目黒区).
- 3) H. Ogata, S. Kawano, “Local structures and crystallinities of bulk heterojunction films constituting organic solar cells studied by Solid-state NMR spectroscopy”, KJF International Conference on Organic Materials for Electronics and Photonics 2016 (KJF-ICOMEF 2016), (2016 年 9 月 5 日, アクロス福岡, 福岡市).
- 4) Y. Sato, Y. Kataoka, E. Yokokura, H. Ogata, “Electronic states of chalcogen encapsulated in single-walled carbon nanotubes studied by First-Principles DFT Calculations”, 第51回 フラーレン・ナノチューブ・グラフェン総合シンポジウム, (2016 年 9 月 7 日, 北海道立道民活動センター, 札幌市).
- 5) H. Ogata, H. Yoshitake, Y. Sato, T. Nishimura, Z. Wang, S. Morimoto, Y. Hashimoto, M. Endo, “Catalytic properties of non-metal and platinum supported surface-modified nanocarbon materials”, 第51回 フラーレン・ナノチューブ・グラフェン総合シンポジウム, (2016 年 9 月 7 日, 北海道立道民活動センター, 札幌市).
- 6) S. Kawano, H. Ogata, “Solid-State NMR Studies on the Aggregated Structures in Organic Bulk Heterojunction Solar Cells”, 第51回 フラーレン・ナノチューブ・グラフェン総合シンポジウム, (2016 年 9 月 8 日, 北海道立道民活動センター, 札幌市).
- 7) E. Yokokura, Y. Kataoka, H. Ogata, “First-principles calculations of electronic states and solid state NMR parameters in alkali halides encapsulated single-walled carbon nanotubes”, 第51回 フラーレン・ナノチューブ・グラフェン総合シンポジウム, (2016 年 9 月 7 日, 北海道立道民活動センター, 札幌市).
- 8) 木内宏弥, 竹内大将, 高野菜丘, 横倉瑛太, 稲見栄一, 緒方啓典, “ZnO ナノ構造体を電子輸送層に用いたペロブスカイト太陽電池の作製および特性評価(III)”, 第77回応用物理学会秋季学術講演会, 2016 年 9 月 13 日, 朱鷺メッセ, 新潟.
- 9) 竹内大将, 木内宏弥, 高野菜丘, 横倉瑛太, 稲見栄一, 緒方啓典, “ペロブスカイト太陽電池における金属酸化物層の作製法がキャリア輸送特性に及ぼす効果”, 第77回応用物理学会秋季学術講演会, 2016 年 9 月 13 日, 朱鷺メッセ, 新潟.
- 10) Z. Wang, H. Ogata, G. J. H. Gan, M. Obata, S. Morimoto, J. Ortiz-Medina, R. Cruz-Silva, M. Fujishige, K. Takeuchi, H. Muramatsu, T. Hayashi, M. Terrones, Y. Hashimoto, M. Endo, “Structural Evolution of Hydrothermal Carbon Spheres Induced by High Temperatures and Their Electrical Properties under Compression”, The 77th JSAP Autumn meeting, 2016, TOKI MESSE, Nigata, Japan, 2016 年 9 月 15 日
- 11) 緒方啓典, 木内宏弥, 竹内大将, 高野菜丘, 横倉瑛太, 稲見栄一, “ペロブスカイト太陽電池を構成するヘテロ接合薄膜の構造と電子物性”, 第77回応用物理学会秋季学術講演会, 2016 年 9 月 15 日, 朱鷺メッセ, 新潟.

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

- 12) 横倉瑛太, 片岡洋右, 緒方啓典, “単層カーボンナノチューブに内包されたアルカリハライドの電子状態および固体 NMR パラメーターの第一原理計算”, 第 77 回応用物理学会秋季学術講演会, 2016 年 9 月 15 日, 朱鷺メッセ, 新潟.
- 13) 佐藤豊, 横倉瑛太, 片岡洋右, 緒方啓典, “分子動力学シミュレーションおよび第一原理計算によるカーボンナノチューブに内包されたカルコゲンの構造評価”, 第 77 回応用物理学会秋季学術講演会, 2016 年 9 月 15 日, 朱鷺メッセ, 新潟.
- 14) 河野紗希, 緒方啓典, “固体 NMR 分光法によるバルクヘテロ接合型有機薄膜太陽電池の局所構造解析”, 第 77 回応用物理学会秋季学術講演会, 2016 年 9 月 16 日, 朱鷺メッセ, 新潟.
- 15) Z. Wang, H. Ogata, G. J. H. Melvin, S. Morimoto, J. Ortiz-Medina, A. Laura-Elias, M. Fujishige, K. Takeuchi, H. Muramatsu, T. Hayashi, M. Terrones, Y. Hashimoto, M. Endo, “High temperature induced carbon-related nanomaterials from rice husk: synthesis and characterization”, INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON CARBON NANOTUBE in Commemoration of its Quarter-Century Anniversary(2016-CNT25), 2016 年 11 月 17 日, Tokyo, Japan.
- 16) H. Ogata, E. Inami, “Study on the Molecular Motions and Defect Structures in Methyl Ammonium Lead Halide Films Constituting Perovskite Solar Cells Studied by Solid-State NMR Spectroscopy”, The 2016 MRS Fall Meeting, 2016 年 11 月 30 日, Boston, Massachusetts, USA.
- 17) H. Ogata, E. Yokokura, E. Inami, “Effects of Scaffold Layer on the Crystallinity of Methyl Ammonium Lead Halide Perovskite Films and Carrier Transport Properties in Perovskite Solar Cells”, The 2016 MRS Fall Meeting, 2016 年 11 月 30 日, Boston, Massachusetts, USA.
- 18) Y. Sato, Y. Kataoka, E. Yokokura, H. Ogata, “Local structures and electronic states of chalcogen encapsulated in single-walled carbon nanotubes studied by molecular dynamics simulations and First-Principles DFT calculations”, The 2016 MRS Fall Meeting, 2016 年 11 月 30 日, Boston, Massachusetts, USA.
- 19) E. Yokokura, Y. Kataoka, H. Ogata, “Local structure and properties of ionic crystals encapsulated in single-walled carbon nanotubes studied by MD simulation and DFT calculations”, The 2016 MRS Fall Meeting, 2016 年 11 月 30 日, Boston, Massachusetts, USA.
- 20) S. Kawano, H. Ogata, “Local structures and crystallinities of bulk heterojunction films constituting organic solar cells with solvent additives studied by Solid-state NMR spectroscopy”, The 2016 MRS Fall Meeting, 2016 年 12 月 1 日, Boston, Massachusetts, USA.
- 21) H. Ogata, E. Inami, “Crystallinity and defect structures of methyl ammonium lead halide perovskite films constituting perovskite solar cells”, The 8th Asian Conference on Organic Electronics 2016 (A-COE 2016), 2016 年 12 月 6 日, Uji, Kyoto, Japan.
- 22) 高野菜丘, 緒方啓典, “ZnO ナノロッドを電子輸送層として用いたペロブスカイト型太陽電池の作製と評価”, 第 35 回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム, 2016 年 12 月 7 日, 法政大学小金井キャンパス, 東京.
- 23) 森達彦, 緒方啓典, “Cu₂O を正孔輸送層として用いたペロブスカイト型太陽電池の作製および特性評価”, 第 35 回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム, 2016 年 12 月 7 日, 法政大学小金井キャンパス, 東京.
- 24) 竹内大将, 緒方啓典, “ペロブスカイト太陽電池における金属酸化物層の作製法がキャリア輸送特性に及ぼす効果”, 第 35 回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム, 2016 年 12 月 7 日, 法政大学小金井キャンパス, 東京.
- 25) 木内宏弥, 緒方啓典, “Sb-Doped SnO₂ を電子輸送層に用いたペロブスカイト型太陽電池の作製および特性評価”, 第 35 回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム, 2016 年 12 月 7 日, 法政大学小金井キャンパス, 東京.
- 26) 鈴木貴明, 片岡洋右, 緒方啓典, “分子動力学シミュレーションによるコロネン内包単層カーボンナノチューブの構造評価”, 第 35 回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム, 2016 年 12 月 7 日, 法政大学小金井キャンパス, 東京.
- 27) 円山隆治, 緒方啓典, “金属酸化物太陽電池のための酸化亜鉛フィルムの作製および特性評価”, 第 35 回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム, 2016 年 12 月 7 日, 法政大学小金井キャンパス, 東京.
- 28) 横倉瑛太, 片岡洋右, 緒方啓典, “単層カーボンナノチューブに内包されたアルカリハライドの電子状態および固体 NMR パラメーターの第一原理計算”, 第 35 回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム, 2016 年 12 月 7 日, 法政大学小金井キャンパス, 東京.
- 29) 河野紗希, 緒方啓典, “固体 NMR 分光法によるバルクヘテロ接合型有機薄膜太陽電池の局所構造解析”, 第 35 回法政大学イオンビーム工学研究所シンポジウム, 2016 年 12 月 7 日, 法政大学小金井キャンパス, 東京.
- 30) 横倉瑛太, 佐藤豊, 片岡洋右, 緒方啓典, “第一原理計算による単層カーボンナノチューブに内包されたアルカリハライドの電子状態および固体 NMR パラメータ計算”, 第 26 回日本 MRS 年次大会, 2016 年 12 月 21 日, 波止場会館,

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

横浜

- 31) 佐藤豊, 片岡洋右, 横倉瑛太, 緒方啓典, “分子動力学シミュレーションおよび第一原理計算によるカーボンナノチューブに内包されたカルコゲンの構造評価”, 第26回日本MRS年次大会, 2016年12月21日, 波止場会館, 横浜
- 32) D. Hao, T. Ishigaki, H. Ogata, Y. Tsujimoto, T. Uchikoshi, “Visible light photocatalytic activity given by high-temperature heat-treatment of solvothermally-synthesized high-concentration niobium doped TiO₂”, 第55回セラミックス基礎科学討論会, 2017年1月13日, 岡山コンベンションセンター, 岡山.
- 33) E. Yokokura, Y. Kataoka, H. Ogata, “DFT calculations of electronic states and solid state NMR parameters in Cesium Iodide encapsulated single-walled carbon nanotubes”, 第52回 フラレン・ナノチューブ・グラフェン総合シンポジウム, (2017年3月1日, 東京大学, 文京区).
- 34) S. Kawano, H. Ogata, “Studies on the Aggregated Structures and Crystallinities of Bulk Heterojunction Films Constituting Organic Solar Cells”, 第52回 フラレン・ナノチューブ・グラフェン総合シンポジウム, (2017年3月2日, 東京大学, 文京区).
- 35) Y. Sato, E. Yokokura, Y. Kataoka, H. Ogata, “Electronic states of chalcogen encapsulated in single-walled carbon nanotubes studied by First-principles DFT calculations(II)”, 第52回 フラレン・ナノチューブ・グラフェン総合シンポジウム, (2017年3月3日, 東京大学, 文京区).
- 36) 緒方啓典, 竹内大将, 木内宏弥, “有機金属ハロゲン化物ペロブスカイト薄膜における欠陥構造と分子運動性の分光学的研究(III)”, 第64回応用物理学会春季学術講演会, 2017年3月14日, パシフィコ横浜, 横浜市.
- 37) 森達彦, 緒方啓典, “Cu₂Oを正孔輸送層として用いたペロブスカイト型太陽電池の作製および特性評価”, 第64回応用物理学会春季学術講演会, 2017年3月16日, パシフィコ横浜, 横浜市.
- 38) 木内宏弥, 竹内大将, 横倉瑛太, 稲見栄一, 緒方啓典, “ZnO ナノ構造体を電子輸送層に用いたペロブスカイト太陽電池の作製および特性評価(IV)”, 第64回応用物理学会春季学術講演会, 2017年3月16日, パシフィコ横浜, 横浜市.
- 39) 竹内大将, 木内宏弥, 稲見栄一, 緒方啓典, “ペロブスカイト太陽電池における金属酸化物層の作製法がキャリア輸送特性に及ぼす効果II”, 第64回応用物理学会春季学術講演会, 2017年3月16日, パシフィコ横浜, 横浜市.
- 40) 緒方啓典, 竹内大将, 木内宏弥, 円山隆治, 高野菜丘, “有機金属ハロゲン化物ペロブスカイト太陽電池を構成するヘテロ接合薄膜の構造と電子物性”, 日本化学会第97春季年会, 2017年3月18日, 慶應義塾大学日吉キャンパス, 神奈川.

水澤 直樹

<一般講演>

- 1) 倉持里佳子, 片山光徳, 遠藤嘉一郎, 石井麻子, 河合(久保田)寿子, 小林康一, 皆川純, 和田元, 水澤直樹 His タグを付加したCP47変異株を用いた *Anabaena* sp. PCC 7120 光化学系II複合体の精製とその特性 (第58回日本植物生理学会年会, 2017年3月16日~18日, 鹿児島大学郡元キャンパス, 鹿児島市).
- 2) 松原真由, 遠藤嘉一郎, 沈建仁, 石井麻子, 小林康一, 和田元, 水澤直樹 ホスファチジルグリセロール分子と相互作用するD1-R140への部位特異的変異が光化学系IIの機能に与える影響 (第58回日本植物生理学会年会, 2017年3月16日~18日, 鹿児島大学郡元キャンパス, 鹿児島市).

曾和 義幸

<招待講演>

- 1) Sowa Y, “Single-molecule studies of the chemo-mechanical coupling in the bacterial flagellar motor”, OIST Workshop-Bacterial Flagella, Injectisomes & Type III Secretion Systems, OIST, 沖縄県国頭郡, 2017年3月1日.
- 2) 曾和義幸, “細菌がもつナノマシンの化学-力学共役”, 2016年度 遺伝研研究会「単細胞システム細胞装置のダイナミズム」, 遺伝学研究所(静岡県三島市), 2017年3月28日.

<一般講演>

- 1) Yamazaki M, Yamamoto K, Nishikawa M, Sowa Y, Kawagishi I, 大腸菌異物排出系トランスポーターMdtB, MdtC 会合の可視化, 第54回日本生物物理学会年会, つくば国際会議場(茨城県つくば市), 2016年11月25日.
- 2) Arai K, Kasai T, Takahashi Y, Ito M, Sowa Y, 2種イオン駆動型べん毛モーターの入力と出力の関係, 第54回日本生物物理学会年会, つくば国際会議場(茨城県つくば市), 2016年11月26日.
- 3) Kasai T, Sowa Y, 光ピンセットを用いたバクテリアべん毛モーターの最大トルクの計測, 第54回日本生物物理学会年会, つくば国際会議場(茨城県つくば市), 2016年11月27日.

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

- 4) Sagawa T, Sowa Y, Kawagishi I, Oiwa K, Kojima H, 大腸菌の忌避刺激で見られた時間遅れはFlhMの共同的な振る舞いにより説明される, 第54回日本生物物理学会年会, つくば国際会議場(茨城県つくば市), 2016年11月27日.
- 5) Endo T, Miyao Y, Yamamoto K, Nishikawa M, Sowa Y, Kawagishi I, 大腸菌二成分制御系AtoS, AtoCの相互依存的細胞内局在, 第54回日本生物物理学会年会, つくば国際会議場(茨城県つくば市), 2016年11月27日.
- 6) Tanaka H, Kazuta Y, Matsukawa T, Naruse Y, Tominari Y, Okada M, Sowa Y, Kawagishi I, Oiwa K, Kojima H, 大腸菌は, アミノ酸種を識別する: データ駆動的アプローチにより明らかにする単細胞生物の化学知覚, 第54回日本生物物理学会年会, つくば国際会議場(茨城県つくば市), 2016年11月27日.
- 7) Umemura T, Sowa Y, Kawagishi I, 変性蛋白質センサーとしての大腸菌ヒスチジンキナーゼBaeS, 第54回日本生物物理学会年会, つくば国際会議場(茨城県つくば市), 2016年11月27日.
- 8) 笠井大司, 曾和義幸, ベンモータ回転の強制停止時における発生トルク, 2017年生体運動研究合同班会議, 神戸国際会議場(兵庫県神戸市), 2017年1月7日.
- 9) Tanaka H, Kazuta Y, Sowa Y, Kawagishi I, Naruse Y, Tominari Y, Okada M, Oiwa K, Kojima H, Quantitative Evaluation of Chemical Recognition of Escherichia coli in a Data-Driven Manner, OIST Workshop-Bacterial Flagella, Injectisomes & Type III Secretion Systems, OIST(沖縄県国頭郡), 2017年3月2日.
- 10) Sagawa T, Sowa Y, Kawagishi I, Oiwa K, Kojima H, Analysis of delay in flagellar response of Escherichia coli to chemoeffectors with in vivo and in silico approaches, OIST Workshop-Bacterial Flagella, Injectisomes & Type III Secretion Systems, OIST(沖縄県国頭郡), 2017年3月2日.
- 11) Arai K, Kasai T, Takahashi Y, Ito M, Sowa Y, Input-output Relationship of the Bacterial Flagellar Motor, OIST Workshop-Bacterial Flagella, Injectisomes & Type III Secretion Systems, OIST(沖縄県国頭郡), 2017年3月2日.
- 12) Kasai T, Sowa Y, Stall Torque of the Bacterial Flagellar Motor Measured by Optical Tweezers, OIST Workshop-Bacterial Flagella, Injectisomes & Type III Secretion Systems, OIST(沖縄県国頭郡), 2017年3月4日.
- 13) Momma M, Tsuji Y, Konishi M, Nishiyama S, Nishikawa M, Sowa Y, Kawagishi I, Identification and characterization of novel transducer and soluble receptors for amino acid chemotaxis of Vibrio alginolyticus, OIST Workshop-Bacterial Flagella, Injectisomes & Type III Secretion Systems, OIST(沖縄県国頭郡), 2017年3月4日.
- 14) Nishiyama M, Sawada T, Che Y-S, Sowa Y, Harada Y, Kawagishi I, High-Pressure Inhibition of the Interaction between the Bacterial Flagellar Motor and the Response Regulator CheY, OIST Workshop-Bacterial Flagella, Injectisomes & Type III Secretion Systems, OIST(沖縄県国頭郡), 2017年3月4日.

栗山 一男

- 1) R. Tsuruoka, A. Shinkawa, T. Nishimura, C. Tanuma, K. Kuriyama, K. Kushida, Persistent photoconductivity in oxygen-ion implanted KNbO₃ bulk single crystal, 電子材料国際会議2016 (ICEM2016), シンガポール, 7月4日—7月8日(2016).
- 2) Y. Torita, N. Nishikata, K. Kuriyama, K. Kushida, Q. Xu, Modification of the yellow luminescence in gamma-ray irradiated GaN bulk single crystal, 半導体物理学国際会議2016 (ICPS2016), 北京, 7月31日—8月5日(2016).
- 3) R. Tsuruoka, A. Shinkawa, T. Nishimura, C. Tanuma, K. Kuriyama, K. Kushida, Persistent photoconductivity in hydrogen ion-implanted KNbO₃ bulk single crystal, 半導体物理学国際会議2016 (ICPS2016), 北京, 7月31日—8月5日(2016).
- 4) K. Sugamata, K. Ikeda, H. Ohta, T. Nakamura, K. Kuriyama, T. Mishima, Normally-Off Operation of Ion Implanted MISFET on Freestanding GaN Substrates, 窒化物半導体国際会議2016 (IWN2016), オランダ・フロッグダ(米国), 10月2日—10月7日(2016).
- 5) N. Nishikata, K. Kushida, T. Nishimura, T. Mishima, K. Kuriyama, T. Nakamura, Evaluation of lattice displacement in Mg-ion implanted GaN by Rutherford backscattering, イオンビームによる材料改質国際会議2016 (IBMM2016), ウェリントン(ニュージーランド), 10月30日—11月5日.
- 6) H. Tsuge, K. Ikeda, S. Kato, T. Nishimura, T. Nakamura, K. Kuriyama, T. Mishima, Impact of Mg-ion implantation with various fluence ranges on optical properties of n-type GaN, イオンビームによる材料改質国際会議2016 (IBMM2016), ウェリントン(ニュージーランド), 10月30日—11月5日.
- 7) H. Ohta, T. Nakamura, T. Nishimura, K. Kuriyama, T. Mishima, Plasma-ion induced damage on GaN p-n junction diodes and its recovery by thermal treatment, イオンビームによる材料改質国際会議2016 (IBMM2016), ウェリ

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

ントン (ニュージーランド), 10月30日ー11月5日.

- 8) 小室貴之, 栗山一男, 串田一雅, “ Li_2CN_2 の結晶作成と物性評価” 64回応用物理学会春季学術講演会, 14p-P2-1 (2017年3月).
- 9) 田代惇也, 取田祐樹, 栗山一男, 串田一雅, 徐虬, 木野村淳 “ ZnO バルク単結晶へのガンマ線照射効果: 低抵抗の起源” 64回応用物理学会春季学術講演会, 25p-P8-9 (2017年3月).

明石 孝也

- 1) 明石孝也, 勝山陽介, 松嶋景一郎, ポリマー支援ゾル-ゲル法と超臨界乾燥による多結晶 SiC 基板への HfO_2 多孔質厚膜の形成, 耐火物技術協会 第29回年次学術講演会, 兵庫県, 2016-4.
- 2) 明石孝也, 永井友理, 均一沈殿法による Ag-NiO 担持 $(\text{Ce, Zr})\text{O}_2$ 触媒粉末の合成とすす酸化触媒性能評価, 粉体工学会 2016年度春期研究発表会, S-2, 京都府, 2016-5.
- 3) 勝村俊規, 明石孝也, 片山英樹, 鉄鋼材料の透過水素による表面電位分布の変化, 腐食防食学会 材料と環境 2016, B-106, 茨城県, 2016-5.
- 4) 片山英樹, 勝村俊規, 明石孝也, 大気腐食過程における鉄鋼材料中の透過水素の可視化, 表面技術協会 第134回講演大会, 2C-06, 仙台, 2016-9.
- 5) 矢野広将, 打越哲郎, 明石孝也, 小林清, 鈴木達, SLFC系層状ペロブスカイト型混合伝導体の特性に及ぼす A サイトイオン欠損の影響, 日本セラミックス協会第29回秋季シンポジウム, 1PV05, 広島県, 2016-9.
- 6) 志村祐紀, 小林清, 鈴木達, 打越哲郎, 目義雄, 明石孝也, MgO ドープオキシアパタイト型ランタンシリケートの高配向性焼結体のイオン伝導異方性, 日本セラミックス協会第29回秋季シンポジウム, 1V03, 広島県, 2016-9.
- 7) 栗山真帆, 酒井裕香, 明石孝也, 炭素熱還元-酸化法を用いた窒化ガリウム含有混合物からの酸化ガリウムの分離・回収に及ぼす水蒸気の影響, 日本セラミックス協会第29回秋季シンポジウム, 2R07, 広島県, 2016-9.
- 8) 山口隆史, 明石孝也, NiAl_3 粒子の酸化焼結を利用した Ni 化合物分散 Al_2O_3 基コンポジットの作製, 日本セラミックス協会第29回秋季シンポジウム, 2R07, 広島県, 2016-9.
- 9) 兼澤大樹, 小林奈都紀, 久保木友香, 清野肇, 明石孝也, 気体透過板を用いた還元気化-酸化法による Ga-Sn 混合物からの選択回収, 資源・素材学会 資源・素材 2016 (盛岡), 岩手県, 2016-9.
- 10) 久保木友香, 石鍋翼, 松原沙衣, 清野肇, 明石孝也, セラミック製フィルターを利用した還元気化-酸化による Ga 回収における還元剤の検討, 資源・素材学会 資源・素材 2016 (盛岡), 岩手県, 2016-9.
- 11) H. Katayama, T. Katsumura, T. Akashi, Application of Surface Potential Measurement for Hydrogen Permeation Behavior, EUROCORR 2016, Montpellier, France, 2016-9.
- 12) Y. Shimura, K. Kobayashi, T.S. Suzuki, T. Uchikoshi, Y. Sakka, T. Akashi, Fabrication of dense Ceramics and the Electrical Conductivity Anisotropy of the Textured MgO -Doped Lanthanum Silicate Oxyapatite, PRiME2016 (Pacific Rim Meeting on Electrochemical and Solid-state Science.), 2929, Hawaii, USA, 2016-10.
- 13) T. Katsumura, H. Katayama, T. Akashi, Detection of Hydrogen Permeated Under Atmospheric Corrosive Environment by Surface Potential Measurement, 1292, PRiME2016 (Pacific Rim Meeting on Electrochemical and Solid-state Science.), 1292, Hawaii, USA, 2016-10.
- 14) Y. Shimura, K. Kobayashi, T. Akashi, K. Hirai, Y. Sakka, Fabrication of the dense ceramics and the electrical conductivity of MgO -doped lanthanum silicate oxyapatite, STAC-9 & TOEO-9, 2PS-37 Ibaraki, Japan, 2016-10.
- 15) 山口拓人, 明石孝也, 渡辺博道, 酸化物融体の熱物性測定方法の開発, 日本熱物性学会 第37回熱物性シンポジウム, B133, 岡山県, 2016-11.
- 16) 明石孝也, 酒井裕香, 久保木友香, 清野肇, 熱還元-酸化法による窒化ガリウム含有混合物からの酸化ガリウムの分離・回収, 日本セラミックス協会 第55回セラミックス基礎科学討論会, 1A09, 岡山, 2017-1.
- 17) 小倉知也, 明石孝也, Ni-YSZ 燃料極/YSZ 電解質の界面抵抗に及ぼす燃料ガス組成の影響, 日本セラミックス協会 第55回セラミックス基礎科学討論会, 1E07, 岡山県, 2017-1.
- 18) 清野肇, 飛岡夏果, 兼澤大樹, 久保木友香, 明石孝也, 気体透過板を利用した炭素熱還元気化-酸化による Ga 回収と Sn 混入物からの選択性, 日本セラミックス協会 2017 年年会, 東京都, 2016-3.

中村 徹

- 1) K. Hayashi, H. Ohta, F. Horikiri, Y. Narita, T. Yoshida, T. Nakamura, T. Mishima, “Current crowding caused by surface roughness of vertical GaN p-n diodes”, *ISPlasma 2017 (9th International Symposium on Advanced Plasma Science and its Applications for Nitrides and Nanomaterials)*, (2017/3).

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

- 2) H. Tsuge, K. Ikeda, S. Kato, T. Nishimura, T. Nakamura, K. Kuriyama, T. Mishima, "Impact of Mg-ion implantation with various fluence ranges on optical properties of n-type GaN", *IBMM2016 (the 20th International Conference on Ion Beam Modification of Materials)*, (2016/11).
- 3) H. Ohta, T. Nakamura, T. Nishimura, K. Kuriyama, T. Mishima, "Plasma-ion induced damage on GaN p-n junction diodes and its recovery by thermal treatment", *IBMM2016 (the 20th International Conference on Ion Beam Modification of Materials)*, (2016/11).
- 4) K. Sugamata, K. Ikeda, H. Ohta, T. Nakamura, K. Kuriyama, T. Mishima, "Normally-Off Operation of Ion Implanted MISFET on Freestanding GaN Substrates", *International Workshop on Nitride Semiconductors (IWN 2016)*, (2016/10).
- 5) H. Ohta, S. Kanazawa, F. Horikiri, N. Kaneda, T. Nakamura, T. Mishima, "Process-Damage Recovered Fabrication of High Breakdown Voltage GaN p-n Junction Diodes over 4 kV", *International Workshop on Nitride Semiconductors (IWN 2016)*, (2016/10).
- 6) M. Yoshino, F. Horikiri, H. Ohta, Y. Yamamoto, T. Nakamura, T. Mishima, "High-k Dielectric Passivation for GaN p-n Diodes with a Field-Plate Terminated Structure", *International Workshop on Nitride Semiconductors (IWN 2016)*, (2016/10).
- 7) F. Horikiri, H. Ohta, Y. Narita, T. Yoshida, T. Kitamura, T. Nakamura, T. Mishima, M. Imanishi, M. Imade, Y. Mori, "Fatigue Characteristics by the Current Stress in Vertical GaN p-n Junction Diodes Fabricated on Free-Standing GaN Substrate", *International Workshop on Nitride Semiconductors (IWN 2016)*, (2016/10).
- 8) H. Ohta, T. Nakamura, T. Mishima, "High Quality Free-standing GaN Substrates and Their Application to High Breakdown Voltage GaN p-n Diodes", *IEEE The 2016 International Meeting for Future of Electron Devices, Kansai*, (2016/6).
- 9) 中村徹, 三島友義, 池田清治, 吉野理貴, "GaN へのイオン注入とデバイスへの応用", 2017 年春期応用物理学会講演会 (2017/3).
- 10) 林賢太郎, 柘植博史, 太田博, 堀切文正, 成田好伸, 吉田丈洋, 中村徹, 三島友義, "p⁺薄層を用いた自立 GaN 基板上 JBS ダイオード", 2017 年春期応用物理学会講演会 (2017/3).
- 11) 堀切文正, 成田好伸, 吉田丈洋, 北村寿朗, 太田博, 中村徹, 三島友義, "自立 GaN 基板上ショットキー接合ダイオード用エピタキシャル層における基板オフ角と PL-YL 発光強度の関係", 2017 年春期応用物理学会講演会 (2017/3).
- 12) 柘植博史, 堀切文正, 成田好伸, 金田直樹, 中村徹, 三島友義, "p⁺⁺-GaN 薄層を用いた縦型 p⁺⁺-n 接合ダイオード", 2016 年秋期応用物理学会講演会 (2016/9).
- 13) 林賢太郎, 太田博, 堀切文正, 成田好伸, 吉田丈洋, 中村徹, 三島友義, "自立 GaN 基板上 p-n 接合ダイオードにおける順方向電流集中領域の検討 II", 2016 年秋期応用物理学会講演会 (2016/9).

佐藤 勉

<招待講演>

- 1) 佐藤勉, "細菌の細胞分化を調節するプロファージ", 第 39 回日本分子生物学会年会, 3PS11-2 パシフィコ横浜, 横浜市, 2016 年 12 月 2 日.

<一般講演>

- 3) 安部公博, 高松拓夫, 高橋匠, 佐藤勉, "枯草菌孢子形成遺伝子の遺伝子再構築", グラム陽性菌ゲノム機能会議, 0-01 (2016 年 8 月 29 日, KKR 熱海).
- 4) 鈴木祥太, 鈴木颯, 安部公博, 佐藤勉, "溶原性ファージの新規標的部位認識機構の獲得機構の解明", グラム陽性菌ゲノム機能会議, P-17 (2016 年 8 月 29 日, KKR 熱海).
- 5) 澤田燎, 永田詩織, 小林和夫, 鈴木祥太, 安部公博, 佐藤勉, "枯草菌・納豆菌のバイオフィーム形成と γ -PGA 生産に影響を与える外来因子", グラム陽性菌ゲノム機能会議, P18 (2016 年 8 月 29 日, KKR 熱海).
- 6) 清水慎哉, 津田嵩平, 安部公博, 佐藤勉, "*Bacillus cereus* ATCC10987 における *gerE* 再構築機構の解析", グラム陽性菌ゲノム機能会議, P19 (2016 年 8 月 29 日, KKR 熱海).
- 7) 中谷優星, 岩本敬人, 安部公博, 佐藤勉, "枯草菌孢子における最外層形成過程の解明", グラム陽性菌ゲノム機能会議, P-20 (2016 年 8 月 29 日, KKR 熱海).
- 8) 住吉泰樹, 鈴木祥太, 安倍公博, 佐藤勉, "枯草菌孢子形成母細胞の栄養細胞への脱分化" グラム陽性菌ゲノム機能会議, P-21 (2016 年 8 月 29 日, KKR 熱海).
- 9) 安部公博, 高松拓夫, 高橋匠, 佐藤勉, "枯草菌 SP β プロファージによる遺伝子再構築", ファージ研究会, 0-2 (2016 年 10 月 21 日, JAMSTEC 横浜研究所).

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

- 10) 鈴木祥太, 鈴木颯, 安部公博, 佐藤勉, ”異なる *attB* を認識するキメラファージの作製“, ファージ研究会, P24 (2016 年 10 月 21 日, JAMSTEC 横浜研究所).
- 11) 澤田燎, 永田詩織, 小林和夫, 鈴木祥太, 安部公博, 佐藤勉, “枯草菌・納豆菌のバイオフィルム形成と γ PGA 生産に影響を与える外来因子”, ファージ研究会, P25 (2016 年 10 月 21 日, JAMSTEC 横浜研究所).
- 12) 小笠原太軌, 安部公博, 佐藤勉, “枯草菌の SP β 感染防御機構”, ファージ研究会, P26 (2016 年 10 月 21 日, JAMSTEC 横浜研究所).
- 13) 清水慎哉, 津田高平, 安部公博, 佐藤勉, “*Bacillus cereus* ATCC10987 における *gerE* 再構築機構の解析”, ファージ研究会, P27 (2016 年 10 月 21 日, JAMSTEC 横浜研究所).
- 14) 鈴木祥太, 鈴木颯, 安部公博, 佐藤勉, “異なる *att* 部位を認識するキメラファージの作製”, 第 15 回微生物研究会, P84 (2016 年 11 月 5 日, 日本大学湘南キャンパス).
- 15) 住吉泰樹, 鈴木祥太, 安部公博, 佐藤勉, “枯草菌孢子形成期母細胞の脱分化”, 第 15 回微生物研究会, P85 (2016 年 11 月 5 日, 日本大学湘南キャンパス).
- 16) 櫻井聡美, 鈴木祥太, 安部公博, 佐藤勉, “枯草菌 site-specific integration vector の構築“, 第 15 回微生物研究会, P86 (2016 年 10 月 21 日, 日本大学湘南キャンパス).
- 17) 澤田燎, 鈴木祥太, 安部公博, 佐藤勉, “枯草菌・納豆菌のバイオフィルム形成と γ PGA 生産に影響を与える外来因子”, 第 15 回微生物研究会, P87 (2016 年 10 月 21 日, 日本大学湘南キャンパス).
- 18) 橋口優一郎, 鈴木祥太, 安部公博, 佐藤勉, “枯草菌 *skin element* の excision に関わる *skr* の機能解析”, 第 15 回微生物研究会, P88 (2016 年 10 月 21 日, 日本大学湘南キャンパス).
- 19) 藤澤剛士, 熊澤慶美, 鈴木祥太, 安部公博, 佐藤勉, “枯草菌を用いた水質浄化の試み”, 第 15 回微生物研究会, P89 (2016 年 10 月 21 日, 日本大学湘南キャンパス).
- 20) 橋口優一郎, 鈴木祥太, 安部公博, 佐藤勉, “枯草菌孢子形成期における *sigK* 遺伝子再構築の調節機構”, 第 39 回日本分子生物学会年会, 2P-0033 (2016 年 12 月 1 日, パシフィコ横浜).
- 21) 住吉泰樹, 鈴木祥太, 安部公博, 佐藤勉, “枯草菌孢子形成母細胞の栄養細胞への脱分化”, 第 39 回日本分子生物学会年会, 2P-0502 (2016 年 12 月 1 日, パシフィコ横浜).
- 22) 鈴木祥太, 鈴木颯, 安部公博, 佐藤勉, “異なる *attB* を認識する新規ファージの構築”, 第 11 回日本ゲノム微生物学会年会, 101-04, 1P09 (2017 年 3 月 2 日, 慶応大学湘南藤沢キャンパス).
- 23) R. Nagasawa, T. Sato, H. Senpuku, ”Raffinose Induces Extracellular DNA-Dependent Biofilm Formation of *Streptococcus mutans*”, IADR GENERAL SESSION, 3110 San Francisco, California, USA, March 22-25, 2017.

山本 兼由

<招待講演>

- 1) 小川綾乃, 山本兼由 バクテリアレスポンスレギュレーターによる細胞形態制御機構 第 89 回日本生化学会大会 (平成 28 年 9 月, 仙台).
- 2) 山本兼由 大腸菌転写因子によるゲノム発現制御ネットワーク 日本遺伝学会第 88 回大会 (平成 28 年 9 月, 三島).

<一般講演>

- 1) 小島文歌, 小川綾乃, 石浜明, 山本兼由 大腸菌レスポンスレギュレーター FimZ の 2 つの機能 第 39 回日本分子生物学会年会 (平成 28 年 12 月, 横浜) (シンポジウム口頭発表に選抜).
- 2) 山内えりか, 山中幸, Yan Jie, Linda J Kenney, 西山宗一郎, 曾和義幸, 川岸郁朗, 石浜明, 山本兼由 核様体タンパク質 H-NS のタンパク質間相互作用部位の遺伝子サイレンシングにおける役割 第 39 回日本分子生物学会年会 (平成 28 年 12 月, 横浜) (シンポジウム口頭発表に選抜).
- 3) 新野つばさ, 沼田理恵子, 石浜明, 山本兼由 ビフィズス菌・大腸菌間で機能するクオラムセンシング 第 15 回微生物研究会 (平成 28 年 11 月, 藤沢).
- 4) 三宅裕可里, 石浜明, 山本兼由 大腸菌ゲノムの CRISPR-Cas9 システムを用いた遺伝子多重欠失 第 15 回微生物研究会 (平成 28 年 11 月, 藤沢).
- 5) 新野つばさ, 山本兼由 ビフィズス菌と大腸菌で機能するクオラムセンシング 第 2 回法政大学・立教大学微生物研究会 (平成 28 年 9 月, 小金井).
- 6) 三宅裕可里, 山本兼由 大腸菌ゲノムの CRISPR-Cas9 システムを用いた遺伝子多重欠失 第 2 回法政大学・立教大学微生物研究会 (平成 28 年 9 月, 小金井).

石垣 隆正

<一般講演>

- 1) 石垣隆正, 志田守, Sharif A. Al-Mamun, 打越哲郎, 角谷正友, “液中レーザーアブレーション法による $Y_2O_3:Eu^{3+}$ 蛍光

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

体ナノ粒子の合成：粒径および生成相への水溶液 pH の影響”，粉体粉末冶金協会平成 28 年度春季大会，3-30A（2016 年 5 月 25 日，京都工繊大，京都市）。

- 2) 石井沙耶花，石垣隆正，打越哲郎，”水酸化亜鉛を原料とした酸化亜鉛微粒子の水熱合成”，無機マテリアル学会第 132 回講演会，(22)（2016 年 6 月 3 日，船橋市民文化創造館，船橋市）
- 3) 米澤朋典，辻本吉廣，張晨寧，打越哲郎，石垣隆正，“高濃度ニオブドーブ酸化チタンの可視光応答光触媒特性”，日本セラミックス協会第 29 回秋季シンポジウム，1K24（2016 年 9 月 7 日，広島大，東広島市）。
- 4) 堤大耀，岡本裕二，石垣隆正，角谷正友，“誘導結合型プラズマを用いて生成した水素ラジカルへの窒素の影響”，第 77 回応用物理学会秋季学術講演会，15a-B7-14（2016 年 9 月 15 日，朱鷺メッセ，新潟市）。
- 5) 岡本裕二，堤大耀，石垣隆正，F. Z. Dahmani，角谷正友，“熱フィラメント法で生成した水素ラジカルによる大気圧下での SiCl_4 の分解”，第 77 回応用物理学会秋季学術講演会，15p-B10-11（2016 年 9 月 15 日，朱鷺メッセ，新潟市）。
- 6) 金丸峻士，渡部明日香，石垣隆正，“水溶液中のレーザーアブレーションによる Mn ドープ TiO_2 ナノ粒子の合成”，無機マテリアル学会第 133 回学術講演会，(11)（2016 年 11 月 10 日，東北大，仙台市）。
- 7) T. Ohsawa, K. Tsunoda, T. Ishigaki, N. Ohashi, “Crystalline Polarity Control of ZnO Thin Films Grown Under External Electric Bias”, The 10th Asian Meeting on Electroceramics, F12（2016 年 12 月 5 日，台北，台湾）。
- 8) 米澤朋典，辻本吉廣，張晨寧，打越哲郎，石垣隆正，“高濃度ニオブドーブ酸化チタンの可視光応答光触媒特性”，第 26 回日本 MRS 年次大会，D1-020-006（2016 年 12 月 20 日，横浜市開港記念会館，横浜市）。
- 9) 米澤朋典，辻本吉廣，張晨寧，打越哲郎，石垣隆正，“高濃度ニオブ添加複合酸化チタンの可視光照射下における触媒特性”，第 55 回セラミックス基礎科学討論会，2A01（2017 年 1 月 13 日，岡山コンベンションセンター，岡山市）。
- 10) 萩棟，石垣隆正，緒方啓典，辻本吉廣，張晨寧，打越哲郎，“Visible light photocatalytic activity given by high-temperature heat-treatment of solvothermally-synthesized high-concentration niobium doped TiO_2 ”，第 55 回セラミックス基礎科学討論会，2A02（2017 年 1 月 13 日，岡山コンベンションセンター，岡山市）。
- 11) 金丸峻士，渡部明日香，石垣隆正，“液相レーザーアブレーション法 TiO_2 ナノ粒子合成における Mn 添加効果”，第 55 回セラミックス基礎科学討論会，2A16（2017 年 1 月 13 日，岡山コンベンションセンター，岡山市）。
- 12) 石垣隆正，中田祐介，米澤朋典，辻本吉廣，張晨寧，打越哲郎，“熱プラズマ合成ニオブドーブ酸化チタンナノ粒子の高温熱処理によって得られる可視光活性光触媒”，第 34 回プラズマプロセス研究会・第 29 回プラズマ材料科学シンポジウム合同会議，17pB3（2017 年 1 月 17 日，北大，札幌市）。
- 13) T. Yonezawa, Y. Tsujimoto, C. Zhang, T. Uchikoshi, T. Ishigaki, “High-temperature heat treatment giving enhanced visible light photocatalytic activity to TiO_2 with high concentration Nb doping”, 41st International Conference and Expo on Advanced Ceramics and Composites (ICACC' 17), S8-P029（2017 年 1 月 24 日，Daytona Beach，米国）。

杉山 賢次

<一般講演>

- 1) 嶋田智宏，杉山賢次，“側鎖にダンシル基を有するポリマーの合成とソルバトロミズム評価”，1Ph006，第 65 回高分子学会年次大会（2016 年 5 月 27 日，神戸国際会議場・神戸国際展示場，神戸市）。
- 2) 福本啓，杉山賢次，“側鎖にトリアルコキシチタンを含むポリマーの合成と表面構造解析”，1Pg009，第 65 回高分子学会年次大会（2016 年 5 月 27 日，神戸国際会議場・神戸国際展示場，神戸市）。
- 3) 近藤雄大，山本兼由，杉山賢次，“ポリカプロラクトンセグメントを含むブロック共重合体の合成と生分解性評価”，1Ph014，第 65 回高分子学会年次大会（2016 年 5 月 27 日，神戸国際会議場・神戸国際展示場，神戸市）。
- 4) 廣川惣一郎，山本兼由，杉山賢次，“4 本鎖 PCL-b-PNIPAM スターブロックコポリマーの合成と生分解性評価”，1Pd016，第 65 回高分子学会年次大会（2016 年 5 月 27 日，神戸国際会議場・神戸国際展示場，神戸市）。
- 5) 宇野翔太，池田彩乃，角田佑樹，野呂拓也，蔵重麻純，杉山賢次，“パーフルオロオクチルアゾベンゼンユニットを有するポリマーの合成と表面構造解析”，2Pb022，第 65 回高分子討論会（2016 年 9 月 15 日，神奈川大学，横浜市）。
- 6) J. Zhang, K. Sugiyama, H. Yokoyama, “Fluorine-containing linear triblock copolymer self-assembly in thin film”, 2Pd052，第 65 回高分子討論会（2016 年 9 月 15 日，神奈川大学，横浜市）。

田中 豊

<一般講演>

- 1) 田中豊，前阪，三脚パラレルメカニズムを用いたヘッド固定・ステージ可動式プリンタの試作，日本機械学会第 16 回機素潤滑設計部門講演会講演論文集，B1-3，pp. 41-42，芦原，2016-4-18。
- 2) 坂間清子，増原，田中豊，油圧ロボットのための油中気泡の分離除去装置とその効果，ロボティクス・メカトロニクス

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

講演会 2016 講演論文集, No16-2, 1P1-09b2, 横浜, 2016-06-09.

- 3) 田中豊, アクチュエータの基礎と駆動制御技術およびその応用例, 日本テクノセンターセミナー資料, pp.1-154, 新宿, 2016-07-26.
- 4) 坂間清子, 田中豊, 油圧式ピストンモータの性能比較に関する調査研究, 日本機械学会 2016 年度年次大会講演論文集 DVD, No.16-1, J1110101, 九州大, 2016-09-14.
- 5) 田中豊, 油圧周辺技術の技術動向, 油圧技術基礎講座「周辺機材の選び方・使い方」, 日本工業出版セミナー資料, 御茶ノ水エデュケーションセンター, pp.47-74, 2016-09-28.
- 6) 坂間清子, 田中豊, 油圧動力伝達システムにおける微細気泡の除去方法の提案, 平成 28 年秋季フルードパワーシステム講演会講演論文集, pp.6-8, 青森, 2016-10-19.
- 7) 舟知, 坂間清子, 田中豊, 気泡除去装置の形状パラメータの最適化(流入部長さの影響), 平成 28 年秋季フルードパワーシステム講演会講演論文集, pp.9-11, 青森, 2016-10-19.
- 8) 彭敬輝, 外川, 田中豊, ER 流体を用いた小形走行ロボット用制動装置の設計, 平成 28 年秋季フルードパワーシステム講演会講演論文集, pp.100-102, 青森, 2016-10-20.
- 9) 田中豊, 細田, インクヘッド固定・ステージ可動式プリンタの動作シミュレーション, 日本機械学会山梨講演会講演論文集, No.160-3, pp.149-150, 山梨大(甲府), 2016-10-22.
- 11) 坂間清子, 五嶋, 田中豊, 油中気泡が油圧アクチュエータの特性におよぼす影響, 日本機械学会山梨講演会講演論文集, No.160-3, pp.153-154, 山梨大(甲府), 2016-10-22.
- 12) 田中豊, 産業に役立つアクチュエータ研究開発の最前線(最新アクチュエータ要素技術からアクチュエータシステムへの展開)「アクチュエータ性能の変遷と比較」, 日本機械学会講習会資料, No.16-139, pp.51-56, 名古屋大, 2016-11-25.
- 13) 山田, 御法川学, 田中豊, 田沼千秋, ヘッド固定型 3D プリンタ用パラレルメカニズムの設計試作, 日本機械学会第 23 期関東支部講演会, 2017-03-16.
- 14) 竹内, 田沼千秋, 田中豊, カチオン重合型 UV インクを用いた 3D 造形の検討, 第 64 回応用物理学会春季学術講演会, 2017-03-15.

御法川 学

<一般講演>

- 1) Ikuo Kimizuka and Gaku Minorikawa: Ecma TR for New Physical Evaluation Method of Prominent Discrete Tone of Noise Emitted from Air-Moving Devices, NOISE-CON2016, NC16_32 (2016 年 6 月).
- 2) Chihiro KAMIO, Tatsuhito AIHARA and Gaku MINORIKAWA: Vibration Analysis of Baby Carriage Using the Multi-Body Dynamics, Proceedings of 2nd International Conference on Mechanical and Production Engineering, pp.173-178 (2016 年 7 月).
- 3) Gaku Minorikawa, Ryo Yasudal, Tae-Gyun Lim and Norihiko Watanabe: Design and prototyping of electric ducted fan for light aircraft, 7th International Symposium on Fluid Machinery and Fluids Engineering, ISFMFE 2016 (2016 年 10 月).
- 4) 平野利幸, 大高敏男, 御法川学: 小型軸流ファンの性能に関する研究, 日本設計工学会 2016 年度春季研究発表講演会 (2016 年 5 月).
- 5) 君塚郁夫, 御法川学: 小型ファンからの騒音中の純音成分の音質評価パラメータに関する新提案, 日本機械学会 第 26 回環境工学総合シンポジウム 2016, No.128 (2016 年 7 月).
- 6) 野田輝揮, 相原建人, 御法川学: がたのある 2 自由度ばね-質量系の強制振動解析, 日本機械学会 Dynamics and Design Conference 2016 USB 論文集, No.16-15, 134 (2016 年 8 月).
- 7) 神尾ちひろ, 相原建人, 御法川学: 実走行時におけるベビーカーの振動解析, 日本設計工学会 2016 年秋季大会研究発表講演会講演論文集, pp.147-150 (2016 年 10 月).
- 8) 御法川学, 伊藤孝宏, 技術コラム(連載) 装置設計者のための騒音の基礎, ソフトウェアクレイドルホームページ <http://www.cradle.co.jp/tec/column07/index.html> (2016 年連載中).

安田 彰

<一般講演>

- 1) 春海豪, 西勝聡, 峯村亮佑, 發出祐基, 松尾遥, 安田彰, “デジタル直接駆動スピーカにおける回路規模削減手法”, 電子情報通信学会ソサエティ大会, A-1-12, 9 月, 2016 年, (北海道札幌市).
- 2) 吉田知朗, 西勝聡, 星野裕也, 吉野理貴, 安田彰, 山下喜一, “AB 級出力段に用いる CMFB 機能を有する V-I 変換レベルシフタの性能評価”, 電子情報通信学会ソサエティ大会, A-1-13, 9 月, 2016 年, (北海道札幌市).

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S:さらに改善した、A:従来通り、B:改善していない」を意味する。

- 3) 峯村亮佑, 西勝聡, 春海豪, 發出祐基, 松尾遥, 安田彰, “フィードフォワード型ジッタシェーピング $\Delta \Sigma DAC$ ”, 電子情報通信学会ソサエティ大会, A-1-14, 9月, 2016年, (北海道札幌市).
- 4) 赤松雄貴, 嘉藤貴博, 松尾遥, 曾我美泰隆, 安田彰, 吉野理貴, “遅延素子バラツキを考慮した TDC の変換誤差低減に関する研究”, 電子情報通信学会ソサエティ大会, A-1-15, 9月, 2016年, (北海道札幌市).
- 5) 峰岸和輝, 松尾遥, 本山佳樹, 吉野理貴, 安田彰, “マルチコイル巻線法によるモータ出力の変化に関する研究”, 電子情報通信学会ソサエティ大会, A-1-16, 9月, 2016年, (北海道札幌市).
- 6) 松尾遥, 本山佳樹, 曾我美泰隆, 峯村亮佑, 安田彰, “相間のバラツキの影響を低減させた高精度マルチコイルモータの実現”, 電子情報通信学会ソサエティ大会, A-1-17, 9月, 2016年, (北海道札幌市).
- 7) 曾我美泰隆, 松尾 遥, 安田彰, 吉野理貴, “デジタル直接駆動型スピーカの振幅制御による指向性向上”, 電子情報通信学会ソサエティ大会, A-1-18, 9月, 2016年, (北海道札幌市).
- 8) 布施政人, 曾我美泰隆, 春海 豪, 安田彰, 吉野理貴, “マルチレベル木構造 NSDEM”, 電子情報通信学会ソサエティ大会, A-1-19, 9月, 2016年, (北海道札幌市).
- 9) 發出祐基, 春海 豪, 西勝 聡, 安田彰, 吉野理貴, “デジタル直接駆動型スピーカシステムに用いる NSDEM の小信号特性に関する一考察”, 電子情報通信学会ソサエティ大会, A-1-20, 9月, 2016年, (北海道札幌市).
- 10) 碓井孝憲, 松尾 遥, 峰岸和輝, 安田彰, “マルチコイルモータ駆動用 $\Delta \Sigma$ 変調器の一考察”, 電子情報通信学会ソサエティ大会, A-1-24, 9月, 2016年, (北海道札幌市).
- 11) 星野裕也, 安田彰, 山下喜市, 吉田知郎, 吉野理貴, “アクティブインダクタの高 Q 値化に関する研究”, 電子情報通信学会ソサエティ大会, A-1-25, 9月, 2016年, (北海道札幌市).
- 12) 佐々木翔一朗, 吉野理貴, 安田彰, “パルス複製回路を用いたマルチビット $\Delta \Sigma TDC$ ”, 電子情報通信学会ソサエティ大会, C-12-23, 9月, 2016年, (北海道札幌市).
- 13) 星野裕也, 吉田知郎, 古屋佑樹, 安田彰, “アクティブインダクタを用いたリングオシレータの低雑音化”, 電気学会電子回路研究会, ECT-017-028, 3月9日, 2017年, (東京都小金井市).
- 14) 古屋佑樹, 發出祐基, 安田彰, 吉野理貴, 森山誠二郎, “設計資産の有効活用を狙ったデジタルスピーカ開発環境の構築”, 電気学会電子回路研究会, ECT-017-036, ECT-017-028, 3月9日, 2017年, (東京都小金井市).
- 15) 發出祐基, 西勝聡, 安田彰, “小信号特性を改善したデジタル直接駆動型スピーカの実装”, 電気学会電子回路研究会, ECT-017-042, ECT-017-028, 3月9日, 2017年, (東京都小金井市).
- 16) 松尾遥, 本山佳樹, 石間泉, 西勝聡, 安田彰, “量子化誤差と製造バラツキの影響を低減させた高精度マルチコイルモータの実現”, ECT-017-047, ECT-017-028, 3月9日, 2017年, (東京都小金井市).
- 17) 石間泉, 松尾遥, 吉野理貴, 安田彰, “ $\Delta \Sigma$ 変調器の同期現象に関する研究”, 電気学会電子回路研究会, ECT-017-051, ECT-017-028, 3月10日, 2017年, (東京都小金井市).

辻田 星歩

- 1) 青木亮祐, 畑中健太郎, 辻田星歩, 岩上玲, 木村太治, ラジアルタービンの VGS ノズル内の流れに関する実験的研究 (ノズル出口流れ場の周方向分布), ターボ機械協会第 76 回 地方 (北見) 講演会講演論文集, A7, 北見工業大学, 2016-9-30.
- 2) 小川達也, 平野利幸, 辻田星歩, 2 本の吹込みが遠心圧縮機の性能に及ぼす影響について, ターボ機械協会第 76 回地方 (北見) 講演会講演論文集, C2, 北見工業大学, 2016-9-30.
- 3) 金子雅直, 辻田星歩, 短翼を有する遷音速遠心圧縮機内の低流量作動点での流れ場における翼端漏れ流れの挙動, 第 44 回日本ガスタービン学会定期講演会講演論文集, A-12, 酒田, 2016-10-26.
- 4) 蔵本結生, 辻田星歩, 矢崎和貴, 超高負荷タービン翼列の 2 次元圧縮性流れの数値解析, 日本機械学会東北支部第 52 期総会・講演会講演論文集, 116, 東北大学工学部青葉記念会館, 2017-3-14.
- 5) 高倉健介, 辻田星歩, 超高負荷タービン直線翼列内の二次流れに関する実験的研究 (スキューラチップの影響), 日本機械学会関東支部第 23 期総会・講演会講演論文集, WS0106-03, 東京理科大学 (葛飾キャンパス), 2017-3-17.
- 6) 武田賢太, 辻田星歩, 回転曲がりダクトによる遠心羽根車内の二次流れと損失生成機構の解明 (入口速度のピッチ方向とスパン方向分布の影響), 日本機械学会関東支部第 23 期総会・講演会講演論文集, WS0106-05, 東京理科大学 (葛飾キャンパス), 2017-3-17.

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・掲載誌の目次, 学会開催資料。

③研究成果に対する社会的評価 (書評・論文等)

※研究所のこれまでに発行した刊行物に対して 2016 年度に書かれた書評 (刊行物名、件数等) や 2016 年度に引用された論文 (論文タイトル、件数等) の詳細を箇条書きで記入。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S: さらに改善した、A: 従来通り、B: 改善していない」を意味する。

研究成果の新聞等掲載：7 件

- ・“LED 照明リサイクル アイリス 法政大などと仕組み”，日経 MJ（2016 年 4 月 4 日掲載）。
- ・“LED 照明から再資源化 法政大など”，日刊工業新聞（2016 年 4 月 12 日掲載）。
- ・“LED リサイクルに道 ハリタ金属 アイリス 法政大”，日本経済新聞（北陸経済）（2016 年 4 月 26 日掲載）。
- ・“LED の再利用確立 ハリタ金属 アイリス，法政大と協力”，富山新聞（北陸経済）（2016 年 4 月 26 日掲載）。
- ・“LED 照明 ハリタ金属 アイリスと協力開発”，北日本新聞（とやま経済），2016 年 4 月 26 日。
- ・“LED 照明のリサイクルを業界初の事業化”，レアメタルニュース（2016 年 6 月 24 日掲載）。
- ・“アイリスオーヤマが販促強化 廃 LED 回収で顧客を開拓”，日経エコロジー（2016 年 7 月 08 日掲載）。
- ・”材料押出し方式（ME 方式）の三次元造形装置（3D プリンタ）に適する無機系プレミックス材料の開発および造形を国内で初めて成功”，太平洋セメント ニュースリリース (<http://www.taiheiyo-cement.co.jp/news/news/pdf/170206.pdf>)，（2017 年 2 月 6 日）。

研究発表が優秀発表賞を受賞：国際学会：2 件，国内学会：2 件

- ・小島文歌，小川綾乃，石浜明，山本兼由 “大腸菌レスポンスレギュレーターFimZ の 2 つの機能”，第 39 回日本分子生物学会年会（平成 28 年 12 月，横浜）。
- ・山内えりか，山中幸，Yan Jie，Linda J Kenney，西山宗一郎，曾和義幸，川岸郁朗，石浜明，山本兼由，“核様体タンパク質 H-NS のタンパク質間相互作用部位の遺伝子サイレンシングにおける役割”，第 39 回日本分子生物学会年会（平成 28 年 12 月，横浜）。
- ・Jinghui Peng, Songjing Li, Yutaka Tanaka, Vibration suppression of the armature assembly in a hydraulic servo-valve torque motor using the magnetic fluid, Proc. 20th International Conference on Mechatronics Technology, October 28-31, 2016, Dalian, China.
- ・Yuki FURUYA, Masayoshi TAKAHASHI, Satoshi SAIKATSU, Michitaka YOSHINO, and Akira YASUDA, “Speaker system with 100-W High Output Power and 0.17 % THD Using 9-V Power Supply with Digitally Direct-Drive Technique”, IEEE CE East Joint Japan Chapter ICCE Young Scientist Paper Award 2017 Jan.

学術誌の招待論文：1 件

学会における招待講演：6 件

（詳細は、「2.1②対外的に発表した研究成果」に記述した。）

以前に発表した論文に対する多数の引用

- ・X.H. Wang, J.-G. Li, H. Kamiyama, Y. Moriyoshi, T. Ishigaki, “Wavelength-Sensitive Photocatalytic Degradation of Methyl Orange in Aqueous Suspension over Iron(III)-Doped TiO₂ Nanopowders under UV and Visible Light Irradiation”, *J. Phys. Chem. B*, **110**(13), 6804-6809(2006). （2016 年 11 月/12 月時点で、Web of Science の高被引用文献に選出された）

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・論文掲載誌、掲載新聞の紙面、学会開催資料。

④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

（～400 字程度まで）※2016 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

- ・私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「グリーンテクノロジーを支える次世代エネルギー変換システム」の 2015 年度（プロジェクト開始後 3 年度）までの中間評価を受けるため、研究進捗状況報告書を 2016 年 5 月に文部科学省に提出した。文科省からは内容に関する特段の指摘はなく、プロジェクトの継続が認められた。

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・文科省 HP における研究進捗状況報告書の掲載：

(http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2016/10/05/1376969_011.pdf)

⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況

※2016 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2016 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。

- ・2016 年度に応募した科研費申請 9 件

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ・2016 年度中に採択を受けた外部資金
 - 科研費 8 件、計 1,090 万円
 - 環境省 未来のあるべき社会・ライフスタイルを創造する技術イノベーション事業 7,000 万円
 - 環境研究総合推進費補助金 1,853 万円
 - JST/MP 100 万円
 - 文科省 科学技術試験研究委託事業 995 万円
 - 経済産業省関東経済産業局 戦略的基盤技術高度化支援事業（サポイン） 364 万円
 - NEDO SIP 500 万円
 - その他（民間会社との共同研究・民間会社からの委託研究） 16 件

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・研究開発センター登録データ

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・当センターで実施している私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「グリーンテクノロジーを支える次世代エネルギー変換システム」のプロジェクト開始後 3 年度までの中間評価を受け、プロジェクトの継続が認められた。	

（３）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「グリーンテクノロジーを支える次世代エネルギー変換システム」が、2017 年度で終了し、2018 年度に文科省による終了評価を受けることになっている。今年度はプロジェクトの研究成果の集約につとめる必要がある。また、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の後継事業である「私立大学研究ブランディング事業」への 2018 年度申請の準備を進めている。

【この基準の大学評価】

研究活動としては、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業にもとづく研究プロジェクトが継続的に行われている。プロジェクトを主催とするグリーンテクノロジーセミナーについては 3 回開催されており、研究プロジェクトが活発に活動していると評価できる。

対外的に発表された研究成果としては、研究員それぞれが論文発表や講演、学会発表などに精力的に取り組んでおり、実績・量ともに特筆すべきものである。今後もぜひ継続いただきたい。

研究成果に対する社会的評価としては、新聞掲載事例、研究発表の受賞、招待論文、招待講演、多数の引用論文があり、高い評価が得られている。

外部評価については、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の中間評価を受け、プロジェクトの継続が認められており、十分な実績を評価されたものと考えられる。

外部資金の獲得についても積極的に取り組まれており、科研費をはじめ、環境省、文部科学省、経済産業省、NEDO などの公的機関のほか、民間からも多数の資金を獲得していることは大いに評価できる。さらには、新たな大型外部資金として「私立大学研究ブランディング事業」への申請準備も進められており、その成果が大いに期待される。

III 2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況

評価基準	研究活動
現状の課題・今後の対応等	第三者評価の報告を受け、プロジェクト後半の留意点を次のようにまとめ、実現をめざしている。 ・連携の意識を持ち続けて、プロジェクトを推進する。 ・より高度な内容の成果をめざして、外部機関等と協力しながら研究を進める。 ・国際的なアウトプットとするために、引き続き主要国際論文誌への投稿を増やす努力をする。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		・連携による成果を反映した論文を発表する。 ・プロジェクトのタイトル、新たな「エネルギー変換システム」を実現するための方向性を見いだす。
年度末報告	執行部による点検・評価	第三者評価の報告に留意して進めた具体的な内容を次に示す。 ・連携の意識を持ち続けて、プロジェクトを推進した。プロジェクト参加者の相互理解を深めるための、プロジェクト主催の公開セミナーである「グリーンテクノロジーセミナー」を3回開催した。14名のプロジェクトメンバー間の共同研究は13件であり、連携の進行を示している。 ・より高度な内容の成果をめざして、外部機関等と協力しながら研究を進めた。外部機関との共同研究は19件であり、うち3件の国際的な共同研究も推進した。 ・研究発表件数は、論文数30件、学会発表件数は175件であり、過去5年間の水準を維持した。そのうち、国際誌での発表論文数は26件、国際学会での発表件数は40件となり、国際的な発表の高い水準を示した。 ・プロジェクト内外の共同研究による発表は、論文発表10件、学会発表29件となり、連携の進行を示している。 ・プロジェクトのタイトル、「エネルギー変換システム」を実現するための新たな内容として、プロジェクト計画に含まれていなかった、新たな構成材を用いた「ペロブスカイト太陽電池」、新規「リチウム二次電池の電極材料」、「大腸菌細胞内の窒素固定」、人にやさしい「太陽光エネルギー吸収材」などが研究遂行過程で見いだされた。

【2016年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

2016年度における課題として、第三者評価結果を踏まえたプロジェクトの推進が掲げられていた。すべての留意点について適切に取り組まれていると評価できる。特に、国際的なアウトプットを増やす努力が実り、国際誌での発表論文数26件、国際学会での発表件数40件の実績が挙げられている。これは、研究水準の高さを示すものとして高く評価できる。

【大学評価総評】

マイクロ・ナノテクノロジー研究センターは、私立大学戦略的研究基盤形成支援事業に基づき研究プロジェクトが進められており、その研究業績や研究成果の量や外部資金の獲得状況は高く評価できる。2015年度は外部評価委員による第三者評価が行われたが、2016年度は実施されておらず、継続的な自己点検・評価のためには、毎年度の外部評価委員による第三者評価活動の実施が望ましい。また2017年度で私立大学戦略的研究基盤形成支援事業が終了するため、次期の大型外部資金のターゲットとして「私立大学研究ブランディング事業」への2018年度申請の準備を始めており、獲得の実現を期待したい。

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

I 2016 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016 年度大学評価結果総評】

サステイナビリティ研究所では、事業目的の達成のため、研究所としての具体的な課題と方法について 5 つのアプローチの観点から、アプローチ代表者と連携を図りながら運営が行われている。研究員（12 名）及び R・A（8 名）の研究能力の維持・向上、若手研究者の育成（公刊論文の執筆および博士論文作成に向けた指導）や研究倫理に向けた取り組みの一環として、「コンプライアンス研修会」の資料配付等もすべての R・A に対して行われている。また、社会的評価は、一部の出版物においてすでに高評価が得られており、今後の多くの蓄積が期待される。継続性のある研究・教育活動（国際シンポジウム、国際ワークショップの共催及び新しい研究会の組織化、「原発事故被災地再生研究会」・「再生可能エネルギー導入による地域社会の構造的再生研究会」）が実行され、今後の各種提言による地域再生に関する拠点としての社会的役割の一端も担いつつある。第三者による外部評価が継続的に行われており、高く評価できる。全体的な事業目的も達成されているが、外部資金獲得については、組織統合の問題もあるが、継続的な指摘事項でもあるため、今後のサステイナビリティ実践知研究機構での十分な検討のもと、組織的な取り組みをお願いしたい。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

今までの研究蓄積をベースにさらなる研究成果の公刊を目指して鋭意、努力している。本研究所主催の国際シンポジウムの成果『持続可能なエネルギー社会へ——ドイツの現在、未来の日本』（法政大学出版局、2016 年 8 月）はその一例である。今後も、研究成果を公刊していきたい。

外部資金獲得については、2016 年度中に「環境共創イニシアチブ・再生可能エネルギー事業者支援事業」、トヨタ財団研究助成プログラム、環境研究総合推進費などに申請したが、惜しくも採択されなかった。今後も外部資金を得るための補助金申請を積極的に進めていく所存である。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

サステイナビリティ研究所では、国際シンポジウムを主催し、その成果を『持続可能なエネルギー社会へ——ドイツの現在、未来の日本』（法政大学出版局、2016 年 8 月）として出版するなど積極的な活動が行われた。外部資金獲得についても積極的に申請しており、活発に活動していると評価できる。

II 自己点検・評価

1 内部質保証

（1）点検・評価項目における 2016 年度の現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

はい いいえ

【2016 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

- ・サステイナビリティ研究所の質保証は、所長・専任研究員・兼任研究員による運営委員会において討議されている。教員は運営委員会の構成として質保証活動に参加している。
- ・2015 年度から継続して外部評価委員による評価を取り入れ、内部質評価制度を充実させている。

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

※上記（1）～（2）の記載内容に基づき基準全体の評価を記入。

サステイナビリティ研究所には、所長・専任研究員・兼任研究員による運営委員会が設置されており、質保証について適切に活動している。2015 年度からは継続して外部評価委員による評価も取り入れている。充実した内部質保証制度となっており評価できる。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

2 研究活動

【2017年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2016年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2016年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

■法政大学サステナビリティ研究所 ワークショップ

開催日 2016年11月4日（金）

開催場所 長野県飯田市 シルクホテルホール

参加者数 14名

テーマ 再生可能エネルギーと地域の持続可能性

発表者

- ・再生可能エネルギーによる地域社会の構造的再生と住民意識：日本と韓国、飯田市と湖南省の比較
発表者：白井信雄（法政大学）
- ・日本における地域電力の動向と展望
発表者：北風亮（公益財団法人自然エネルギー財団）
- ・カーボンフリー・アイランド済州に向けたエネルギー政策
発表者：キムビョンム（ACCERC）
- ・低酸素社会を構築する枠組み
発表者：ジョン・デヨン（ACCERC）
- ・自然エネルギーと市民参加型ファンドで実現する自立型社会
発表者：小川博（飯田市）、蓮田裕一（おひさま進歩エネルギー（株））

■法政大学サステナビリティ研究所 総合研究会

開催日 2016年3月10日（金）

開催場所 法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソナードタワー B会議室

参加者数 23名

テーマ 原発事故とエネルギー構造の転換—エネルギー戦略シフトに向けて

発表者及びメインコメンテーター

- ・原子力総合年表から見る原子力と地域社会とのかかわり合い
発表者：堀川三郎（法政大学）
メインコメンテーター：寺田良一（明治大学）
- ・原発事故被災からの回復の条件
発表者：長谷部俊治（法政大学）
メインコメンテーター：寺西俊一（一橋大学）
- ・日独のエネルギー政策の比較から明らかとなったもの
発表者：壽福眞美（法政大学）
メインコメンテーター：坪郷實（早稲田大学）
- ・エネルギー自治をいかに実現するか
発表者：白井信雄（法政大学）
メインコメンテーター：堀尾正鞠（東京農工大学）

■法政大学サステナビリティ研究所 公開研究会

開催日 2016年3月22日（水）

開催場所 法政大学市ヶ谷キャンパス 外濠校舎 S201教室

参加者数 15名

テーマ ボトムアップによる原発事故被災地の「再生」—イニシアティブ発揮するために

発表者及びゲストコメンテーター

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ・共同セクターのイニシアティブによる森林の「再生」
報告者：早尻正宏（北海学園大学）
ゲストコメンテータ：山本信次（岩手大学）
- ・マーシャル諸島原水爆実験地における避難者
報告者：竹峰誠一郎（明星大学）
ゲストコメンテータ：友澤悠季（長崎大学）
- ・放射性物質汚染調査における市民測定所のイニシアティブ
報告者：清原悠（法政大学）
ゲストコメンテータ：定松淳（東京大学）

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・各研究会の開催チラシを参照。

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2016 年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。

■『ニューズレター』No. 8（2017 年 3 月 1 日発行）

内容

- ・成果を形にする一年に 2017 年度の研究計画（堀川三郎）
- ・船橋晴俊／壽福眞美編著『持続可能なエネルギー社会へードイツの現在、未来の日本』法政大学出版局 2016 年（壽福眞美）

・ペーター・ヘニッケ／パウル・ヴェルフエンス『福島核事故以後のエネルギー転換ードイツの特殊な道か、それとも世界の模

範か？』新評論、2017 年（壽福眞美）

- ・長野県飯田市での「日本と韓国における再生可能エネルギーワークショップ」開催報告（小野田真二）
- ・原発震災の「記録と記憶」としての放送アーカイブ（小林直毅）
- ・「再生可能エネルギー導入による地域社会の構造的再生」研究会の本年度の活動状況（白井信雄）
- ・2016 年度原発事故被災地再生研究会の活動状況（清原悠）

■『サステナビリティ研究』第 7 号（2017 年 3 月 15 日発行）

内容

特集論文

- ・解題：原発事故被災からの復興 ―被災者・被災地のイニシアティブ―（長谷部俊治）
- ・森林の回復に必要なものは何か ―生業再建による働きかけの継続―（早尻正宏）
- ・原発事故被災地の再生と中間貯蔵施設 ―民主的合意の形成へ向けて―（松尾隆祐）
- ・被災地における再生可能エネルギーによる地域社会の構造的再生～行政施設と住民意識の状況を考える（白井信雄）
- ・「原発事故被災地・被災者」を誰が決めるのか？ ―「放射能汚染の矮小化」に対抗する、市民放射能測定所の「土

壌汚染調

査」に着目して（清原悠）

- ・ 原発事故被災からの回復のための政策課題（長谷部俊治）

■ 堀川三郎

堀川三郎（2016.7）“What Have we Gained and Lost Along the Way?: The Rise and Institutionalization of Environmental Sociology in Japan.” Paper read at the 3RD International Sociological Association Forum of Sociology, Universität Wien, Wien, Austria, July 13TH. 【公募審査有】

堀川三郎（2017.3）「日本における環境社会学の勃興と『制度化』：ひとつの試論」慶應義塾大学法学研究会『法学研究』第 90 巻第 1 号, pp. 379-406. 【招待原稿・査読無】

堀川三郎（2017.3）「環境社会学の略史（コラム 4）」鳥越皓之・帯谷博明編『よくわかる環境社会学 第 2 版』ミネルヴァ書房, p. 17.

堀川三郎（2017.3）「景観の保存と保全」鳥越皓之・帯谷博明編『よくわかる環境社会学 第 2 版』ミネルヴァ書房, pp. 134-136.

堀川三郎（2017.3）「原田正純とその周辺」（図書紹介）水俣フォーラム編『水俣病図書目録』, pp. 69-74, 116.

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

■ 壽福眞美

船橋晴俊・壽福眞美(編) (2016. 8)『持続可能なエネルギー社会へ——ドイツの現在、未来の日本』法政大学出版局

壽福眞美(監修) (2017. 3)『知の史的探究——社会思想史の世界』八千代出版

壽福眞美(翻訳) (2017. 3)「ドイツ連邦政府、統一ドイツのエネルギー政策」法政大学社会学部学会『社会史林』第 63 巻 第 4 号【査読無】

■ 白井信雄

Shirai, Nobuo, and Soo-Cheol Lee (2016. 8) "Renewable Energy and Regeneration of Regional Communities : Comparison of Citizens' Consciousness in Japan and Korea." Paper read at the 2016 KEEA (Korea Environmental Economics Association) Summer Conference, Busan, Pusan National University.

Shirai, Nobuo (2016. 8) "Renewable Energy and Regeneration of Regional Communities : Comparison of Citizens' Consciousness in Japan and Korea." Paper read at the Jeju Symposium for Promoting Renewable Energy in Japan and Korea, The Suites Hotel Jeju, Jeju, Korea.

白井信雄 (2016. 9)「再生可能エネルギーによる地域社会の構造的再生と住民意識」環境科学会 2016 年会.

白井信雄・李秀澈 (2016. 12)「再生可能エネルギーの導入による地域再生への期待：日本と韓国の国民意識の比較分析」『環境情報科学学術研究論文集』Vol. 30, pp. 291-296. 【査読有】

白井信雄・壽福眞美 (2017. 1)「再生可能エネルギーによる地域社会の構造的再生に関するチェック項目の構築：長野県 飯田市・滋賀県湖南市の評価」『環境科学会誌』Vol. 30, No. 1, pp. 20-33. 【査読有】

白井信雄 (2017. 3)「被災地における再生可能エネルギーによる地域社会の構造的再生～行政施策と住民意識の状況を考える」『サステナビリティ研究』Vol. 7, pp. 45-58. 【査読無】

■ 清水善仁

清水善仁 (2016. 4)「書評：安藤正人・久保亨・吉田裕編『歴史学が問う 公文書の管理と情報公開——特定秘密保護法下の課題』」『大原社会問題研究所雑誌』第 690 号、pp. 77-80. 【査読無】

エリザベス・シェパード、ジェフリー・ヨー共著、森本祥子、平野泉、松崎裕子編訳、清原和之、齋藤柳子、坂口貴弘、清水善仁、白川栄美、渡辺悦子訳 (2016. 6)『レコード・マネジメント・ハンドブック——記録管理・アーカイブズ管理のための一』日外アソシエーツ (第 7 章翻訳担当、pp. 302-342.) 【査読無】

清水善仁 (2016. 8)「日本のアーカイブズ界における「環境アーカイブズ」の位置」『大原社会問題研究所雑誌』第 694 号、pp. 3-13. 【査読無】

清水善仁 (2017. 2)「法政大学における「環境アーカイブズ」の取り組み」日本大学企画広報部広報課『大学史論輯 譽誌』第 12 号、pp. 1-22. 【査読無】

■ 長谷部俊治

長谷部俊治 (2017. 3)「原発事故被災からの回復のための政策課題」『サステナビリティ研究』Vol. 7, pp. 77-101. 【査読有】

■ 谷口信雄

谷口信雄 (2016. 8)「地域に根ざした再生可能エネルギー事業のための地域金融のあり方と実態」日本エネルギー学会平成 28 年会.

■ 友澤悠季

友澤悠季 (2016. 5)『美しい郷土』をめぐる——岩手県陸前高田市沿岸部における開発と復興にかかわる断片, 『地域社会学会年報』28 集, pp. 29-44. 【査読有】

友澤悠季 (2016. 12)「ひととく・水俣病の 60 年——人間としての言葉求め続ける」(書評)『朝日新聞』2016 年 12 月 18 日。

友澤悠季 (2017. 3)「公害とフィールドワーク (コラム 43)」, 鳥越皓之・帯谷博明編『よくわかる環境社会学 第 2 版』, ミネルヴァ書房, p. 203.

友澤悠季 (2017. 3)「公害・環境論とその周辺」(図書紹介), 水俣フォーラム編『水俣病図書目録』, pp. 22-25.

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・特になし
③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）
※研究所のこれまでに発行した刊行物に対して 2016 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2016 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を箇条書きで記入。
・
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・特になし
④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）
（～400 字程度まで）※2016 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。
・2016 年度中に外部評価委員 3 名による評価が行われた（寺西俊一・一橋大学教授、寺田良一・明治大学教授、堀尾正靱・東京農工大学名誉教授）。いずれも高い評価を受けた。たとえば寺田良一氏は「アーカイブス、大部の年表 2 冊の刊行、3 つの国際会議開催と、2 カ国の組織との交流、研究分担者による活発な論文執筆や学会発表など、いずれを見てもアウトプットは文句なしに豊富であり、本研究助成が十分効率的に活用されていると判断する」と述べている。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・特になし
⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況
※2016 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2016 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を箇条書きで記入。
■【2016 年度中に応募した科研費等で採択された案件（金額は初年度交付額）】
・科研費 堀川三郎／基盤(B)1,500,000 円、成果公開促進費「学術図書」2,400,000 円
■【2016 年度中に応募した科研費等で採択されなかった案件】
・科研費 常盤祐司 基盤(B)、清水善仁 基盤(c)
・平成 28 年度地産地消型再生可能エネルギー面的利用等推進事業費補助金（経産省）
・トヨタ財団研究助成プログラム
・環境研究総合推進費
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・特になし

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

（３）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・特になし

【この基準の大学評価】

サステイナビリティ研究所では、ワークショップ、総合研究会、公開研究会が開催されており、いずれも多く参加者を得ており、一定の社会的評価を受けていると評価できる。ニューズレターや『サステイナビリティ研究』が発行されたほか、各研究員も多数の学会発表等を行っており、3 名の外部評価委員からも高い評価を得ている。科研費等の外部資金には、6 件申請し、そのうち科研費が 1 件採択されている。以上のことから研究所が適切かつ活発に運営されていると評価できる。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

Ⅲ 2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況

評価基準		研究活動
現状の課題・今後の対応等		2015 年度より、サステイナビリティ実践知研究機構という組織が新設され、サステイナビリティ研究所もその組織に統合された。外部資金の獲得については、その組織の中で検討していきたい。
年度末報告	執行部による点検・評価	以下の外部資金（添付）の獲得を目指した。しかしながら現時点では補助金の獲得に至っていない。 - 環境共創イニシアチブ・再生可能エネルギー事業者支援事業：2016 年 8 月申請 - 研究課題：法政大学メガ・ソーラー・システム事業化可能性調査（1000 万円/1 年） - 担当：壽福眞美（社会学部教授、兼担研究員）、谷口信雄（客員研究員） - トヨタ財団 2016 年度研究助成プログラム「社会の新たな価値創出をめざして」：2016 年 8 月申請 - 研究課題：気候変動の地域資源への影響とコミュニティ主導型適応のプロセス構築 - 担当：白井信雄（教授、専任研究員）＋近畿大学農学部、東京大学大学院農学生命科学研究科、総合地球環境学研究所、地球・人間環境フォーラム - 環境研究総合推進費：2016 年秋申請 - 研究課題：トランスフォーマティブ環境政策プログラムの開発に関する研究（2000 万円×3 年間）： - 担当：白井信雄（教授、専任研究員）＋名古屋大学、大日本コンサルタント株式会社、東京都市大学、名古屋市立大学 今後も外部資金を得るための補助金申請を積極的に進める所存である。

【2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

2015 年度に新設されたサステイナビリティ実践知研究機構に統合された。外部資金の獲得が継続して求められてきているが、統合により機構としての外部資金獲得を検討することが課題として挙げられていた。2016 年度はそれに基づいて 3 件の補助金申請を行ったものの残念ながら資金獲得には至らなかったが、研究所としての強みを活かした申請となっておりその活動は評価できる。

【大学評価総評】

サステイナビリティ研究所は 2013 年度に発足し、今年度は所長以下 21 名の兼担研究員、客員研究員、研究補助員（RA）で構成されており、環境サステイナビリティ実現のための理論的研究・事例研究やエネルギー戦略シフトによる地域再生に関する研究などの活動を行っている。2015 年度に、新設されたサステイナビリティ実践知研究機構に統合されたが、その後もシンポジウムや研究会等の開催、出版や論文発表など活動は活発に行われており、社会的に一定の影響力を持っていると高く評価できる。第三者による外部評価も継続的に行われており高く評価できる。全体的な事業目的は達成されているが、欲を言えば、国際シンポジウムの開催など、日本社会に限らず世界に向けた活動や情報発信も期待したいところである。外部資金獲得については、継続的に求められていることではあるが、サステイナビリティ実践知研究機構全体として組織的な外部資金獲得に向けた取り組みを期待するとともに研究所としての活発な活動の継続も期待したい。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

I 2016 年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2016 年度大学評価結果総評】

エコ地域デザイン研究センターの理念・設置の目的に基づき、国内のみならずドイツや EU におけるグリーンインフラの都市計画への反映状況や、日本での自然、歴史、伝統産業・文化を現代に活かすまちづくり等の日本の地方都市が目指すべき方向性を明示するシンポジウムやセミナーも開催し、研究成果及び外部資金の応募獲得実績も良好であり、評価できる。研究成果に対する社会的評価は、外部からの組織評価でも十分行われている。本研究センターの特色の 1 つである水都研究に関する活動を充実させ、一層の社会への発信力の向上に向けた地域性のある国内外への取り組みが期待される。また、新規外部資金の獲得により、新規分野での発展性への期待も多く、今後の内部質保証のさらなる充実のための検討も併せてお願いしたい。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400 字程度まで）

2016 年度は大学評価委員より、事業遂行内容、内部質保障、外部資金獲得実績という基準において、その体制が概ね良好であると評価を得た。加えて、当センターのこれまでの研究成果を活かした社会に対する発信力、国内外での幅広い取り組みに、大きな期待が寄せられている。こうした評価結果を受けて、今年度は、これまでの良好な体制を維持しつつも、さらなる発展を目指すために、方向性、ビジョンの再検討を実施してきた。そのため、月に一回開催される運営委員会では、今後の当センターのビジョンについてブレインストーミングを実施し、来年度以降の活動内容や、外部資金獲得のための基礎を固めることに努めてきた。恒例の年度末報告会は、こうしたビジョンを打ち出していくために、あえてシンポジウム形式で実施し（「都市と地域の思想の転換点」）、センターの今後の戦略を広く社会に向けてアピールすることに取り組んできた。

【2016 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況の評価】

エコ地域デザイン研究センターでは、前年度の大学評価委員会の評価結果を受けて、更なる発展を目指すために、方向性、ビジョンの再検討がされてきた。恒例の年度末報告会では、こうしたビジョンを打ち出していくために、「都市と地域の思想の転換点」をテーマとしたシンポジウム形式で実施し、センターの今後の戦略を広く社会に向けてアピールすることに努められてきた。外部資金獲得のための努力を含めて、これらは優れた取り組みであると評価したい。

II 自己点検・評価

1 内部質保証

（1）点検・評価項目における 2016 年度の現状

1.1 内部質保証システム（質保証委員会等）を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

☒ はい ☐ いいえ

【2016 年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

- ・内部質保障に関する各種委員は、運営委員会において適切に活動している。
- ・運営委員会の構成委員は所長・副所長を含め 13 名の教員であり、議題に応じてはオブザーバーの参加も規定上認められている。運営委員会では各委員からの報告を受け、それにに応じて広く議論を行い、質の向上に努めている。

（2）特記事項

※上記点検・評価項目における 2015 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・来年度以降の活動の質的向上、外部資金獲得に向けて、月一回の運営委員会で、センターの今後のビジョンについてのブレインストーミングを実施し、質の向上に努めた。またその成果は、年度末報告会の議論を踏まえ、適宜校正を行い、ウェブ上で公開、発信することを予定している。	

【この基準の大学評価】

※上記（1）～（2）の記載内容に基づき基準全体の評価を記入。

エコ地域デザイン研究センターの内部質保証に関する各種委員会は、所長・副所長を含め 13 名の教員で構成されている運営委員会において活動しており、評価できる。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

2 研究活動

【2017 年 5 月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。
2016 年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。
①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）
※2016 年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。 ■日野プロジェクト ・仲田の森遺産発見プロジェクト支援「旧蚕糸試験場日野桑園 第一蚕室公開(東京文化財ウィーク企画事業)」 日時：2016 年 11 月 13 日（日） 主催：日野市教育委員会生涯学習課・緑と清流課・仲田の森遺産発見プロジェクト 協力：日野市郷土資料館／蚕糸の会・日野／まちかどの近代建築写真展実委員会・近代建築探訪メーリングリスト／首都大学東京大学院・建築プロジェクト研究コース／法政大学エコ地域デザイン研究センター／一級建築士事務所 COCOON 設計室 ・日野市中央公民館講座：「水都日野の歴史と今後～水の資産を活かした地域づくり」 講師：陣内秀信、日時：2016 年 1 月 26 日、主催：日野市中央公民館 ■源流プロジェクト ・2016 年度小菅村源流プロジェクト源流体験 ①古代大麦の種まき体験、日時：2016 年 11 月 26 日（土）、場所：大月市壬生 ②緑の小屋補修、日時：2016 年 11 月 27 日（日）、場所：小菅村 ■府中・多摩プロジェクト（LID+GI） ・水都府中研究会 ①歩く会第 8 回「国府から東海道へ」、日時：2017 年 1 月 14 日（土）、府中市高安寺及び町田市小野路ほか ・野川 GI 研究 ①第一回野川 GI 研究会、日時：2016 年 5 月 16 日（月）、場所：調布市たづくり映像ホール ②第一回世田谷 GI 研究会、日時：5 月 24 日、場所：世田谷区砧支所 3 階・集会室 D ③第二回世田谷 GI 研究会、日時：6 月 8 日（水）、場所：世田谷区砧支所 2 階活動フロア ④第三回世田谷 GI 研究会、日時：7 月 6 日（水）、場所：世田谷区砧支所 3 階・集会室 A・B ⑤日韓連携 GI 交流セミナー、日時：8 月 4 日（水）、場所：法政大学市谷校舎ボアードルーム 25 階 B ⑥第二回野川 GI 研究会、日時：2016 年 9 月 16 日（金）、場所：調布市たづくり大会議室 ⑦第三回野川 GI 研究会、日時：2016 年 11 月 24 日（木）、場所：調布市たづくり大会議室 ⑧第四回世田谷 GI 研究会、日時：12 月 6 日（火）、場所：世田谷区役所第 2 庁舎会議室 ■外濠市民塾 ・第 7 回外濠市民塾 日時：2016 年 4 月 24 日（日）、会場：土木学会、テーマ：「外濠の将来を考えよう」、参加：70 名 ・第 2 回外濠再生懇談会 日時：2016 年 1 月 19 日（木）、会場：法政大学市ヶ谷田町校舎 T311、参加：50 名 ・外濠アフタースクール(SAS) 外濠ランニングプロジェクト vol.1 日時：2016 年 7 月 17 日（日）、会場：江戸城外濠・牛込濠周辺、神楽坂、飯田橋 外濠ランニングプロジェクト vol.2 日時：2016 年 10 月 8 日（土）、会場：江戸所外濠・真田濠周辺。四谷 外濠ランニングプロジェクト vol.3 日時：2016 年 12 月 23 日（金）、会場：江戸城外濠・市ヶ谷濠周辺、四谷、市ヶ谷

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

- ・第41回法政大学大学院まちづくり都市政策セミナー『地域を経営する ―多様な主体によるローカルガバナンスに向けて― ポスターセッション「学生たちがフィールドへ ―地域づくりの活動実践・研究報告」』
日時：2016年10月22日（土）、会場：法政大学市ヶ谷キャンパス外濠校舎1階
- ・東京YMCAファミリーウォーク「江戸城外濠をめぐる―未完の都市公園とハイキング・コース」
日時：2016年11月23日（水）、主催：公益財団法人東京YMCA ※当センター研究員による活動報告を実施。

■千代田学

- ・大妻さくらフェスティバル2017―千代田学事業報告 ポスター参加―、2017年3月25日

■シンポジウム・講演会

- ・講演会『『水都史』で見る桐生の都市像』
日時：2016年12月13日、会場：桐生市商工会議所
講師：陣内秀信＋佐羽宏之（三立応用化工株式会社代表取締役社長）
主催：水都・桐生研究会、協力：法政大学エコ地域デザイン研究センター、後援：桐生市、桐生市教育委員会、桐生商工会議所
参加：約40名
- ・講演会「日野の用水の面白さを発見！～水都日野の歴史と今後、水の資産を活かした地域づくり」
日時：2016年11月26日、会場：日野市立中央福祉センター、講師：陣内秀信、主催：日野市中央公民館
- ・シンポジウム「第25回神田川サミット2016」
日時：2016年10月22日（土）13:00～16:30、会場：法政大学市ヶ谷キャンパス富士見ゲートG601
講師：陣内秀信、主催：神田川ネットワーク＋外濠市民塾、協賛：（特活）武蔵野多摩環境カウンセラー協議会
運営協力：法政大学エコ地域デザイン研究センター、
後援：東京都建設局、三鷹市、武蔵野市、杉並区、中野区、新宿区、文京区、中央区、台東区
参加：約120名
- ・日韓連携グリーンインフラ研究交流セミナー「釜山大学LID＋GI研究棟における試験をめぐる～今、GIに何が求められているか？」
日時：2016年8月4日（木）17:00～20:00、会場：法政大学市ヶ谷キャンパスボアソナードタワー25階B会議室
講師：釜山大学シン・ヒュンスク教授（釜山大学国土緑色研究所所長）、主催：法政大学エコ地域デザイン研究センター
参加：約30名
- ・講演会「倉庫リノベーションの現状とこれから」
日時：2016年7月7日、会場：日本大学理工学部まちづくり工学科、講師：大隈 哲、参加：約40名
- ・JIA 関東甲信越支部 アーキテツガーデン2016 「市ヶ谷・富士見・神楽坂 外濠をめぐる凹凸探検まち歩き」
日時：2016年6月25日（土）13:30～17:30、会場：法政大学市ヶ谷田町校舎マルチメディアホール
講師：北見恭一（新宿区文化観光課学芸員）、高道昌志
主催：日本建築家協会千代田地域会・新宿地域会、法政大学エコ地域デザイン研究センター
後援：新宿区、協力：東京理科大学神楽坂地域デザインラボ
参加：約20名
- ・第5回 JUDI 関東セミナー・シンポジウム「建築・まち・公共のリノベーション」
日時：2015年9月18日、会場：法政大学・市ヶ谷田町校舎
パネリスト：大隈 哲／江川直樹／韓亜由美、モデレーター：高見公雄
参加：約40名

■2016年度報告会

- ・法政大学エコ地域デザイン研究センター年次報告会「都市と地域の思想の転換点」
日時：2017年2月27（月）、会場：法政大学市ヶ谷田町校舎マルチメディアホール
参加：約60名

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

※2016 年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。

■刊行書籍

- ・難波匡甫『都市と堤防—水辺の暮らしを守るまちづくり』水曜社、2017 年 3 月 1 日

【概要】近年、東京の水辺再生の機運が高まりをみせているが、水害から地域を守る防潮堤が都市と水辺との関係性を阻害する要因となっている。本書では大阪との比較において、東京の防潮堤整備の背景や対策の特徴を明らかにするとともに、歴史や文化を含む地域形成史の視点から都市における堤防のあり方を問い直し、水辺の暮らしを守るまちづくりを喚起する。

■報告書

- ・JIA 日本建築家協会・再生部会（大隈哲ほか）＋東京弁護士会・歴史的建造物部会『今、ある良い建物を これからも使い続けていくために』既存建物を使い続けていくための諸制度見直し研究会、2016 年 9 月 10 日、公益財団法人トヨタ財団助成
- ・『アマルフィ海岸のヴィエトリ・スル・マーレ都市と分散集落からなるテリトリー』法政大学デザイン工部建築科陣内研究室、2016 年 8 月 15 日

■審査論文

- ・高道昌志「明治期東京の河岸地拝借人からみた地域構造の変容に関する研究～神田川の神楽河岸・市兵衛河岸・飯田河岸の周辺を対象に～」『日本建築学会計画系論文集』第 81 巻 730 号、2016 年 12 月、pp. 2849-2856.
- ・石渡雄士「関東大震災前後の横浜港における港湾施設の空間構成に関する研究 鉄栈橋と新港埠頭の上屋と倉庫を対象として」『日本建築学会計画系論文集』第 81 巻 729 号、2016 年 11 月、pp. 2561-2571.
- ・陣内秀信「水都史から見たヴェネツィアと東京の比較論」『都市史研究』3、2016 年 11 月、pp. 65-81.
- ・陣内秀信「アマルフィ海岸の真の豊かさ-自然と歴史が活かされる地域の底力-」『紫明』（特集：イタリア）第 39 号、2016 年 9 月、pp. 2-7.
- ・長野浩子「非農家市民による都市農地における活動とまちづくりに関する研究-日野市 S 農園の活動の事例より-」『日本建築学会計画系論文集』第 81 巻 725 号 2016 年 7 月、pp. 1531-1539.
- ・水田恒樹+陣内秀信「ウォーザン、マンチェスターの都市空間に関する分析と考察-米国北東部の水力工業都市の空間構造に関する事例研究-その 2」『日本建築学会計画系論文集』第 81 巻 722 号、2016 年 4 月、pp. 1037-1046.

■その他の論文

- ・潮優香子・高道昌志・松浦萌・福井恒明「九段地区花街の生業の実態と空間構成の変遷」第 12 回景観・デザイン研究発表会、2016 年 12 月 10-11 日（ポスター発表）
- ・芳賀徹也・福井恒明「公開空地の滞留特性と実態」『景観・デザイン研究・講演集』No. 12、土木学会、2016 年、pp. 1-6
- ・渡邊翔太・福井恒明「新聞記事にみる東京山の手河川と江戸城外濠」『景観・デザイン研究・講演集』No. 12、土木学会、2016 年、pp. 208-215
- ・坂元泰平・福井恒明「地域史の時空間表現-千代田区番町・麹町地区を対象として-」『景観・デザイン研究・講演集』No. 12、土木学会、2016 年、pp. 316-319

■その他の刊行物

- ・長野浩子「日野用水と市民・行政・大学の関わり」『日野用水開削 450 年！ - 昨日と今日、そして明日へ』日野市発行、2017 年 3 月発行予定
- ・大隈哲＋池田浩大（企画・編）『ウェアハウス スタイル 2』樫出版社、2016 年 10 月 30 日
- ・高橋賢一＋橋本千代司「市民の協働による水田・用水路保全対策」、『都市農地とまちづくり第 71 号』一般財団法人都市農地活用支援センター、2016 年 10 月、pp. 20-25

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

- ・特になし

③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）

※研究所のこれまでに発行した刊行物に対して 2016 年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や 2016 年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を箇条書きで記入。

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

・特になし
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・特になし
④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）
（～400 字程度まで）※2016 年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。 当センターでは、月一回の頻度で運営委員会を実施している。運営委員会の構成委員は所長・副所長を含めた 13 名の教員と、議題に応じてはオブザーバーの参加も規定上認められている。そのため、運営委員会では各委員からの報告に対し、学内外を問わず、幅広い立場の方々からの意見や指摘を受ける体制が整っている。加えて、各プロジェクトでは、地元の町会や企業、行政との連携が取られているため、事業内容についてその都度評価を受ける柔軟な体制が築かれている。
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・特になし
⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況
※2016 年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および 2016 年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を簡条書きで記入。 ・千代田学「千代田区デジタルアトラスの活用～歴史文化と賑わいに関するコンテンツ充実～」2016 年 4 月～2017 年 3 月、2016 年度事業額：663,000 円 ・境港市委託研究「港と妖怪のまち境港街づくり研究」2016 年 4 月～2017 年 3 月、2016 年度事業額：776,628 円
【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。
・特になし

（２）特記事項

※上記点検・評価項目における 2016 年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、簡条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・各プロジェクトは、昨年度までのネットワーク、成果を活かしながら、着実に前進を続けている。 特に、外濠市民塾プロジェクトでは、これまでの大学、地元、行政、企業の連携に加え、地元の高校（三輪田学園）との交流がはじまったことが特筆される。	

（３）現状の課題・今後の対応等（任意項目）

※（１）～（２）の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について簡条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・昨年度までの大型外部資金（科研基盤 S）による調査研究の成果が、今年度の審査論文、並びに報告書の刊行に繋がった。書籍、論文の精力的な刊行を継続するため、次年度以降も外部資金の獲得が求められる。

【この基準の大学評価】

エコ地域デザイン研究センターの研究・教育活動実績は、「日野プロジェクト」等、複数のプロジェクトや多くのシンポジウム開催や刊行物、審査論文など多岐にわたっており、高く評価できる。 外部資金についても 2 件獲得しているが、一層の充実が望まれる。 研究成果に対する社会的評価の確認と外部からの組織評価も今後の検討課題と思われる。 新たなビジョンと構想に基づき、さらなる飛躍が期待できる。
--

Ⅲ 2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況

評価基準	研究活動
現状の課題・今後の対応等	・日野プロジェクトでは、これまでの成果を生かしながら、養蚕・絹をテーマに外部資金を獲得し、実践的な活動を伴いながら、より一層盛り上げていくことが必要。 ・外濠プロジェクトもエコ研の柱として据えていく。全国の城下町との比較や、地方城下町を水都の視点(水利、産業、遊び)から評価し、全国的な活動へと繋げていく。 ・次のステップを目指して、新しい構想と意味づけ、そして普遍性を備えた切り口を開拓し

※注 1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注 2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。

		ていくことが求められる。 ・海外との比較は引き続き継続。
年度末報告	執行部による点検・評価	・日野では、エコ地域デザイン研究センターが関わる、仲田の森遺産発見プロジェクトチームが中心となり、旧蚕糸試験場が登録有形文化財に指定されるなど、大きな動きが見られた。 ・外濠プロジェクトでは、神田川サミットの開催などを通じて、活動のネットワークをさらに広げることに成功した。この成果を足掛かりに、全国の城下町との連携など、研究活動の幅を広げていきたい。 ・来年度の私立大学ブランディング事業の申請に向けて、当センターと国際日本学研究所での共同ワークショップを開催してきた。これまでエコ研が培ってきた成果や考え方をさらに押し広げ、江戸東京に内在する普遍的な価値を読み解くため、その足場を固める議論を行ってきた。 ・毎年恒例となっている年度報告会では、これまでと趣向を変え、エコ研の次のステップを切り開くためのテーマを設定し執り行った(テーマ「都市と地域の思想の転換点」)。 ・韓国釜山大学と合同セミナーを開催するなど、海外との比較研究には引き続き取り組んでいる。また、上記の私立大学ブランディング事業に向けてのワークショップでは、江戸東京を海外の都市と積極的に比較していくことが重要なテーマであることを再確認している。

【2016 年度における現状の課題等に対する取り組み状況の評価】

・日野では、エコ地域デザイン研究センターが関わる、仲田の森遺産発見プロジェクトチームが中心となり、旧蚕糸試験場が登録有形文化財に指定されるなど、大きな動きが見られた。 ・外濠プロジェクトでは、神田川サミットの開催などを通じて、活動のネットワークをさらに広げることに成功した。 ・私立大学研究ブランディング事業の申請に向けて、当センターと国際日本学研究所での共同ワークショップを開催したが、江戸東京を海外の都市と積極的に比較していくことが重要なテーマであることを再確認した。 ・年度報告会では、エコ研の次のステップを切り開くためのテーマを設定し執り行った(テーマ「都市と地域の思想の転換点」)。 ・韓国釜山大学と合同セミナーを開催するなど、海外との比較研究には引き続き取り組んだ。 上記の取り組みは、今後効果が期待される。

【大学評価総評】

エコ地域デザイン研究センターの取り組みについては、方向性、ビジョンの再検討をはじめ、概ね評価できる。外部資金の調達努力が、今後幅広い活動に繋がっていくのではないかと期待する。
--

※注1 回答欄「はい・いいえ」は基盤的・条件整備的・法令順守的な点検項目に適用し、回答欄「S・A・B」はより踏み込んだ内容の点検項目に適用。

※注2 「S・A・B」は、前年度から「S：さらに改善した、A：従来通り、B：改善していない」を意味する。